

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (6)
— 『キエフ年代記集成』 (1159 ~ 1172 年)

中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香

富山大学人文学部紀要第 66 号抜刷

2017年2月

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (6) — 『キエフ年代記集成』 (1159 ~ 1172 年)

中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香

6667 [1159] 年

ボリス・ユリエヴィチ [D170] が逝去した¹⁾。5月2日²⁾のことだった。兄弟たちが、聖殉教者〔ボリスとグレーブ〕教会に〔遺体を〕安置した。〔この教会は〕、かれ〔ボリス〕の父ユーリイ [D17] がキデクシャ³⁾ (Кидекша) のネルリ川河岸に建立したもので⁴⁾、そこには、かつて殉教聖人ボリスとグレーブが宿営を置いた場所だった⁵⁾。

この年、ロストフ人⁶⁾ とスーズダリ人が、主教レオン⁷⁾ (Леон) を追放した。なぜなら、かれ

-
- 1) ボリス [D170] は、ユーリイ手長公 [D17] がキエフ公になった直後の 1155 年にトゥーロフの公座に据えられたが、ユーリイが 1157 年 5 月に没した後、トゥーロフを退去したと思われる [イパーチイ年代記 (5) : 303 頁, 注 420]。その後、ボリス [D170] がどこの公座に移ったかについての記録はないが、故郷のスーズダリ地方に帰り、キデクシャに居住していたのかもしれない。かれが埋葬された、ボリス・グレーブ教会は、かれ自身の守護聖人 (殉教聖人ボリス) にちなんでおり、ユーリイ [D17] は、息子ボリス [D170] のために (その封地のしるしとして)、この教会を建てた可能性もある。
 - 2) 1159 年 5 月 2 日のこと。
 - 3) 「キデクシャ」(Кидекша) は、スーズダリの町からは東へ約 4km の位置にある城市。カメンカ川 (Каменка) がネルリ川 (Нерль) (クリヤジマ川支流) に注ぐ合流点にあり、現在も同名の村がある。
 - 4) 建立の年代については、15 世紀のロストフの地方年代記『ティボグラフ年代記』(Типографская летопись) の 6660(1152) 年の記事に、この「教会が建てられた (постави)」と記されている。[ПСРЛ 24, 2000: С. 77]
 - 5) 16 世紀に編集された『階梯書』(Степенная книга) の第 5 段 12 章には、ユーリイ [D17] が建設した聖堂の一つとして「ネルリ河岸のキデクシャに聖ボリス＝グレーブの石造りの教会を建てた。そこは、二人がキエフに行くとき、ボリスはロストフから来て、グレーブがムーロムから来て、合流して宿営した場所だった」[Степенная книга 2012: С. 169-170] と解説的な記述が加えられている。
 - 6) 「ロストフ人」(ростовци) は、フレーブニコフ写本の読みを採用した。イパーチイ写本では「ノヴゴロド人」(новгородьци) となっているが、文脈や『ラヴレンチイ年代記』の並行記事も「ロストフ人」(ростовци) であることから判断して、ここは「ロストフ人」が本来の読みと考えられる。
 - 7) レオンは、1158 年にロストフの主教に任じられた ([イパーチイ年代記 (5) : 303 頁, 注 417])。

は教会の数を増やして⁸⁾、司祭たちから収奪したからである⁹⁾。

この年¹⁰⁾、ログヴォロド・ボリソヴィチ [L11]¹¹⁾ は、自分の領地を要求するために¹²⁾、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] のもとから出発した。かれ〔ログヴォロド〕はスヴァトスラフ [C43] の部隊を〔遠征に〕連れて行った。なぜなら、かれ〔ログヴォロド〕の兄弟たちは¹³⁾、かれ〔ログヴォロド〕に温情を示さず、かれ〔ログヴォロド〕が支配していた領地とすべての資産を略取したからだった。

8) ここで「教会の数を増やした」(умножить бьяше церкви) ことが非難されている。この追放の理由について、シチャーポフは、当時は聖堂の数に比例して主教座が管内の教区(司祭)に教会税(подаць)を課す制度があり、レオンはこれを悪用して、私腹を肥やしたのではないかと推定している [Щапов 1989: C. 187]。また、ヴォローニンも同様の見解を示している。[Воронин 1962: C. 40]

9) 上の記事との時系列から見ると、この主教レオン追放は、1159年夏頃のことと考えられる。なお、追放されたレオンは1162年にスーズダリに戻ってくるが、「レオン異端事件」を引き起こして、再度追放されることになる。下注 283 参照。

10) 以下に詳しく述べられるログヴォロド [L11] の遠征、ポロツク地方の戦乱と、それに続くノヴゴロド主教アルカージイについての記述などから判断して、1158年春～8月にかけての出来事と推定することができる。直前のボリス [D170] の死と主教レオン追放の記事(スーズダリ情報)の年紀が1159年であるのに対して、およそ1年の年代がさかのぼることになる。これは、『イパーチイ年代記』の編集の過程で生じた、時系列の混乱と考えるべきだろう。

11) ログヴォロド [L11] は、1151年まではポロツク公だったが ([イパーチイ年代記] (2): 329頁, 注 244 参照)、この年にポロツクの住民の反乱によって捕らえられ、しばらくミンスクに幽閉されていた ([イパーチイ年代記] (5): 238頁, 注 81 参照)。この一節から、その後ログヴォロド [L11] はミンスクから離れて(逃げ出して?)、この頃(1158年)まではチェルニゴフ公スヴァトスラフ [C43] の庇護の下に置かれていたことが分かる。

12) 「自分の領地を要求する」とは、旧領であるポロツクの地を回復するための軍を起こしたということだろう。

なお、ログヴォロド [L11] が、1151年にポロツクの住民に捕らえられて、ミンスクに連行されたあと、ロスチスラフ [L52] がポロツクの住民によって公に据えられ、さらに、ポロツク人はスヴァトスラフ [C43] に使者を派遣して、その庇護を求め、かれを「自分たちの父として従属する」約定を結んでいる ([イパーチイ年代記] (5): 238頁, 注 82))。スヴァトスラフ [C43] が、ログヴォロド [L11] の遠征を許したということは、この約定が反故にされたということを意味する。

13) 「兄弟たち」とは、ログヴォロド [L11] 追放のあとにポロツク公になったロスチスラフ [L52] とその兄弟であるフセスラフ [L51]、ヴォロダリ [L53] 等を指しているのだろう。

〔ログヴォロドは〕スルチェスク (Случьск) へやって来ると¹⁴⁾、ドルツク人¹⁵⁾のもとに使者を派遣し始めた。ドルツク人はかれの〔到来に〕喜んで、かれを出迎えにやって来て、かれを自分の味方として受け入れて、こう言った。「公よ、時を失することなく来られよ。われらはあなた〔が来たことを〕喜んでい。われらが子供たちとともに、あなたのために戦うことになっても、われらはあなたのために喜んで戦うでしょう」。こうして、300人以上のドルツク人とポロツク人¹⁶⁾が、〔ドルツクの〕城を出て、かれ〔ログヴォロド〕を出迎えた。かれは、〔ドルツクの〕城市に大なる名誉をもって入城した。〔ドルツクの〕人々はかれ〔の到来に〕喜び、グレーブ・ロスチスラヴィチ [L521] を追放し¹⁷⁾住民たちはかれの館とかれの従士団〔の財産を〕掠奪した。グレーブ [L521] は、父親のもとへと逃げた¹⁸⁾。

城市〔ポロツク〕では、**[494]** ポロツク人のあいだで大きな騒乱が起きた。多くの者がログヴォロド [L11] を〔公として〕望んでいたからである。ロスチスラフ〔・グレーボヴィチ〕 [L52] は、なんとか人々を鎮め、かれらに多くの贈物を与えると、かれらに十字架接吻をさせて〔自分への忠誠を誓わせた〕¹⁹⁾。そして、自分自身は、フセヴォロド [L51]、ヴォロダリ [L53] 及びすべての兄弟たちをともなって、ログヴォロド [L11] を討伐するためにドルツクへと向かった。

その時、ログヴォロド [L11] は〔ドルツクの〕城市に籠城していた。かれらは激しく戦い、双方の陣営の多くの者が斃れた。ドルツク人は大いに憤慨した。

そして、ロスチスラフ [L52] は、ログヴォロド [L11] と和を結び、互いに十字架接吻をして〔和議の遵守を誓った〕。〔ロスチスラフは〕、ログヴォロド [L11] に領地²⁰⁾を与え、兄弟たちと

14) スルチェスク (Случьск) (現在のスルツク (Слуцк)) は、ミンスクの南方約 100km に位置している。チェルニゴフを出てポロツク地方を攻めるためには、プリピャチ川に近いこの城市は立地がよかった。さらに、1149 年の記事にあるように、スヴァトスラフ [C43] は、従兄弟のイジャスラフ [C35] からスルチェスクを初めとするドレゴヴィチの地を取り上げており ([イパーチ年代記 (4) : 322 頁, 注 5]), 1149 年以降この年 (1159 年) に至るまで、スルチェスクはスヴァトスラフ [C43] のドレゴヴィチ地方 (プリピャチ川北側の一帯) における根拠地だったことが分かる。ログヴォロド [L11] は、スヴァトスラフ [C43] の支援を得て、この城市をポロツク遠征の拠点としたのである。

15) 「ドルツク人」(дрыючане) は、城市ドルツク (Дрыюцк; Друцк) の住民のこと。ドルツクは、スルチェスク (スルツク) から北東へ約 205km の場所にあり、ポロツク公領の南の国境に位置している。スルチェスクから、ポロツクを攻略するには、まず味方につけておくべき位置にあった。

16) このポロツク人 (полочане) は、親ログヴォロド派のポロツク人の集団で、当時ドルツクにいわば亡命移住して、そこに滞在していた者たちを指すのだろう ([Алексеев 1966: С. 270] 参照)。

17) 当時、グレーブ [L521] の父ロスチスラフ・グレーボヴィチ [L52] はポロツク公であり、ポロツク地方の南辺の附属城市ドルツクに息子のグレーブ [L521] を支配公として派遣していたことがわかる (上注 12 参照)。

18) グレーブ [L521] は、ドルツクから北北西へ 140km ほど離れた、父ロスチスラフ [L52] が支配する城市ポロツクへと逃げたのである。

19) この十字架接吻の誓いは、ポロツク住民によってすぐに破られることになる。

20) ドルツクの城市のこと。

ともに〔ポロツクへと〕帰還した。

この年、ポロツク人たちは、自分の公、ロスチスラフ・グレーボヴィチ [L52] に対して大いなる謀議をなした。かれらは、十字架接吻[による忠誠の誓い]を破ったのである。なぜなら、かれらは、かれ〔ロスチスラフ公〕に対して、「あなたは、われらの公である。どうか、神がわれらとあなたを共に居させてくださいますように。あなたに対するいかなる裏切りも、十字架接吻への裏切りも行いません」と〔誓った〕のだから²¹⁾。

ところが、かれら〔ポロツク人たち〕は、自分たちが言ったことに違反して、ドルツクのログヴォロド・ポリソヴィチ [L11] のもとに密かに使者を派遣して、かれにこう言った。「われらが公よ、われらは神とあなたに対して罪を犯しました。理由なくあなたに反抗して、あなたの財産と従士団をことごとく掠奪しました。そして、あなた自身を捕まえて、グレーブ [L5] の息子たちに引き渡して、大きな苦難に遭わせたのですから²²⁾。もし、今では、われらが無知ゆえに起こしたことを水に流して **[495]**、われらに、十字架接吻〔の誓いを〕されるのであれば、われらはあなたの臣民であり、あなたはわれらの公です。われらは、ロスチスラフ [L52] を捕まえて、あなたの手に引き渡します。あなたは、好きなようにかれを始末して下さい」。

ログヴォロド [L11] は、かれら〔使者のポロツク人〕に対して、すべてを水に流すことを十字架接吻して〔誓い〕、かれらを〔ポロツクへと〕帰郷させた。

ポロツク人の中にはロスチスラフ [L52] の支持者たちがいて、かれ〔ロスチスラフ〕を捕えようとする〔陰謀があるとロスチスラフに告げた〕。ペトロの日²³⁾に、かれを古い聖母教会²⁴⁾での祝いの宴²⁵⁾に悪巧みをめぐらせて呼び出し、そこで捕まえようとしていると。かれ〔ロスチスラフ〕は、服の下に甲冑をまとして、かれら〔ポロツク人〕のところに出かけた。そのため、かれらは、敢えて〔公を捕らえる〕ことはできなかった。

21) 先に、ロスチスラフ [L52] が贈物によってポロツクの住民を懐柔して、宣誓させたことを指している（上注 19 参照）。

22) これは、1151 年にポロツクの住民がログヴォロド [L11] をポロツクから追放したときのことを言っているのだろう。（[イパーチイ年代記 (5): 238 頁, 注 82] 参照）

23) 6 月 29 日に相当している。年代は 1158 年のことで、前の記事よりも一年ずれている。

24) グラニンによれば、このポロツクの「古い聖母教会」は現存していないもので、チェルニイ・ポトク川左岸に立地していたと考えられている。[Goranin 1995: p.140, n. 883].

25) 「祝いの宴」は原文では *братьщина* で、大きな聖人の記念日（ここでは聖使徒ペトロの祭日）に人々（ここではポロツクの有力者たち）が宴席に集い、併せて共同事業の募金を行う（ここでは聖堂の建設・補修など）行事のこと。キリスト教導入以前から存在した共同体の風習で、ロシアでは *братчина* の名で、聖ニコライ、大天使ミハイルの祭日などに農村で広く行われるようになった。[Древняя Русь 2015: С. 88]

その翌日、〔ポロツク人たち〕は、かれ〔ロスチスラフ〕をおびき寄せようとして言った。「公よ、われらのもとに来たれ。われらには、あなたと話すことがある。われらのもと、〔ポロツクの〕城市へと来たれ」。なぜなら、この時、公〔ロスチスラフ〕はベルチツァ²⁶⁾ (Бѣлчица) に滞在していたからである。ロスチスラフ [L52] は、〔ポロツク人の〕使者たちにこう言った。「昨日、わしはそなたたちのもとにいたではないか。なぜ、そのとき、わしに話をしなかったのだ。お前たちにはどんな話があるというのだ」。しかしながら、かれ〔ロスチスラフ〕は、裏切られることなどなら疑わずに、かれらのいる〔ポロツク〕城内へと向かった。すると見よ、ひとりの下級従士が、城市から出てきてかれを迎え、こう言った。「公よ、行かないで下さい。城内では民会が行われ、あなたの従士たちは撃ち殺されており、あなたを捕らえようとしています」。

〔ロスチスラフは〕引き返すと、ベルチツァにすべての従士たちを集め、そこから部隊を組んで、兄弟のヴォロダリ²⁷⁾ [L53] がいるミンスクへと〔討伐のために〕出発した。かれら〔ロスチスラフの部隊は〕ポロツク〔地方〕の領地に対して多くの悪行【496】をなし、家畜を掠奪し、奴隷を捕獲した。

ポロツク人は、ログヴォロド [L11] を招聘するために、ドルツクへ使者を派遣した。ログヴォロド [L11] は、7月にポロツクに入城し、自分の祖父、自分の父の公座に、大いなる名誉をもって座した。ポロツク人はこれを喜んだ。

その後、ログヴォロド [L11] は、多くのポロツク人を兵として召集した²⁸⁾。ロスチスラフ・ムスチスラヴィチ [D116:J] は、二人の息子、ロマン [J1] とリュウリク [J2] を、かれ〔ログヴォロド〕のための〔援軍として〕派遣した²⁹⁾。ヴネズダ³⁰⁾ (Внѣзда) も、スモレンスク人、ノヴゴ

26) 「ベルチツァ」(Бѣлчица) は、マフノヴェツの地名索引によると、ポロツク内城(ソフィア聖堂)からドヴィナ川を挟んで西へ1kmほど離れた、ドヴィナ川左岸のベリチツァ(Бельчина)という小川が流れ込む当たりの、公の居館があった場所の名称。

27) ヴォロダリ [L53] は、1151年に兄弟のミンスク公ロスチスラフ [L52] がポロツクに招かれてポロツク公になった跡を襲って、1151年からミンスクで公支配をしていた。

28) ポロツク公に就いたログヴォロド [L11] は、それまでグレーブ [L5] の息子たちが支配していたポロツク地方の諸城市を攻略して配下におさめ、ポロツク地方の支配を固めるための遠征を企てたのである。

29) スモレンスク地方(公領)はポロツク地方(公領)ともしっかり広い範囲で隣接しており、スモレンスク公(ロスチスラフ [D116:J])にとって、ポロツクの政治情勢は重要な関心の対象だったはずである。ログヴォロド [L11] の一連のポロツク奪還の行動は、チェルニゴフ公スヴァトスラフ [C43] の支持と援助によって実現しており(上注14参照)、ログヴォロドはさらに、当時スヴァトスラフ [C43] との関係が良好だったスモレンスク公ロスチスラフ [D116:J] にも、何らかの約束と引き替えに援助を求めたのだろう。

30) 「ヴネズダ」(Внѣзда) もしくは「ヴネズド」(Внѣзд) の名は、6676(1168)年の記事に、ロスチスラフ [D116:J] に仕える上級家臣として言及されている(下注400参照)。ここでも、ロスチスラフが派遣した援軍を指揮した軍司令官として名が挙げられているのだろう。

ロド人、ブスコフ人³¹⁾も〔派遣された〕。かれ〔ロスチスラフ [D116:J]〕自身も出陣したが、ノヴゴロドの主教アルカージイ (Аркадеи) が、かれ〔ロスチスラフ〕を戻らせた³²⁾。〔アルカージイは〕キエフを出発した³³⁾。

〔ログヴォロド勢は〕ロスチスラフ [L52] を討つべくミンスクへ向けて進軍した³⁴⁾。かれらは、最初に、フセヴォロド [L51] を討つためにイジャスラヴリ³⁵⁾ (Изяславль) に向かった。フセヴォロド [L51] は、イジャスラヴリ城内に籠城した。〔ログヴォロド勢は〕城市を包囲した。フセヴォロド [L51] はかねてより、ログヴォロド [L11] に大なる親愛³⁶⁾を抱いていたので、この親愛に希望を託して、ログヴォロド [L11] のところに向向いて、拝礼した。

ログヴォロド [L11] は、イジャスラヴリ〔の城市〕をブリャチスラフ³⁷⁾ [L222] に与えた。〔この城市は〕かれ〔ブリャチスラフ〕の父の地だったからである。〔ログヴォロドは〕、フセヴォ

31) 当時ノヴゴロドの公座には、ロスチスラフ [D116:J] の息子のスヴァトスラフ [J4] が就いていた。「ノヴゴロド人、ブスコフ人」は、かれが父親のために派遣した部隊のことだろう。

32) 1153年に自ら創建したノヴゴロドの聖母就寝修道院(アルカージイ修道院)の典院を勤めていたアルカージイは、前任の主教ニフォントの死(1156年4月)の後まもなくノヴゴロド市民によって主教に選出され、その年の夏には叙任のためにキエフに赴いた。しかし、府主教コンスタンチンから正式に叙任されたのは1158年8月上旬のことで、その間の約2年の間、キエフ滞在を余儀なくされた。アルカージイが、スモレンスクから出陣したロスチスラフ [D116:J] を、「戻らせた」(вороти и)のは、ちょうど叙任を受けたばかりの1158年8月頃のことだろう。当時のノヴゴロド公はロスチスラフの息子スヴァトスラフ [J4] であり、ロスチスラフは、ポロツク情勢よりも、ノヴゴロド統治の安泰を優先して、新たなノヴゴロド主教を支持、庇護するために帰郷したのではないか。([Православная энциклопедия: Аркадий Новгородский])

33) 『ノヴゴロド第一年代記』によれば、主教アルカージイは、1158年9月13日にノヴゴロドに帰郷している。「キエフを出発し」たアルカージイの行き先はノヴゴロドだった。

34) ポロツクの住民によってポロツクを追われたロスチスラフ [L52] は、兄弟ヴォロダリ [L53] がいるミンスクへ身を寄せたのである。

35) 「イジャスラヴリ」(Изяславль) はミンスクから北西約30kmにある現在のザスラヴリ(Заславль)のことで、ポロツク公領としては付属城市的な役割を果たしていた。ログヴォロド [L11] の立場からすれば、兄弟の中でも地位の低いフセヴォロド [L51] が支配しているイジャスラヴリは守りも弱く、手始めに攻略する目標としては最適だったのだろう。

36) 「親愛」(любовь) の語は以下でも頻出するが、年代記では「味方であること」「同盟関係にあること」を意味している。

37) ブリャチスラフ・ヴァシリコヴィチ [L222] については、ここが初出。後の記事によれば、このイジャスラヴリの城市は、ブリャチスラフの兄弟のヴォロドシャ [L224] にも与えられ、ここで1年ほど共同統治をした後に、グレーブの息子たち〔ロスチスラフ [L52] とフセヴォロド [L51]〕に占拠されて、ブリャチスラフ [L222] とヴォロドシャ [L224] は監禁されてしまう(下注144, 145)。

ロド [L51] にはストレジェフ³⁸⁾ (Сьтрѣжев) を与えた。

そして、〔ログヴォロドは〕そこ〔イジャスラヴリ〕から、ミンスクへ向けて出発した。ミンスク〔を包圍して〕10日間陣を張り、それから、ロスチスラフ [L52] と和を結び、十字架接吻〔の誓いを〕して、〔ポロツクへと〕帰陣した。他方、ヴォロダリ [L53] は〔この条件で〕十字架接吻をせず、リトアニア近郊の森の中を行軍していた³⁹⁾。

この年、ガーリチのヤロスラフ [A1211] は、自分の父方の伯父の息子〔従兄弟〕イワン・ロスチスラヴィチ [A1221]〔の身柄〕を求め始めた⁴⁰⁾。【497】なぜなら、ヤロスラフ [A1211] は、ルーシの諸公、〔ハンガリー〕王⁴¹⁾、ポーランド公⁴²⁾ に対して、イワン [A1221] と対抗するときには、援助をするよう密かに依頼をしており、皆がこれをかれ〔ヤロスラフ〕に約束していたからである。

〔一同は〕キエフのイジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] に、それぞれ使者を派遣した。すなわち、ガーリチのヤロスラフ [A1211] は、イズビグネフ⁴³⁾ (Избигнѣв) を〔派遣した〕。スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] はジロスラフ・イヴァンコヴィチ⁴⁴⁾ (Жирослав Иванкович) を〔派

38) 「ストレジェフ」(Сьтрѣжев: Стрежев) は、ドニエプル川右岸の城市で、現在のベラルーシの町ストレシン(Стрешин)に相当し、ポロツク公領の南東の端に位置している。ミンスクからだと南東方向に215kmも離れている。これをフセヴォロド [L51] に与えたとは、降伏したかれを遠隔地へ追いやったということだろう。

39) 当時は「リトアニア」という国家は当時まだ存在せず、ここでは部族名を指している。リトアニア人はバルト系部族の一派で、史料上では『クヴェードリンブルク年代記』の1109年の項に初めて現れる。ミンスクより東のネマン川とヴィスワ川の上流域は、かれらが居住する森林地帯だった。

1162年の記事では、ヴォロダリ [L53] はゴロデツ(Городец; Городок)公となっていることから(下注271)、かれは、「森の中の行軍」の末に、この城市を攻略して、自らがその公座に就いたことなる。

40) このイワン・ベルラドニク [A1221] は、1157年にユーリイ [D17] がガーリチのヤロスラフ [A1211] にその身柄を引き渡そうとしたのを、イジャスラフ [C35] が途中で捕らえて保護し、チェルニゴフへ連行して自分の庇護のもとに置いている〔イパーチイ年代記(5): 298頁〕。イジャスラフ [C35] がキエフ公になってからは、イワン [A1221] は、おそらくキエフに住んでいたのだろう。ヤロスラフ [A1211] は、かつてユーリイ [D17] に求めたイワン [A1221] の身柄引き渡しを、諸公や外国の君主の支援(威力)を背景にして、キエフ公イジャスラフ [C35] に対して再度求めたのである。

41) 当時のハンガリー王はゲーザ二世。

42) ポレスワフ四世(巻毛公)(ポーランド大公在位1146年~1173年)を指している。

43) 歴代の公に仕えたガーリチの上級家臣。〔イパーチイ年代記(5): 243頁, 注104〕参照。

44) このジロスラフ(Жирослав)については、1146年の記事にヴァチエスラフ [D16] の代官として言及され〔イパーチイ年代記(2): 348頁〕, 1147年の記事ではグレーブ〔イパーチイ年代記(3): 361頁, 注169〕に仕える貴族として、1155年の記事ではユーリイ [D17]〔イパーチイ年代記(5): 282頁, 注297〕の配下の人物として名が挙げられている。いずれもキエフ大公とその近くに仕えてきたことから、キエフの在地の貴族だったのか。その意味では、ここで、チェルニゴフ公のスヴァトスラフ [C43] に仕えているのは不思議である。

遣した]。ロスチスラフ・ムスチスラヴィチ [D116:J] とムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] は、ジロスラフ・ヴァシーリエヴィチ⁴⁵⁾ (Жирослав Васильеви) を〔派遣した〕。ヤロスラフ・イジャスラヴィチ [I2] は、オノフリイ⁴⁶⁾ (Онофрий) を〔派遣した〕。ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] は、ガヴリーロ・ヴァシーリエヴィチ⁴⁷⁾ (Гаврило Васильевич) を〔派遣した〕。スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] は一人のキエフ人を⁴⁸⁾〔派遣した〕。〔ハンガリー〕王は自分の家臣を、ポーランドからも自分の家臣たちを、それぞれ〔使者としてキエフに〕派遣した。

イジャスラフ [C35] は、これら〔の使者たち〕全員と論争して、かれらに回答を与えて、帰らせた。

その頃、イワン [A1221] は驚き慌てて、原野のポロヴェツ人のところに行き⁴⁹⁾、ポロヴェツ人を伴ってやって来ると、ドナウ川流域の諸城市に布陣した⁵⁰⁾。そして、二隻の海洋船⁵¹⁾を捕獲し、積載されていた多くの物資を掠奪した。またガーリチ地方の漁民に対して悪行を働いた。

45) この人物は父称をともなった敬称で言及されていることから、高位の貴族だったのだろう。

46) 当時ヤロスラフ [I2] はルチェスクの公であり、この「オノフリイ」(Онофрий) (正書法で Онуфрий) はルチェスクの高位の修道士もしくは司祭と推定される。

47) 当時、ウラジーミル [D181] は、ドロゴブージュもしくはペレソプニツァの支配公、この「ガヴリーロ」(Гаврило) はかれの側近貴族だろう。

48) イバーチイ写本の読みによった。フレーブニコフ及びボゴージン写本では、「キエフ人を」(киянина) の後に「王はポロヴェツ人のところに家臣を派遣し、ポロヴェツ人は家臣と激しく戦った。家臣は戻ってきた」(корол мужа посла к половцем, и половци с мужем крѣпко битися с ним. И муж въротися въспят и) という長い文言が挿入されているが、文脈が合わないことから見て、写字生の誤認による後代の挿入と考えられる。

なお、この「キエフ人」は単数であることから、当時、ノヴゴロド・セヴェルスキイ公だったスヴァトスラフ [C411:G] に仕えていたが、年代記記者が名前を把握していない貴族を指しているのだろう。

49) イワン [A1221] が援軍を求めたこのポロヴェツ部族は、あとに述べられるバシコルド (Башкорд) (下注 87) の部族を指しているとする説もある ([СЭ-1: С. 65] など)。イジャスラフ [C35] と関係が近いポロヴェツ人部族であること、同じように「原野のポロヴェツ人」(половцы дикии) と特定されていることなどから、その可能性は高い。

50) ガーリチ地方 (公国) はドニエートル川とプルート川の流域に長く伸びた形をしており、ガーリチなどの主要都市はその上流域に位置している。「ドナウ川流域の諸城市」とは、ドナウ川とその支流プルート川の下流・河口域に位置するベルラド (Берлад), テクーチャ (Текуча), ペレヤスラヴェツ (Переяславец) の諸都市を指すと思われる。ここに陣を構えることで、ガーリチの諸都市と黒海を結ぶ水運や交易を妨害することができた。

51) 「海洋船」(кубара) は、ギリシア語 κουμβάριον の音訳語で、海洋を航行する丈の長い船を指している。ここでは、ガーリチへ向かうビザンティンの交易船だったのだろう。

かれのもとには多くのポロヴェツ人がやって来た。また、ベルラド人⁵²⁾が 6000 人、かれのもとに集まった。そして、クチェルミン⁵³⁾ (Кучелмин) へ向かって出発した。そこで、かれ [イワン [A1221]] は歓迎された。そこから、ウシツァ⁵⁴⁾ (Ушица) へ向かって出発した。

[ウシツァの] 城中には、ヤロスラフ [A1211] の守備部隊がすでに入城していた。この守備部隊は、[ウシツァを攻めるイワン軍に対して] 城内から激しく戦い始めた。[城内の] 平民たちは、城柵を越えてイワン [A1221] の陣営に向かって逃げ出して来た。[このように] 逃走した者は 300 人に及んだ。

ポロヴェツ人は [ウシツァの] 城市を攻略しようとしたが、イワン [A1221] はかれらに攻略を許さなかった。ポロヴェツ人は怒って、イワン [A1221] のもとを離れて行った。

イジャスラフ [C35] はイワン [A1221] を呼び寄せるために人を派遣し、かれはキエフに連れてこられた **[498]**。

イジャスラフ [C35] は [報告を受けて] 知った。かれが、イワン [A1221] [を庇護したこと] が原因で、ヤロスラフ [A1211]、ムスチスラフ [I1]、ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] がかれに戦争を仕掛けようとしているという。そこで [イジャスラフは]、チェルニゴフの自分の兄弟のスヴァトスラフ [C43] に向けて、グレーブ・ラコーシチ⁵⁵⁾ (Глеб Ракошич) を使者として派遣した。そして、[イジャスラフ] は、かれ [スヴァトスラフ [C43]] に、モズィリ⁵⁶⁾

52) 「ベルラド人」(берладники)とは、プルート川下流の城市ベルラド(Берлад)(現在のルーマニア東部のブルラド(Bârlad)市に当たる)の周辺に居住していた人々を指し、民族的には雑多で多くはルーシからの逃亡民からなっていた。プロドニク人(бродники)([イパーチイ年代記(3):343頁,注88])と共通性があるという説もある[Gogăni 1994: p. 141, n.896][Древняя Русь 2015: С. 64]。

53) 「クチェルミン」(Кучелмин; Кучельмин)は、マフノヴェツの索引によれば、ドニエステル川右岸の現在のロマチニツィ(Ломачинці)に同定しており、その場合にはガーリチから南東に200kmほど離れた位置にある。いずれにせよ、イワン・ベルラドニク[A1221]は、ドニエステル川下流域から川を遡行して、ガーリチ遠征を敢行したのである。

54) 「ウシツァ」(Ушица)は、ウシツァ川がドニエステル川に合流する地点にある城砦で、現在のスタラ・ウシツァ(Стара Ушица)に相当する。そのままドニエステル川を遡行すればガーリチへ到達し、ガーリチからだと南東方向に約181kmの距離にある。ドニエステル川沿岸に築かれたガーリチ公国の主要城市の一つだった。

55) この人物についての詳細は不明。イジャスラフ[C35]に仕える側近貴族であろう。

56) 「モズィリ」(Мозырь)は、プリピャチ川中流域の右岸に位置する城市で、6663(1155)年の記事では、キエフ公だったユーリイ[D17]がスヴァトスラフ[C43]にこの城市を与えている([イパーチイ年代記(5):286頁,注320])。おそらく、イジャスラフ[C35]がキエフ公になったとき、いったんスヴァトスラフ[C43]からこの城市を取り上げたのを、再びかれに還したのだろう。

(Мозырь)とチチェルスク⁵⁷⁾(Чичерск)を与えて、自分に対して戦争が仕掛けられようとしていることを、かれに告げた。

スヴァトスラフ [C43] は、〔答えて〕言った。「兄弟よ、かつて、そなたがわしに、チェルニゴフを領地として与えなかったことについて、わしがそなたに怒ったことは正しかった⁵⁸⁾。しかし、わしはそなたに悪しきことを望んだわけではない。もし、そなたを討とうとして〔戦争が仕掛けられる〕のなら、神がこの領地をわしから取りあげても仕方がない。そなたはわしの兄弟である。どうか、神がわしとそなたを善く共に生きさせ給うように」。こうして、〔二人は〕互いに、すべてについて親愛〔を誓う〕十字架接吻をした。

その頃、イジャスラフ [C35]、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43]、その息子のオレーグ [C431]、イーゴリ [C432]⁵⁹⁾、スヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ⁶⁰⁾ [C341] は、ルタヴァ⁶¹⁾(Лутава)で会合した。3日間お互いに大いに親愛を結び、多くの贈物を与え合った。そして、その時、〔一同は〕ガーリチ⁶²⁾とヴラジミル⁶³⁾へ、自分たちの使者を遣って、自分たちが親愛を結んだこと、神と尊い十字架が〔自分たちを〕を一つにしたことを知らせた。

57) 「チチェルスク」(Чичерск; Чичерск)は、1168年の記事にも、キエフとスモレンスクの間にあるチェルニゴフ地方の城市として言及されており(下注396参照)、現在のホメリから82km離れたチチェルスク村(Чечерск)に同定されている。

58) 1157年5月にイジャスラフ [C35]にキエフの公位に就いた後、しばらくの間、それまでのチェルニゴフの公位をスヴァトスラフ [C43]に引き渡そうとしなかったことを指している。〔イパーチイ年代記(5):300頁、注405〕を参照。

59) オレーグ [C431]は生年不詳だが、おそらくこの時は十代の前半であり、イーゴリ [C432]は8歳だった。二人ともチェルニゴフの父スヴァトスラフ [C43]のもとに住んでいたのだろう。

60) すべての写本が Всеволодимиричь と奇妙な表記がなされており、さらにイパーチイ写本は、これを Всеволодичь и Володимиричь と訂正している(後代の『ヴォスクレセンスカヤ年代記』もこの読みを踏襲)。しかし、ここでは、次の Святославъ が単数であることから、フセヴォロドヴィチ [C411:G]とウラジーミロヴィチ [C341]の二人がルタヴァの会合に参加したのではなく、どちらかの一人だったと考えるべきだろう。このルタヴァの会合は、直前にあるイジャスラフ [C35]とスヴァトスラフ [C43]の和解を確認する儀式だったとすれば、双方の一族が参加するのが自然であり、その場合、イジャスラフ [C35]の甥で、当時はヴシチジ(Вщиж)に公座を持っていたスヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341]のほうが可能性が高い。ちなみに、ウクライナ語訳は二人説をとり、ポーランド語訳、ロシア語訳は「スヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341]」説を採用している。

61) 「ルタヴァ」(Лутава)は、キエフとチェルニゴフの中間地点にあるデスナ川右岸の城砦で、1155年の記事でもユーリイ [D17]、イジャスラフ [C35]、スヴァトスラフ [C43]の三人の会合の地として言及されている(〔イパーチイ年代記(5):285頁、注318〕参照)。

62) 当時のガーリチの支配公はヤロスラフ [A1211]であり、イワン・ベルラドニク [A1221]の身柄引き渡しを巡って、キエフ公イジャスラフ [C35]とは敵対関係にあった。

63) 当時のヴォルィニ地方ヴラジミルの支配公はムスチスラフ [I1]であり、1157年5月のイジャスラフ [C35]のキエフ公位就位のときには、両者が良好な関係を保っていたが(〔イパーチイ年代記(5):301頁、注408〕を参照)、この時点(1158年夏)では関係は悪化していたのだろう。

かれら〔ヤロスラフ [A1211] とムスチスラフ [I1]〕は、兄弟たちが親愛のうちにあることを知って、〔キエフへ〕 軍を進めようとはしなかった。

この年、ノヴゴロドの主教にアルカージイが叙任された⁶⁴⁾。8月10日⁶⁵⁾のことだった。

この年、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] は、ガーリチのヤロスラフ [A1211] 討伐の戦争を始めた。かれ〔イジャスラフ〕はイワン・ロスチスラヴィチ [A1221]、通称ベルラドニクのために領地を要求した⁶⁶⁾。なぜなら、ガーリチ人たちが、かれ〔イジャスラフ [C35]〕に使者を遣って、馬上の人となる⁶⁷⁾よう要請したからである【499】。〔ガーリチ人たちは〕この言葉によって、自分たちのところへ来るようにと招き、「軍旗を掲げて⁶⁸⁾くれさえすれば、われらはヤロスラフ [A1211] のもとを離れましょう」と言ったのだった。

他方、イジャスラフ [C35] のもとには、ヴラジミルから報告がもたらされていた。かれを討とうとの企てがあり、キエフに進軍するために、集合しているというのである⁶⁹⁾。〔イジャスラフ [C35] は〕早速、自分の兄弟スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] 及びスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] に使者を派遣して、二人に、ガーリチ遠征に参加するよう要請した。また、〔ムスチスラフ [I1] とヤロスラフ [A1211] 勢が〕自分を討つべく、キエフへ軍を進めていると告げた。

スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] は、かれ〔イジャスラフ [C35]〕のもとに、何度も使者を派遣して、こう言った。「兄弟よ、そなたはいったい誰のために〔ガーリチの〕領地を要求しているのか。兄弟のためでもなく、息子のためでもないではないか⁷⁰⁾。先んじて戦争を始めないほうがよい。もし、そなたが、『自分を討つために軍がやって来る』と言っても、それは、そなたを討ちに驕り高ぶって進軍してくるのだから、神はそなたの味方である。わしも、わしの二人の息子たち⁷¹⁾も〔そなたの味方である〕」。

64) 叙任の経緯については、上注 32 を参照。

65) 1158 年の 8 月 10 日に相当する。

66) イジャスラフ [C35] は、ドナウ川、プルート川下流域に陣を構えているイワン・ベルラドニク [A1221] を支援し、ガーリチのヤロスラフ [A1211] を武力によって追放して、イワンをガーリチの公位に据えることを狙ったのである。

67) 「馬上の人となる」(всѣсти на конѣ) は、軍事遠征に出発することを意味する定型句。

68) 「軍旗を掲げる」(явити стягы) は、戦争することを意味する定型句。

69) ムスチスラフ [I1] がキエフ公位を狙って、キエフへの遠征を準備しているということ。

70) イジャスラフ [C35] にとって、イワン・ベルラドニク [A1221] はいかなる親戚・姻戚関係にもなく、そのような者への支援は一族にとって何の利益にもならないと説いているのである。

71) オレーグ [C431] とイーゴリ [C432] を指している。

ところが、イジャスラフ [C35] は、兄弟〔スヴァトスラフ [C43]〕の助言に耳を貸さず、キエフを出陣した。

スヴァトスラフ [C43] は、かれ〔イジャスラフ [C35]〕を追いかけさせて、シャクシャン⁷²⁾ (Шакушан) の兄弟ユーリイ (Георгий)・イワノヴィチを派遣した。〔ユーリイは〕、ヴァシーレフ⁷³⁾ (Василев) でかれ〔イジャスラフ [C35]〕に追い付くと、かれにこう言い始めた。「そなたの兄弟〔スヴァトスラフ [C43]〕は、戦争を始めてはいけないと言っています。何があろうとも〔キエフに〕戻るようにと言っています」。

イジャスラフ [C35] は、激怒してかれ〔スヴァトスラフ [C43]〕に答えた。「兄弟よ、そなたに言うておく。何があろうとわしは戻らない。わしは、すでに出陣した」。〔それから使者に言った〕「ゲオルギイよ、兄弟のスヴァトスラフ [C43] にこう言うのだ。『そなた自身が〔援軍に〕来ることなく、息子〔オレーグ [C431]〕も〔援軍に〕派遣しないともし、神がわしをガリーチまで導いてくれるだろう。そのときに、そなたがチェルニゴフからノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕へ不本意にも移ることになっても、後悔してわしを恨むな⁷⁴⁾』」。

スヴァトスラフ [C43] は、ゲオルギイが伝えた、【500】この〔イジャスラフ [C35] の〕言葉をひどく残念に思った。スヴァトスラフ [C43] は〔イジャスラフに回答して〕言った。

「主よ、わが謙抑を御覧あれ。わしはキリスト教徒の血を流すこと、自分の父の地を滅ぼすことを望まず、何度も譲歩してきた。チェルニゴフ及びその7つの無人城市⁷⁵⁾、モロヴィ

72) このイワン (Иван) の二人のユーリイ (Георгий) とシャクシャン (Шакушан) については、重要な問題の使者を命じられていること、父称をとまなう敬称で呼ばれていることから考えて、チェルニゴフの上級貴族 (千人長) の一族と推定することができる。また、6672(1164)年の記事にチェルニゴフの千人長「ギュルギ (ユーリイ) (Гюрги) の名が見えるが (下注 326 参照)、これも次の「兄弟ユーリイ」と同一人物であろう ([Соловьев 1988: С. 510] 参照)。

シャクシャンはチュルク系の名と推定することができ、実際、マヴロージンによれば、チェルニゴフ地方やセヴェルスキイの地の在地貴族 (земские бояре) には、チュルク系の名を認めることができるという。[Мавродин 2002: С. 182-184]。また、時代は下がるが、『イーゴリ軍記』にも、チェルニゴフ公ヤロスラフ [C412] 配下の貴族 (быль) の一族として、チュルク系の名前が列挙されている ([СПИ 1950: С. 434])。この「シャクシャン」について研究者の考証は見当たらないが、かれ (とその一族) もスヴァトスラフ [C43] に仕えていた貴族の一人と考えてよいだろう。

なお、フレーブニコフ=ポゴージン写本は、Шарукан とポロヴェツの首長を思わせる名を記しているが、これは後代の修正によるものだろう。

73) 「ヴァシーレフ」(Василев) はストゥグナ川沿いの城砦で、キエフの丘からヴァシーレフ街道を下って、南西へ 55km ほど行ったところにある。

74) チェルニゴフの領地を、実力でスヴァトスラフ [C43] から取り上げることを示唆している。

75) 以下には、7つの「無人都市」のうち、4つの城市名が挙がっているが、いずれもチェルニゴフから 50km ほどの距離にあるチェルニゴフ公支配下の付属城市である。なお、「無人城市」(пустой город) とは、攻略・掠奪などによって荒廃して、定住者がいなくなった城市のこと。

イスク⁷⁶⁾(Моровиеск), リューベチ⁷⁷⁾(Любеск), オルゴシチ⁷⁸⁾(Оргошь), フセヴォロジ⁷⁹⁾(Всеволожь)も獲ろうとしなかった。いまそこにいるのは、犬飼いとポロヴェツ人どもだけになってしまった⁸⁰⁾。〔そなたは〕, チェルニゴフ〔地方〕の全ての領地を, 自分の甥〔スヴァトスラフ[C341]〕と一緒に領有し⁸¹⁾, それにも満足せず, さらに, わしにチェルニゴフから出て行くよう命じている⁸²⁾。〔そなたは〕, わしがチェルニゴフを支配することについていかなる異議を唱えないと, 十字架接吻⁸³⁾をしてわたしに〔誓った〕にもかかわらず。神と尊い十字架はすべてを見そなわしている。〔その十字架接吻の誓いを〕そなたは違反したのだ。兄弟よ, わしはそなたに悪しきことを望んでいるのではない。遠征しないよう諫めているのである。そなたには善きことを, ルーシ地には平穏を望んでいるのだ〕。

さて, イジャスラフ[C35]は, ムナレフ⁸⁴⁾(Мунарев)まで軍を進めた。そこで, 自分の甥〔スヴァトスラフ[C341]〕の到着を待った。なぜなら, かれを, 原野のポロヴェツ人のもとに派遣して, 速やかにかれらを自分のもとに来させるように, 命じていたからである⁸⁵⁾。

かれ〔イジャスラフ[C35]〕のもとに報告がもたらされた。ムスチスラフ[I1], ウラジーミル[D181], ヤロスラフ[A1211], ガーリチ人が, キエフに向けて進軍しているというのである。

76) 「モロヴィイスク」(Моровиеск)は, チェルニゴフから南西に約54kmほど離れた場所に位置している。現在の「モリフシク」(Морівськ)村に相当する。

77) 「リューベチ」(Любеск)は, チェルニゴフの北西約50kmのドニエプル中流左岸に位置する城砦([イパーチイ年代記(3):358頁,注153]参照)。

78) 「オルゴシチ」(Оргошь)は, チェルニゴフから北西方向約20kmのところにあった近郊城砦で, 現在のロゴシチャ(Рогоща)村に相当する。

79) 「フセヴォロジ」(Всеволожь)は, チェルニゴフから南東約65kmに位置する現在のシヴォロジ(Сиволож)市に同定されている。

80) 「犬飼い」は公が狩猟を楽しむために派遣された役人のこと。「ポロヴェツ人」は, イジャスラフ[C35]と同盟して, 居住地を与えられているポロヴェツ人のことだろう。スヴァトスラフ[C43]は, チェルニゴフ周辺の城市から平和な住民がいなくなってしまうことを嘆いているのである。

81) イジャスラフ[C35]の甥スヴァトスラフ[C341]は, 一時叔父のためにチェルニゴフの防備に就いており([イパーチイ年代記(5):300頁,注406]参照), この時点でもキエフで叔父イジャスラフと行動を共にしていたと考えられる。

82) 上注74を参照。

83) 上注61のルタヴァでの諸公会合における, 十字架接吻の誓いを指しているのだろう。

84) 「ムナレフ」(Мунарев)の所在地については諸説があり, マフノヴェツは現在のジトミール近郊ウノヴァ(Унова)川上流左岸のゴロディシチュ(Городище)村に同定しているが, この場合, ヴァシーレフから110kmも離れている。クーザは, ヴァシーレフから24kmほど西南西に行った, ポリシャヤ・スネチンカ(Большая Снетинка)(現在のヴェリーカヤ・スネチンカ(Великая Снетинка)村)に同定している。[Куза1996:С.182 №1057]。次の記述に「ヴァシーレフの近郊にいた」(бы у Василева)とあり, これがムナレフに居たことの言い換えだとすれば, 後者の可能性が高い。

85) 以下(下注87)に見るように, イジャスラフ[C35]の甥スヴァトスラフ[C341]の母がポロヴェツの首長バシコルドに嫁いでいたため, その親族関係を頼っての支援依頼だったのだろう。

かれ〔イジャスラフ [C35] が〕 ヴァシーレフ (Василев) 近郊にいたとき、かれの甥スヴァトスラフ [C341] が、多勢のポロヴェツ人を連れて到着した。かれらはそこから、ベルゴロドへと出発した。そして、ベルゴロドの近くに達すると、キエフに向かう街道に布陣した⁸⁶⁾。

ムスチスラフ [I1] は、二人の兄弟〔ウラジーミル [D181] とヤロスラフ [A1211]〕とともにベルゴロド城内へと進入した。〔イジャスラフ [C35] 軍は〕 激しく戦い始めた。城へ突撃すると、〔ムスチスラフ [I1] 軍も〕 城内からも出撃して、激しく戦った。

イジャスラフ [C35] に対する多勢の援軍が、ベルゴロド〔城下〕に到来した。**[501]** これは、スヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341] の継父であるバシコルド⁸⁷⁾ (Башкорд) が2万〔のポロヴェツ人〕を率いて、かれ〔イジャスラフ [C35]〕のもとに来たからである。かれ〔スヴァトスラフ [C341]〕の母親はポロヴェツ人のもとに逃げて、かれ〔バシコルド〕と結婚していた⁸⁸⁾。

イジャスラフ [C35] は、自分の部隊をかれら〔ベルゴロド城内のムスチスラフ勢に〕に見せつけて、かれらに〔ベルゴロド〕城外に出るように⁸⁹⁾ 言った。しかし、かれらは出ようとせず、

86) イジャスラフ [C35] は、ヤロスラフ [A1211] 討伐遠征のために、いったんは南西方向のヴァシーレフへと向かったが、ムスチスラフ [I1] = ヤロスラフ [A1211] 勢がキエフに向けて進軍し、すでにベルゴロドに達し、この都市を占領しているとの報を受けた。そこで、イジャスラフ [C35] は、軍を北に転じてベルゴロドに向かい、キエフ防衛の要所であるベルゴロドとキエフの間の街道に陣を布いたのである。

87) 「バシコルド」(Башкорд) は、チェルニゴフ諸公と同盟をしていた〈原野の〉ポロヴェツ部族の首長。南ブグ川下流域に展開していたと推定される。その名は「裸足の狼」を意味しており、部族トーテムの名を示すと考えられる。かれの、2万の軍勢からみて中規模の部族だった〔Плетнева 1990: C. 115〕。

88) スヴァトスラフ [C341] の父ウラジーミル [C34] は、1144/1145年にグロドノ公フセヴォロドコ [F11] の娘と結婚しており〔イパーチイ年代記 (2): 333頁, 注277〕, スヴァトスラフ [C341] は二人の間の息子というのが定説になっている。1151年にチェルニゴフ公だったウラジーミル [C34] がルート川の戦いで戦死したのち、寡婦と遺児はチェルニゴフの公座を継いだイジャスラフ [C35] の庇護下に置かれたが、おそらくイジャスラフ [C35] が同盟していたポロヴェツ部族の首長 (バシコルド) のもとに、寡婦は政略結婚で嫁がされたのだろう。「ポロヴェツ人のもとに逃げて」(бѣжала в половци) の文言は、ルーシ公族の女とポロヴェツ人首長との結婚 (前例はない) を認めることをはばかった、年代記記者による婉曲表現と考えられる。(〔Литвина, Успенский 2012: C. 47-50〕参照)

なお、P. トロチコは、スヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341] の母を、年代記には記録がないが、ウラジーミル [C34] に嫁いだポロヴェツ人女性と解釈して、女性の行動 (寡婦になった後故郷に逃げ戻って、ポロヴェツ人首長と再婚した) およびスヴァトスラフ [C341] の行動 (ポロヴェツ人の血を半分受けていたことから、ポロヴェツ人に援軍を頼みやすかった) を説明している (〔Толочко 2014: C. 159-160〕)。しかしこの解釈は、ウラジーミル [C34] のフセヴォロドコ [F11] の娘との結婚記事を無視しており、論拠に乏しい。

89) イジャスラフ [C35] は、ポロヴェツ人を初めとして圧倒的な数の軍兵がベルゴロド城を包圍していることを誇示して、敵を降伏させ、自分たちにとって都合の良い条件で和議を結ばせようとしたのである。

12 日間城内に陣取っていた。

〔双方の陣営の〕 ベレンディ人たちの間で〔裏切りの〕 策謀が行われた。かれらは、〔ベルゴロドの〕 城へ近づくと、戦うと見せかけて、〔ベレンディ人同士が〕 互いに連絡を取り合っていた。その首謀者は、トゥドル・サトマゾヴィチ (Тудор Сагмазовичь), カラコジ・ムニョゾヴィチ (Каракозь Мнюзовичь), カラス (Карас) 及びコケイ (Кокѣи) だった⁹⁰⁾。

かれらは、〔敵、ムスチスラフ [I1] 陣営の〕 補給隊〔隊長〕のクジマ・スノヴィディチ (Кузма Сновидич) とその従者を捕まえた。そしてかれらは、夜に、クジマの従者をかれ〔ムスチスラフ [I1]〕のもとへと派遣し、かれ〔ムスチスラフ〕宛ての自分たちの書状を書いて、かれ〔従者〕にこう言った。「ベルゴロド〔城〕に入って、ムスチスラフ [I1] のところに行って、かれにこう伝えよ。『公よ、あなたにとっては、われら次第で善くも悪くもなる。もし、あなたが、あなたの父〔イジャスラフ [D112:I]〕がなしたように、われらと親愛を結び、われわれにそれぞれ良い城市を〔所領として〕与えてくれるのなら、われらは、イジャスラフ [C35] から離反してもよい』と」。

ムスチスラフ [I1] は、この言葉に喜び、その夜のうちに、この従者にオルブイリ・シェロシェヴィチ⁹¹⁾ (Олбырь Шерошевич) を同行させて、かれら〔イジャスラフ陣営のベレンディ人たち〕のもとに派遣した。〔オルブイリは〕かれらの意志を受け入れて、味方になり、〔そのことについて〕かれに対して誓約を行った⁹²⁾。

そして深夜になり、〔イジャスラフ [C35] 陣営の〕ベレンディ人とトルク人たちが、叫び声をあげながら、ベルゴロド城へ向かって出発し始めた⁹³⁾。イジャスラフ [C35] は、かれらの策謀に気がつき、馬に乗ると、かれら〔ベレンディ人〕の軍営のところを駆けつけた。そして、軍営が燃えているのを見て **[502]**、引き返した。そして、〔イジャスラフ [C35] は〕自分の甥

90) イジャスラフ [C35] に勤務していたベレンディ人の首長 (部隊長) たちの名が示されている。キエフ公になったイジャスラフ [C35] が、代々キエフ公に仕えていたベレンディ人を配下におさめたことについては、先に言及がある ([イパーチイ年代記 (5) : 304 頁, 注 424])。ただ、年代記でその首長たちの名が記されるのは珍しい。

「トゥドル・サトマゾヴィチ」については、6670(1162)年の記事に、ポロヴェツ人の手で捕虜になった首領の一人として言及されている (後注 299 参照)。また、最後の二人については、「カラス・コケイ」(Карас Кокѣи) という一人の人物とする解釈もある。[Плетонева 1990: С. 86]

91) この人物もまた、ムスチスラフ [I1] 側に仕えていた、同じベレンディ人の首領であろう。

92) 「誓約を行った」(рогъ ходити)の文言は、キリスト教以外の信仰に基づく誓約儀式を指し、ここでは、ベレンディ人同士が誓約儀礼を行ったということの意味している。

93) 包囲軍の陣営から、城内の陣営へと寝返ったのである。

のスヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341] とウラジーミル・ムスチスラヴィチ⁹⁴⁾ [D115] を連れて、ヴィシェゴロドへ行き、さらにゴミイ⁹⁵⁾ (Гомьи) へと逃げた。それから、ゴミイで公妃の到着を待った。

公妃は〔キエフから〕ペレヤスラヴリにいる娘婿⁹⁶⁾ のグレーブ・ユーリエヴィチ [D178] のもとに逃れ、そこから、ゴロドク⁹⁷⁾ へと向かった。〔公妃は〕グレーブリ⁹⁸⁾ (Глѣбль) へ、ホロボル⁹⁹⁾ (Хоробор) へ、ロベスク¹⁰⁰⁾ (Ропеск) へと転々と移動した。ヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ¹⁰¹⁾ [C412] は、ロベスクでかの女を慰めて世話をし、ゴミイにいるイジャスラフ [C35] のもとへ、かの女を連れて行った。

イジャスラフ [C35] は、公妃とともにゴミイを出発して、ヴァティチの地へと向かった¹⁰²⁾。

94) ヴォルィニ地方の所領を甥のムスチスラフ [I1] に奪われたウラジーミル [D115] は、イジャスラフ [C35] がキエフ公になって以来、かれに同行して、勤務していた。〔イパーチイ年代記 (5) : 304 頁, 注 423〕を参照。

95) 「ゴミイ」(Гомьи) は、現在のベラルーシ南東の都市ホメリ (Гомель) のこと。ドニエプル川支流ソジ (Сож) 川右岸に位置し、ヴィシェゴロドからは北へ 214km ほど離れている。チェルニゴフ地方の北にある小城市で、当時はイジャスラフ [C35] の領地だったのだろう。ここまでは、櫓で川の氷上を通ったと思われる。

96) 1155/1156 年に、ユーリイ [D17] の手によって、グレーブ [D178] はイジャスラフ [C35] の娘と政略結婚をさせられている (〔イパーチイ年代記 (5) : 287 頁, 注 330〕)。そのため、イジャスラフ [C35] の妃から見るとグレーブ [D178] は娘婿 (зять) にあたる。

97) オステル川河口のゴロデツ (Городец) のこと。

98) 「グレーブリ」(Глѣбль) は、ペレヤスラヴリからだと北東に 152km ほど離れており、現在のディミトロフカ村 (マフノヴェツによれば、その近隣の「クラスニイ・コリヤジン村」(Красний Колядин)) に相当する。〔イパーチイ年代記 (3) : 注 163〕参照。

99) 「ホロボル」(Хоробор) はチェルニゴフ西方約 70km 離れたデスナ川右岸に位置し、グレーブリからだ、北西に約 72km 離れている。現在のマコシネ (Макошине) 村に相当する。チェルニゴフ公領とノヴゴロド・セヴェルスキイ公領のちょうど境界に位置している。

100) 「ロベスク」(Ропеск) は、イルピ川右岸にあった城市で、現在のノーヴィイ・ロプスク (Новий Ропськ) 近郊に相当する。ホロボルからだ、北へ 95km ほど進んだところにある。ゴミイ (現在のホメリ) へは、西に 90km ほど進むと到達する。

101) ヤロスラフ [C412] は、1139 年の生まれで (〔イパーチイ年代記 (2) : 320 頁〕)、当時は 20 歳ほどだった。兄スヴァトスラフ [C411:G] の陰にあって、チェルニゴフの小領地であるロベスクに公座を与えられていたのだろう。

102) イジャスラフ [C35] は、ガーリチ遠征を拒んだチェルニゴフ公スヴァトスラフ [C43] への報復を期したが、チェルニゴフを攻めるほどの軍事力はなかったため、チェルニゴフからは遠いオカ川流域を中心とする「ヴァティチの地」への掠奪遠征によって、まずは力を蓄えることを考えたのだろう。

そして、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] の妃の城市¹⁰³⁾ [オブロヴィ (Обловь)] を攻略して掠奪し、そこから、ヴァティチへ行き、ヴァティチの地の全土¹⁰⁴⁾ を占領した。なぜなら、スヴァトスラフ [C43] は、自分の味方として〔遠征に〕来ることもなく、自分の息子¹⁰⁵⁾ を派遣することもなかったからである。

スヴァトスラフ [C43] は、オブロヴィが掠奪され、ヴァティチの地が占領されたことを知って、イジャスラフ [C35] の貴族たちが所有する財産を没収し始め、その〔貴族たち〕の妻を捕虜にして、身代金を要求した¹⁰⁶⁾。

〔イジャスラフと同盟していた〕ポロヴェツ人たちは、ベルゴロドからユーリエフ¹⁰⁷⁾ (Гюргевь) へ向かって逃げ出していた。ベレンディ人とユーリエフ人は、かれら〔ポロヴェツ人〕の多くを捕虜とし、かれらの一部はロシ川で溺れ死んだ。

ムスチスラフ [I1], ウラジーミル [D181], ヤロスラフ [A1211] は、キエフに入城した。12月22日¹⁰⁸⁾ だった。ムスチスラフ [I1] は、イジャスラフ [C35] の従士たちの財産、すなわち金、銀、奴隸、馬匹、家畜を奪い取った。そして、これら全てをヴラジミルへと運んだ。

ムスチスラフ [I1], ウラジーミル [D181], ヤロスラフ [A1211] は、スモレンスクのロスチスラフ [D116:J] を呼ぶための **【503】** 使者を派遣した。かれをキエフに招聘して、公座に就けるためだった。それは、先にかれ〔ロスチスラフ [D116:J]〕に対して「〔キエフ〕を攻め取るの

103) すぐ下に解説されているように「オブロヴィ」(Обловь)の城市のこと。これは Обловь, Бловь, Блеве と表記される、デスナ川左岸支流プロヴェ川沿岸の城市。ブリャンスクからは北北東に約 130km の位置にあり、ヴァティチの地でもスモレンスク地方の境界に位置している〔イパーチイ年代記(3): 342 頁, 注 84 参照〕。この地にはスヴァトスラフ [C43] の妃(1136年に結婚したノヴゴロド市長官の娘)の私有領地として、その代官が派遣されていたのだろう。

104) オカ川流域の諸城市を指している。本来はチェルニゴフ公スヴァトスラフ [C43] の所領だが、かれにも遠隔のこの地域を守る力はなかった。

105) この「息子」は単数形であることから、長男のオレーグ [C431] を指している。かれは、当時セイム川中流域のプチヴリに公座を得ていた。

106) イジャスラフ [C35] とスヴァトスラフ [C43] がルタヴァの会議で和解したとき(上注 61 参照)、イジャスラフ [C35] 側の貴族の一部が、おそらく人質(和議の保証)として、チェルニゴフへ移り住んだと考えられる。その貴族と夫人たちが捕虜となったのである。

107) ユーリエフ(Гюргев)はキエフ南方約 80km のロシ川河畔の城市で、ベレンディ人の本拠地だった。ポロヴェツ人は、この方向から、南方のステップ地帯に逃れようとしたのだろう。

108) 1158年の12月22日に当たる。

はあなたのためです」という十字架接吻〔の誓い〕をしていたからである¹⁰⁹⁾。

ロスチスラフ [D116:J] は、かれら〔三人の公〕に対してイワン・ルチェチク¹¹⁰⁾ (Иван Ручечник) を使者として派遣した。また、スモレンスク人はヤクン¹¹¹⁾ (Якун) を、ノヴゴロド人たちも高官を〔三人の公のところに派遣した〕。〔ロスチスラフ [D116:J] は〕かれら〔三人の公〕に言った。「そなたたちが、信義をもって¹¹²⁾、和解のためにわしを招聘するのであれば、何があろうと、わしは自分の意志でキエフに行くであろう。そなたたちが、信義をもってわしを父と見なし、わしに聴き従うのならば。見よ、わしは宣言する。わしは、クリメントが府主教座に就くことを望まない¹¹³⁾。なぜなら、かれはハギア・ソフィア大聖堂で総主教の、〔府主教を叙任する〕祝福を受けていないからである¹¹⁴⁾」。

ムスチスラフ [I1] は、クリメントを弁護して〔使者たちと〕激しく言い争って、こう言った。「コンスタンチンを府主教にしておいてはならぬ。かれは、わしの父を呪ったのだから¹¹⁵⁾」。

イヴァンコ〔ルチェチク〕は、この〔ムスチスラフの〕言葉を持って、ロスチスラフ [D116:J] のもとに戻った。かれが、スモレンスクへやって来ると、自分の公〔ロスチスラフ〕に、すべての言葉を伝えた。ロスチスラフ [D116:J] は、自分の最年長の息子ロマン [J1] を、和解のた

109) これまでの年代記記事には、この十字架接吻のことは書かれていないが、この度のムスチスラフ [I1] 勢による、キエフ遠征、イジャスラフ [C35] 討伐の大義名分は、モノマフ一族の中で最年長者スモレンスク公ロスチスラフ [D116:J] のキエフ公就位だったことがここで分かる。ムスチスラフ [I1] は、かつて父のイジャスラフ [D112:I] がヴァチスラフ [D16] にキエフの公座を譲って、実質的な共同統治行ったこと（『イパーチイ年代記 (5) : 256 頁』参照）と同じことを狙ったのかもしれない。

110) ロスチスラフに仕える上級貴族。

111) スモレンスクの住民を代表する千人長もしくは土地の豪族であろう。

112) 「信義をもって」(в правду) とは、公族の間の法(правда)にあって、自分を年長者と認めることを意味している。

113) 1156年にユーリイ [D17] がキエフの公座に就くと、1147年にイジャスラフ [D112:I] が強引にキエフ府主教に任命したクリメントを即座に廃位して、新しい府主教にギリシア人コンスタンチンを招聘した。ムスチスラフ [I1] がキエフに入城したときには、府主教コンスタンチンはチェルニゴフに逃げしており（下注 119 の段落参照）、ムスチスラフはすぐに、父が擁立したクリメントを府主教に復位させる動きを見せたのだろう。ロスチスラフ [D116:J] の言葉は、この動きに対する回答になっている。

114) クリメントが叙任に際して総主教の祝福を受けていないことについては、[『イパーチイ年代記 (5) : 290 頁、注 347』を参照。

115) 府主教コンスタンチンは、1156年にキエフに赴任すると、前任の府主教クリメントを叙任させたイジャスラフ公 [D112:I] (1154年没) に対して、死後の破門に処したことがわかる。新任の府主教コンスタンチンが、クリメントの勢力を厳しく排除しようとしたことについては、[『イパーチイ年代記 (5) : 293 頁、注 371』を参照。

めにキエフに派遣した。ムスチスラフ [I1] は、ヴィシエゴロド¹¹⁶⁾ でかれ〔ロマン〕を出迎えた。二人の間では、言い争いがあった。

ロスチスラフ [D116:J] は、クリメントを府主教として望んでおらず、ムスチスラフ [I1] は、総主教とコンスタンティノポリスの聖職者たちの手で叙聖を受けたコンスタンチンを〔府主教として〕望んではいなかった。論争は続き、かれらの間で激しく繰り返された。こうして、二人とも〔クリメントもコンスタンチンも〕府主教の座には就かないことになった。これについては、コンスタンティノポリスから別の府主教を連れてくることを¹¹⁷⁾、【504】二人〔ロスチスラフ [D116:J] とムスチスラフ [I1]〕は十字架接吻で〔誓った〕。

キエフにおける、ロスチスラフ・ムスチスラヴィチ [D116:J] の公支配の始まり

6668 [1160] 年

ロスチスラフ・ムスチスラヴィチ [D116:J] は、公座に就くためにスモレンスクからキエフへと出発し、キエフに入城したのは4月12日の日曜日¹¹⁸⁾ だった。まさにその時、尊い復活祭であり、全ての人々、多くの民がかれを出迎えた。人々は称賛すべき名誉をもってかれ〔ロスチスラフ〕を受け入れた。この篤信の公ロスチスラフ [D116:J] は、自分の祖父、自分の父の公座に座した。人々にとって、主の復活と公の即位と、喜びは二重だった。

¹¹⁹⁾ 府主教コンスタンチンはそのときチェルニゴフにいた。かれは、ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] から逃げたのである。その時、そこ〔チェルニゴフ〕で病気になった。

そして、自分が死すべきことを知ると、文書を書いて、それに印章を付した。それからチェ

116) ムスチスラフ [I1] はキエフ攻略ののち、キエフに近いヴィシエゴロドの城市を自分の根拠地としていた。

117) これは、1160年8月にコンスタンティノポリスからキエフに到着した、ギリシア人の府主教フェオドールを指している（下注226参照）。

118) 1159年の4月12日に相当する。この日は日曜日で、また復活祭に当たっていた。6668(1160)年の項にあるのは、この部分の記事が超三月暦による暦法を採用していることによっている。ベレジコフによれば、6665～6675年の記事はほとんどが超三月暦によっている。[Бережков 1968: С. 23]

119) 以下の斜字の段落部分は、府主教コンスタンチンの死の経緯と奇蹟についての物語だが、対応する記事は『イパーチイ年代記』にはない。『ラヴレンチイ年代記』の6667(1159)年の項には簡略な並行記事がある。そこで、『ヴォスクレセンスカヤ年代記』の6667(1159)年記事（[ПСРЛ Т.7, 2001: С. 70-71]）から補って、ここに訳出した。D・リハチョフは、この部分は『イパーチイ年代記』の編者が意図的に削除した記述であると考察している。[Лихачев 1985: С. 153]。

ルニゴフ主教アントニイ¹²⁰⁾を呼んで、その文書を渡した。そして、自分の死後にはこの文書に記されていることがすべて行うことを、神の名においてかれ〔アントニイ〕に誓わせた。

〔府主教コンスタンチン〕が逝去したとき、主教〔アントニイ〕は府主教から与えられた文書を手に取り、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ公[C43]のもとに行き、印章を解くと、それを朗読した。かれ〔アントニイ〕は、そこに恐るべきことを見出した。それは次のようだった。

「わが死の後には、わが遺体を埋葬せず、遺体を地面に放り投げて、両足を縄で縛り、城外へと引っ張り出して、これを（尊名が記してあった）外に転がして、犬が喰うにまかせよ」。

公も主教もこれにはひどく驚いた。そして、主教は自分に命じられたことを行った。すなわち、人里離れた場所に遺体を投げ捨てたのである。民衆はかれ〔府主教コンスタンチン〕の死を知ってみな驚いた。かれの遺体は城外に13日間横たわっていた。その後、スヴァトスラフ公はこのことについて、大変な恐れと恐怖にとらわれた。かれは、神の裁きを恐れて、三日目に、その遺体を引き取り、大いなる名誉をもって城内に運び入れるよう命じた¹²¹⁾。何日も経っていたが、この遺体は何ものにも触れられることはなく、いかなる損傷もなく全き状態だった。こうして、〔遺体を〕城内に運び込み、聖救世主聖堂に安置した。その廟にはイーゴリ・ヤロスラヴィチ¹²²⁾が眠っている所だった。

その三日間、キエフでは太陽が暗くなり、暴風が吹き荒れた。大地は揺れ、稲妻の光に人々は耐えきれなかった。轟音のような雷鳴が轟き、一回の落雷で7人が、すなわち2人の司祭、1人の輔祭、4人の平民が打たれて死んだ。

そのとき、ロスチスラフ[D116:J]はヴィシェゴロド近くの平原の幕営にいた。暴風でかれは天幕にぶつかって〔怪我をした〕。ロスチスラフ[D116:J]は神への畏れに満たされて、府主教の死のことを思い出した。先に、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ[C43]によって知らされていたからである。そして、〔ロスチスラフは〕、聖ソフィア聖堂へ使者を遣り、すべての教会において、深夜祈禱を行うことを命じた。

見よ、これはわれらの罪ゆえに、神がわれらに懲罰を下したのである。キエフにおいて皆が

120) アントニイはギリシア人で、1163年の記事には誓約を破る背信の徒として言及されている（下注325）。1169年に、かれは祭日における肉食の問題で、チェルニゴフ公スヴァトスラフ[C411:G]によって追放された。

121) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では「翌日、スヴァトスラフ[C43]公は、自分の家臣たち及び主教と協議を行い、遺体を引き取ると、これをチェルニゴフの聖救世主教会に埋葬した」と書かれている。全体として、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事には、奇蹟物語の色彩は一切無く、事件の経緯が簡単に記されているだけである。

122) 「ヤロスラヴィチ」は年代記の誤記で、これは、イーゴリ・フセヴォロドヴィチ[C42]を指しているのだろう。イーゴリの遺骸をチェルニゴフの聖救世主聖堂に安置（移葬）した経緯については、[イバーチイ年代記(4):348頁、注142]を参照。

恐れおののいていた。チェルニゴフでは、この三日の間、太陽は輝いていたが、夜になって、かれ〔府主教〕の遺体の上に、天まで届く三本の火の柱が立ち上った。かれ〔府主教〕の遺体が埋葬されると、そのとき全土に平安が戻った。

この年、ロスチスラフ [D116:J] はスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] と、モロヴィイスク¹²³⁾ (Моровийск) で会合した。5月1日¹²⁴⁾ のことだった。二人の会議は大いなる親愛のうちになされた。

その時、ロスチスラフ [D116:J] は、スヴァトスラフ [C43] を、自分のもと〔の幕営〕へ食事に招いた。スヴァトスラフ [C43] は、いかなる邪心もなく、かれ〔ロスチスラフ〕のもとに出かけた。その日には、二人の間には喜びがあり、多くの贈物がなされた。ロスチスラフ [D116:J] はスヴァトスラフ [C43] に、クロテン、オコジョ、黒毛のテン、ギンギツネ、シロオオカミ〔の毛皮〕、セイウチの牙を贈った。

翌日¹²⁵⁾、スヴァトスラフ [C43] は、ロスチスラフ [D116:J] を自分のもと〔の幕営〕に食事に招待した。こうして、前日よりも楽しく宴を張った。スヴァトスラフ [C43] はロスチスラフ [D116:J] に、狩猟豹¹²⁶⁾、鞍付きの駿馬2頭を贈った。こうして、二人は別れて、それぞれ帰郷した。

この年、**[505]**、ユーリイ・ヤロスラヴィチ [B321] が、トゥーロフから出陣して、プチヴリ方面へ掠奪に行った¹²⁷⁾。

123) 「モロヴィイスク」(Моровийск)については上注76を参照。キエフとチェルニゴフのほぼ中間地点に位置し、デスナ川河岸にあるため交通の便も良い。チェルニゴフ公スヴァトスラフ [C43] と会合するには好地点だったのだろう。

124) 1159年の5月1日に相当する。

125) この5月2日は、ロスチスラフ [D116:J] やスヴァトスラフ [C43] たちの祖父や父の世代にあたる、モノマフ公 [D1]、オレーグ [C4]、ダヴィド [C3] 諸公が、1115年にヴィシエゴロドで聖ボリスと聖グレーブ公の聖骸を移葬した記念日にあたる ([イパーチイ年代記(1):259頁]参照)。会合は、ルーシ諸公の守護聖人の記念日に合わせて開かれたことは疑いない。

126) 「狩猟豹」(пардус)は、1147年のモスクワでの会合のときにも、スヴァトスラフ [C43] はユーリイ [D17] に贈っている。[イパーチイ年代記(3):339頁、注62]を参照。

127) この頃、ユーリイ・ヤロスラヴィチ [B321] がトゥーロフ公であったのは確かだが、プチヴリへ掠奪遠征に行く必然性がない。次注に見るように、『イパーチイ年代記』のこの記事は、イジャスラフ [C35] のプチヴリ遠征についての原資料を、誤ってユーリイ [B321] に帰してしまった可能性が高い。次注の補正を施したのちは、この記事は無効とすべきだろう。

¹²⁸⁾ この年、イジャスラフ [C35] がオレーグ・スヴァトスラヴィチ [C431] 討伐のためにプチヴリ ¹²⁹⁾ へ遠征を行った。三日間〔プチヴリの〕城市を包囲したが、なにも成功せず、ヴィリ (Вырь) へ戻った。なぜなら、〔イジャスラフは〕ヴィリからやって来たのだから ¹³⁰⁾。かれ〔イジャスラフ [C35]〕がヴィリに到着すると、ヴィリの住民は、かれに対して〔ヴィリの城市〕の城門を閉ざし、かれ〔イジャスラフ [C35]〕を城内に入れなかった。かれ〔イジャスラフ [C35]〕はそこから転進して、ザルティ ¹³¹⁾ (Зартыи) へと軍を進めた。そして、そこでしばらく滞在してから、再びヴィリへと戻った ¹³²⁾。

その時、オレーグ・スヴァトスラヴィチ [C431] は、ポロヴェツ人を撃ち破り、ポロヴェツの侯サントウズ (Сангуз) を殺した ¹³³⁾。

この年、ロスチスラフ [D116:J] は、キエフから川船の船団を組ませて、ユーリイ・ネステロヴィ

128) ここから、「ヴィリに到着すると」までの斜字の部分は、『イパーチイ年代記』にはなく、『ヴォスクレセンスカヤ年代記』の並行記事から補ったものである。

このプチヴリ遠征をユーリイ [B321] が行ったとすると理由がわからなくなるが、『ヴォスクレセンスカヤ年代記』の記事のように、イジャスラフ [C35] の敵スヴァトスラフ [C43] 一族の弱点を狙った報復的な軍事遠征と考えると、事件の全体がはっきりとする。ウクライナ語訳はこの説を採っており、本翻訳でもこれに従った。[Літопис руський, 1989: С. 276]

129) 「プチヴリ」(Путивль) は、デスナ川の左岸支流セイム川の中流域の城市で、当時はチェルニゴフ公スヴァトスラフ [C43] の息子オレーグ [C431] が支配公だった。

130) 「ヴィリ」(Вырь) は、セイム (Сейма) 川の支流ヴィリ川河畔に建てられた城市で、プチヴリからだ南東方向へ約 37km 離れている。現在のピロピリヤ (Білопілля) 市に相当する。

この時、イジャスラフはキエフを追われて、「ヴァティチの地」に引き下がっていたが、スヴァトスラフ [C43] に対する反攻を企てて、その拠点とするために、スヴァトスラフ [C43] の支配領の中で最東端で守りも薄い城市ヴィリを占拠したのだろう。

131) 「ザルティ」(Зартыи) は、セイム川右岸の城砦と推定されており、プチヴリからだ南東に 14km ほどの距離にある。現在のウクライナ・スームイ州プティウリ地区のヴォリンツェヴェ (Волинцеве) 村近郊に当たる。セイム川とデスナ川の間に位置していた。スヴァトスラフ [C43] の支配下にあったが、防衛体制は整っていないと思われる。

132) 後の記事に見るように (後注 146 参照)、このときには、イジャスラフ [C35] はヴィリの城内に入ることができたのだろう。そして、この城市を拠点として、ポロヴェツ人の勢力を集め、チェルニゴフ攻略の準備を行うことになる。

133) オレーグ [C431] はプチヴリ公だったことから、これは、イジャスラフ [C35] がプチヴリを包囲攻撃したときの「3日間」の防衛戦のことを言っている。この殺された「ポロヴェツの侯」(половецкий князь) は、イジャスラフ [C35] の遠征軍に同行し、包囲軍として戦ったポロヴェツの首長である。

チ¹³⁴(Нестерович)とヤクン¹³⁵(Якун)を遠征に派遣した。ベルラド人討伐のためだった¹³⁶。遠征軍は、オレーシエ¹³⁷(Олешье)を占領し、ドチン¹³⁸(Дцинь)にいた敵の団に追い付くと、かれらを撃ち破り、捕虜に獲った。

この年、ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] とヤロスラフ・イジャスラヴィチ [I2], ガーリチ人は、ムナレフ (Мунарєв) とヤロボルチ¹³⁹ (Ярополчь) との間の場所で、ポロヴェツを撃ち破り、ポロヴェツ人が捕虜とした多くの人々を解放した。その時、ベレンディ人も間違えて撃ち殺された¹⁴⁰。

この年、ログヴォロド [L11] が、ポロツク人を引き連れて、ロスチスラフ・グレーボヴィチ [L52] を討つべくミンスクへと軍を進めた¹⁴¹。すでに、ロスチスラフ [D116:J] は、ログヴォロド [L11] を助けるために¹⁴²、キエフから援軍として、ジロスラフ・ナシロヴィチ (Жирослав

134) キエフの軍司令官と考えられる。

135) 「ヤクン」はスモレンスクの千人長あるいは軍司令官で、ロスチスラフ [D116:J] の側近貴族。上注 111 を参照。

136) 「ベルラド人」(берладники)は、ドナウ川流域の城市ベルラドの住民。この地は、イワン・ロスチスラヴィチ [A1221] が、1144年にウラジミルコ・ヴォロダレヴィチ [A121] とのスヴェニゴロドをめぐる争いで敗れたあとの潜伏先だった。上注 52 も参照。

137) 「オレーシエ」(Олешье)はドニエプル川河口の州に建てられた城砦で、現在のヘルソン(Херсон)市から東へ8kmほどのツェルピンスク(Цюрупинськ)にその跡地がある。ドニエプル川、ドニエストル川、ドナウ川の通商の要所で、河口を防衛する拠点にもなっていた。

138) 「ドチン」(Дцинь; Дичин)は、ドナウ川河口に近い右岸に位置し、セレット川との分岐点にある城市の名称と推定されている。現在のルーマニアのトゥルチェア市(Tulcea)に相当する。

139) 「ヤロボルチ」(Ярополчь)は、ドニエプル川右岸支流、イルベニ川(Ирпень)の最上流右岸に位置し、ムナレフからだ、50km西方向にある。現在のウクライナジトムイル州ヤロボヴィチ(Яроповичі)に相当する。伝説によれば、ヤロボルク・スヴァトスラヴィチ公 [04] が、970年代にイルベニ川源流の近辺に城砦を築いたのが名称の由来とされている。

140) 上注 90 にあるように、城市ベルゴロドを巡る攻防戦で、包囲側のムスチスラフ [I1] 勢が、イジャスラフ [C35] に勝利したのは、イジャスラフ陣営のベレンディ人の裏切りをきっかけとしていた。「間違えて(въ облазнѣ)撃ち殺された」のは、それまでイジャスラフ [C35] に仕えていたが、その後ムスチスラフ陣営に転向したベレンディ人のことを言っているのではない。

141) ポロヴェツに公座を得たログヴォロド [L11] は、1158年夏頃にロスチスラフ [L52] 討伐のミンスク遠征を試みているが、10日間の包囲でも攻略できず、和議を結んで撤退している(上注 39 参照)。一年後に、ログヴォロドは再度ミンスク攻略を試みたのである。

142) ログヴォロド [L11] は、1143/1144年に、ロスチスラフ [D116:J] の兄イジャスラフ [D112:I] の娘と結婚しており([イパーチイ年代記(2):330頁,注250])、ログヴォロドにとってロスチスラフは、舅の弟(古語ではсват)にあたる。この支援も姻戚関係によるところが大きかっただろう。

Наширович) 率いる 600 人のトルク人¹⁴³⁾を派遣した。ところが、かれらは飢えのために死者が続出し、和が結ばれたあとでようやく、徒歩の部隊が到着するあり様だった。

ログヴォロド [L11] は、〔ミンスクの〕城市を 6 週間包囲した後に、自分に有利な条件でロスチスラフ [L52] と和を結んだ。そして、〔ログヴォロドは〕、ヴォロドシヤ¹⁴⁴⁾ [L224] を穴蔵から、ブリャチスラフ¹⁴⁵⁾ [L222] を鉄の枷から解放した。

二人〔ログヴォロド [L11] とロスチスラフ [L52]〕は〔和議を守ることを誓う〕十字架接吻をした。

この年、多数のポロヴェツ人が、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] のいる **[506]** ヴィリ (Вырь) にやって来た¹⁴⁶⁾。イジャスラフ [C35] は、このポロヴェツ人の全軍とともに、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] を討つべく、チェルニゴフへと進撃した。かれらは、デスナ川の支流クルイロフ川¹⁴⁷⁾ (Крыров) 河岸を河口まで陣を布いた。〔デスナ川の〕下流はゴストニヤニチ¹⁴⁸⁾ (Стопяничь) まで〔布陣した〕。

その時、スヴァトスラフ [C43] のもとは、甥のスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィ

143) この「ジロスラフ」はキエフの軍司令官で、600 人のトルク人は、キエフ公に臣従していた、黒頭民族を構成するチュルク系の部族の部隊。

144) 「ヴォロドシヤ」(Володьша)[L224] の名は、ヴォロダリ (Володарь) の通称。かれは、ヴァシリコ・スヴァトスラヴィチ [L22] (ポロツク公 (11129-1132 頃)) の息子にあたる。1158 年夏に、ログヴォロド [L11] が解放したイジャスラヴリを、ブリャチスラフ [L222] に与えたとき、その兄弟のヴォロドシヤ [L224] も、このイジャスラフの公座に就いたと推定される (上注 37 参照)。その後、『イパーチイ年代記』にはないが、15 世紀の『モスクワ年代記集成』の 1159 年の記事の中に「グレーブの息子たち〔ロスチスラフ [L52] とフセヴォロド [L51]〕はヴォロドシヤ [L224] とブリャチスラフ [L222] をイジャスラヴリで捕まえ、ヴォロドシヤを穴蔵へ監禁し、ブリャチスラフは鎖で拘禁した」(яша Глебовичи Володшу и Брячислава въ Изяславли, и всадиша Володшу въ порубь, а Брячислава окована держажут.) という記述がある [ПСРЛ Т. 25, 1949: С. 67]。これによれば、ロスチスラフ [L52] は、イジャスラフで捕らえた二人のヴァシリコの息子を、ミンスクの付属都市イジャスラヴリで拘留していたが、ログヴォロド [L11] との和議の条件として、解放を余儀なくされたということになる。

145) 「ブリャチスラフ」[L222] もヴァシリコ・スヴァトスラヴィチ [L22] の息子。捕縛と監禁からの解放の経緯については前注を参照。

146) ヴィリ (Вырь) は、ドン川一帯に居住する原野のポロヴェツ人 (дикие половцы) にとっては、もっとも近いルーシの城市の一つだった。イジャスラフ [C35] がヴァチイチの地からヴィリに移ったのも、ポロヴェツと合流するための戦略によるものだろう。

147) 「クルイロフ」(Крыров) 川は、デスナ川左岸支流で、現在のウゴリ (Угорь) 川のこと。その河口はチェルニゴフ城市から南へ 8km ほどしか離れていない。

148) 「ゴストニヤニチ」(Гостоянич; Гостянич) は、チェルニゴフ近郊のデスナ川左岸にあった城砦でチェルニゴフ城市から南へ 10km ほどの所に位置していた。

チ¹⁴⁹⁾ [C411:G]とリューリク [J2] がいた¹⁵⁰⁾。ロスチスラフ [D116:J] は、スヴァトスラフ [C43] のもとから、その息子フセヴォロド¹⁵¹⁾ [C433] を、〔人質として〕預かっていた。それは、キエフ人とベレンディ人を安心させるためだった。かれら〔キエフ人とベレンディ人〕はその罪深い誤解ゆえに、〔スヴァトスラフ [C43]〕を信頼していなかったのである。

こうして、デスナ川をはさんで、かれらと激しい戦闘が行われた。ある者は騎馬で、ある者は川船で進み、かれら〔敵〕に渡河を許さなかった。

陣を張っていた者たち〔イジャスラフ [C35] とポロヴェツ人たち〕は、大いなる悪行をなした。村々を焼き、住民たちを捕虜に獲ったのである。

二人のスヴァトスラフ〔オリゴヴィチ [C43] とフセヴォロドヴィチ [C411:G]〕は、ロスチスラフ [D116:J] に使者を派遣して、さらなる援軍を要請した。ロスチスラフ [D116:J] は、かれら二人のもとに、ヤロスラフ・イジャスラヴィチ [I2]、ウラジーミル・アンドレヴィチ [D181]、ガーリチ人を援軍として派遣した。

イジャスラフ [C35] とポロヴェツ人たちは平原へと去って行った。

かれら〔ヤロスラフ [I2]、ウラジーミル [D181]、ガーリチ人の援軍〕は、〔デスナ川に〕到着したが、かれ〔イジャスラフ [C35]〕を見つけることができなかった。

他方、二人のスヴァトスラフ〔オリゴヴィチ [C43] とフセヴォロドヴィチ [C411:G]〕とリューリク [J2] は、デスナ川を渡渉した。そして、一日行程の距離¹⁵²⁾を進軍したが、かれ〔イジャスラフ [C35]〕を見つけることができなかった。そこで、それぞれ〔の諸公〕は帰郷して行った。

さて、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] は、イーゴリ渡渉¹⁵³⁾ (Игорев брод) まで到達した。

149) スヴァトスラフ [C411:G] は、当時ノヴゴロド・セヴェルスキイ公だった。

150) チェルニゴフ公スヴァトスラフ [C43] は、来襲してくるイジャスラフ [C35] =ポロヴェツ連合軍に対抗するために、チェルニゴフ城に同盟諸公を呼び寄せたのである。なお、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事には、リューリク [J2] を派遣したのが、父親のロスチスラフ [D116:J] であることが明記されている。リューリク [J2] の派遣については、次注にあるフセヴォロド [C433] との人質交換の意味合いもあったかもしれない。[Соловьев 1988: С. 489]

151) スヴァトスラフ [C43] の息子フセヴォロド [C433] は、『イーゴリ軍記』の中で「荒れ牛」の異名をとって登場する人物。生年は不明であるが、兄のイーゴリ [C432] が1151年生まれであることを考えると、この公はまだ5～7歳くらいだったと考えられる。ここでは、キエフ人とベレンディ人にスヴァトスラフ [C43] を信用させるための人質としての役割を与えられている。

152) 「一日行程の距離」(днище)とは、チェルニゴフから50km～80kmほどの距離になる。

153) 「イーゴリ渡渉」(Игорев брод)の所在地は不明。チェルニゴフから東方のデスナ川右岸にあったと推定される。

するとそこに、チェルニゴフにいる自分の仲間たち¹⁵⁴⁾から報告がもたらされ、次のように言っていた。「公よ、どこにも行くな。そなたの兄弟スヴァトスラフ [C43] は病気である。その甥〔スヴァトスラフ [C411:G]〕は、かれのもとを去って、ノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕へ向かっている。自分の従士たちも手元から放して帰らせている。**【507】**なぜなら、スヴァトスラフ [C43] の健康は損なわれているのだから」。

イジャスラフ [C35] は、速やかに従士たちと協議して、忠誠を誓った異族の者たち¹⁵⁵⁾を率いると、チェルニゴフへ襲撃を仕掛けた。

スヴァトスラフ [C43] は、イジャスラフ [C35] の襲来を知らず、城門の前に張った軍営の中で、妃と子供達とともに滞在していた。その日は、日曜日であった。イジャスラフ [C35] はデスナ川の、スヴェンコヴィチ¹⁵⁶⁾ (Свѣнковиць) の対岸のところまで達していた。そして、翌日の早暁、自分の部隊にデスナ川の渡河を命じ、そのまま掠奪を許した。自分もデスナ川を渡った。

スヴァトスラフ [C43] のもとに報がもたらされた。イジャスラフ [C35] がデスナ川を渡渉して、ポロヴェツ人が掠奪を行っており、スパス〔聖救世主〕村¹⁵⁷⁾に火をかけたと言うのである。スヴァトスラフ [C43] は、速やかに自分の部隊に武装を命じ、ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181]、リューリク [J2] を〔探しだして〕連れてくるための使者を速やかに派遣した。その日のうちに、ウラジーミル [D181] は、自分の部隊とキエフ人部隊を率いてやって来ており、トゥドル・エルチチ¹⁵⁸⁾ (Тудор Елчиць) もガーリチ人の援軍を連れて速やかに駆けつけた。こうして、ウラジーミル [D181] は、全軍を率いてスヴァトスラフ [C43] のもとにやって来た。

スヴァトスラフ [C43] は、部隊を整え、布陣して待機した。全員がイジャスラフ [C35] 〔の襲来を〕待っていた。〔スヴァトスラフ [C43]〕は考えていた。〔イジャスラフ [C35]〕はその意図したとおりに行動するに違いない、なぜなら、すでに動き出したのだから。そして、〔スヴァ

154) イジャスラフ [C35] はチェルニゴフ公であった時に、在地の貴族や有力者と緊密な同盟を結んでおり、その後スヴァトスラフ [C43] がチェルニゴフの公座に就いたあとも、その勢力がまだ残っていたのだろう。

155) 「忠誠を誓った異族の者たち」(ротники) とは、下にあるベレンディ人やカエピチ人の傭兵を指している。

156) 「スヴェンコヴィチ」(Свѣнковиць) は、チェルニゴフからデスナ川上流 12km ほどのところにある「スヴィニ」(Свинь) 川 (現在のザムグライ川 (Замглай)) 河口の周辺にあったと推定される城砦あるいは村の名前。

157) 「スパス〔聖救世主〕村」(сѣльце святого Спаса) の所在は不明。チェルニゴフの首座教会は「スパス」(救世主) に奉獻されていることから、近郊にあるチェルニゴフ主教の所領の村だったのだろう。

158) イジャスラフ [C35] 討伐遠征に参加したガーリチ公ヤロスラフ [A1211] は、1158 年末にキエフに入城したが (上注 108 参照)、自身はまもなくガーリチに帰国し、キエフ公ロスチスラフ [D116:J] 支援のために、同行して来た軍司令官のトゥドル・エルチチ (Тудор Елчиць) とガーリチ人部隊を、キエフに残したのだろう。

トスラフ [C43] は、ベレンディ人とアエパ族¹⁵⁹⁾の若い精兵を選び出し、神助を願ってポロヴェツ人に対抗して戦わせた。〔精兵たちは〕かれら〔ポロヴェツ人〕と遭遇し、かれら〔ポロヴェツ人〕を撃ち始めた。かれら〔ポロヴェツ人〕の多くを撃ち殺し、他の者は搦め捕りに捕まえた。さらに、ポロヴェツ人に捕らえられて捕虜になっていた仲間たちを解放した。

イジャスラフ [C35] は **[508]**、ポロヴェツ人が斬られ、敗走し、また〔ポロヴェツ人〕の別の者たちがデスナ川で溺れ死んいくのを見て、かれら〔ポロヴェツ人〕に「何があったのか？」と訊いた。かれらは、かれ〔イジャスラフ [C35]〕に告げた。「われらは、〔チェルニゴフの〕城市に多数の部隊が待機しているのを見たのです」。イジャスラフ [C35] は怖じ気づいて、デスナ川の対岸へと引き返し、夜陰に紛れて、ヴィリへと逃げ戻った。

ウラジーミル [D181] は、スヴァトスラフ [C43] に対して、かれ〔イジャスラフ〕を追撃する許可を求めた。スヴァトスラフ [C43] はこれを許可したが、追撃には自分自身も参加した。そして、ヴィリに達すると、城市の周辺の防柵を焼き払った。

イワン・ロスチスラヴィチ [A1221] が〔イジャスラフ [C35] の〕妃¹⁶⁰⁾とともに〔ヴィリの〕城内に立て籠もった。イジャスラフ [C35] 自身は平原へと逃げ出した¹⁶¹⁾。

そこで、〔スヴァトスラフ [C43] は〕は〔ヴィリ周辺で〕陣を張り、それからザルティ¹⁶²⁾ (Зарытый) 方面へと向かい、そこで火を放ったり、多くの悪行をなして、それから帰郷した。

イジャスラフ [C35] のもとに、多数のポロヴェツ人がやって来た。かれ〔イジャスラフ〕は、

159) イパーチイ写本およびフレーブニコフ写本の読みは каепичи で、これは、ポロヴェツの「アカエパ」もしくは「アエパ」部族の者と解することができる。『原初年代記』の 6615(1107)年の記事によれば「オレーグ [C4] はアエパ〔ポロヴェツの首長〕の娘でギルゲニの孫娘にあたる女を息子の嫁にとった」〔ロシア原初年代記：305 頁〕とあり、この息子がスヴァトスラフ [C43] であることが定説となっている。ここでは、スヴァトスラフ [C43] は、この姻族関係によって、アエパ族の部隊を配下に擁しており、その中から若い精兵たち (молоди) を選抜して、イジャスラフ [C35] 勢のポロヴェツ人に対抗させたのだろう。

160) 普通にテキストを読むと、これはイワン・ベルラドニク [A1221] の妃と解されるが、これまで、年代記の記事では、スヴァトスラフ [C35] の妃について特別の注意が払われてきたこと ([イパーチイ年代記 (5) : 274 頁, 注 263] などを参照) から見て、ここもスヴァトスラフの公妃と考えるべきだろう。

161) ここの「平原」(поле) は、ポロヴェツの支配地であるドン川流域のステップ地帯を指している。

162) 上注 131 を参照。

かれら〔ポロヴェツ人〕とともにヴォロベйна¹⁶³⁾ (Воробейна) とロスーハ¹⁶⁴⁾ (Росуха) 方面へ行き、そこで掠奪を行うと、ヴシチジ¹⁶⁵⁾ (Вщиж) の自分の甥¹⁶⁶⁾〔スヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341]〕のところへ行った。

この年の冬¹⁶⁷⁾、イジャスラフ [C35] は、そこ〔ヴシチジ〕から、スモレンスクの領地¹⁶⁸⁾ を攻めるために出発し、掠奪を行った。そこでは、ポロヴェツ人¹⁶⁹⁾ が多くの悪行を行い、奴隷にするための捕虜を非常に多数¹⁷⁰⁾ 捕獲し、他は斬り殺した。

イジャスラフ [C35] は、そこ〔ヴシチジ〕から、アンドレイ・ユーリエヴィチ [D173] のもとに使者を遣って、かれ〔アンドレイ〕の娘を自分の甥のスヴァトスラフ [C341] に娶せるよう要請し¹⁷¹⁾、同時に、援軍を要請した。

かれ〔アンドレイ [D173]〕は、かれ〔イジャスラフ [C35]〕のもとに、〔援軍として〕自分の息子のイジャスラフ¹⁷²⁾ [D1731] に率いさせて、自分のすべての部隊を派遣した。ムーロム

163) 「ヴォロベйна」(Воробейна) は、デスナ川上流域のヴシチジ(Вщиж) 公領の付属都市で、現在のブリャンスク州ヴォロヴェイニャ(Воробейня) 村に相当する。ヴシチジ(Вщиж) からだと南南西方向に 36km の所に位置している。イジャスラフ [C35] は、甥スヴァトスラフ [C341] を頼って、ヴィリから 200km 以上も北上したことになる。

164) 「ロスーハ」(Росуха) も、デスナ川上流域のヴシチジ(Вщиж) 公領の付属都市。現在のブリャンスク州ユジナ・ラスーハ(Южна Расуха) 村に相当し、ヴシチジからだと南南西方向に 80km ほど離れている。

165) 「ヴシチジ」(Вщижь) はデスナ川上流域にあった城砦で、チェルニゴフからだと、デスナ川を北に向かって 370km ほど上ったかなり遠方で、現在のブリャンスク(Брянск) から 40km ほど上流に位置している。[イパーチイ年代記(5): 291 頁, 注 3523] も参照。

166) この「自分の甥」(сыновец свой) がスヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341] であることについては、1156 年の記事に「ウラジーミロヴィチ [C341] が、ベレゾイから逃げ出して、ヴシチジへと行った」という記述があることから、この年以降、ヴシチジがスヴァトスラフ [C341] の公領になっていたことが推定される。

167) 1159/1160 年の冬に相当する。

168) スモレンスクは、イジャスラフ [C35] にとっては、対立するロスチスラフ [D116:J] の支配領地だった。ロスチスラフがキエフ公に就位したことから、この時点では長子ロマン [J1] が公として治めていた。

169) これは、イジャスラフ [C35] と同盟して、ドン川の上流域からかれに同行してやってきたポロヴェツ人のこと。上注 163, 164 を参照。

170) 「非常に多数」(боле тмы) の тма は、「1 万」を意味する古チュルク語 tūmān からの借用語で、数詞としては「1 万人」を意味する。ここでは捕虜の数としてはあまり多いことから、厳密な数字というよりも、「非常に多数」という意味で取るべきだろう。

171) この結婚は、スヴァトスラフ [C43] = ロスチスラフ [D116:J] 陣営に対抗して、イジャスラフ [C35] とアンドレイ [D173] の間での同盟関係を強化するために企てられたものである。

172) アンドレイ敬神公の息子イジャスラフ [D1731] については、この個所が年代記では初出。

人¹⁷³⁾〔の部隊〕も、かれ〔イジャスラフ [D1731]〕とともにやって来た。なぜなら、すでにルーシの諸公が、スヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341] を討つためにやって来て、ヴシチジ〔の城市を〕包囲していたからである。

かれ〔スヴァトスラフ [C341]〕は、【509】〔ヴシチジの〕城の中から、かれら〔ルーシ諸公たち〕と戦っていた。その間に、叔父のイジャスラフ [C35] が、援軍を連れて来るのを待っていた。また、自分の〔将来の〕岳父アンドレイ [D173] から〔の援軍も待っていた〕。

〔ヴシチジを包囲していたルーシ諸公の〕二人のスヴァトスラフ、すなわちオリゴヴィチ [C43] とフセヴォロドヴィチ [C411:G]、及びリューリク [J2] と他の諸公は、イジャスラフ・アンドレエヴィチ [D1731] が、ロストフ人の大軍¹⁷⁴⁾を引き連れて進軍していることを聞いて怖じ気づき、かれ〔スヴァトスラフ [C341]〕と和を結んで、撤退して行った。

イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] とイジャスラフ・アンドレエヴィチ [D1731] は、〔敵が〕撤退したことを聞いた。そこで、イジャスラフ [C35] は、ヴァティチの地へ向〔けて引き返し〕た。他方、イジャスラフ・アンドレエヴィチ [D1731] は自分の父アンドレイのいるロストフへと引き返して行った¹⁷⁵⁾。

その遠征からイジャスラフ [C35] はヴァティチの地に向かったが、その時、かれ〔イジャスラフ [C35]〕は、ヴォロク¹⁷⁶⁾ (Волок) で、アンドレイ・ユーリイ [D173] と落ち合った。その時、

173) 当時のムーロム公はウラジーミル・スヴァトスラヴィチ [C511] (リャザン公も兼ねていた) であり、かれは、1147年に、ユーリイ [D17] によってモスクワに招待された際にスヴァトスラフ [C43] とともにモスクワに行っており、古くからスヴァトスラフ [C43] とは同盟関係にあった。『イパーチイ年代記』1155年の記事によれば、ウラジーミル [C511] は、ロスチスラフ [D116:J] に忠誠を誓っているが ([イパーチイ年代記(5):287頁,注331]参照)、すぐに誓いを翻したのだろう。

また、1152年にスーズダリ公ユーリイ [D17] は当時のリャザン＝ムーロム公ロスチスラフ・ヤロスラヴィチ [C54] と同盟してキエフに進軍している [イパーチイ年代記(5):249頁,注129]。この時点では、両公とも死去しているが、その後継者の代にも、ユーリイ一族とムーロム公一族の同盟関係は維持されていたと考えてよいだろう。

174) この「ロストフ人の大軍」は、上の記述の「自分(アンドレイ [C173])の全ての部隊」に相当する。

175) 「この年の冬、イジャスラフ [C35] は」(上注167)からここまでの部分は、『ラヴレンチイ年代記』にもほぼ同じ内容の並行記事があること、明らかにイジャスラフ [C35] = アンドレイ [D173] 同盟軍の立場から書かれていることから、ヴラジミル・スーズダリで記録された記事を資料としていると推定できる。

176) 「ヴォロク」(Волок) は普通名詞としては、河川を結ぶ「連水陸路」を意味し、この名をもつ地名は多い。ここの「ヴォロク」は、通称ヴォロコ＝ラムスク(Волоколамск)と呼ばれる地点で、ヴォルガ川水系とモスクワ川＝オカ川水系を結ぶ要所に位置している。

イジャスラフ [C35] は、自分の拠点であるオカ川流域のヴァティチの地に戻ってから、オカ川を下ってモスクワ川に入り、ヴォルガ川との接点である「ヴォロク」でロストフから来たアンドレイ [D173] と落ち合ったということだろう。

かれら〔イジャスラフ [C35] たち〕は、アンドレイの娘をスヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ¹⁷⁷⁾ [C341] に嫁がせるために、ヴシチジへと連れて行った¹⁷⁸⁾。

この年、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] は、スヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341] を討つべく、ヴシチジへと軍を進めた。かれ〔スヴァトスラフ [C43]〕とともに進軍したのは、二人のフセヴォロドヴィチ〔スヴァトスラフ [C411:G] とヤロスラフ [C412]〕、リューリク [J2] とキエフ人部隊、オレーグ・スヴァトスラヴィチ [C431]、スモレンスクのロマン [J1]、ポロツク¹⁷⁹⁾ のフセスラフ [L221]、クスチャチン・セロスラヴィチ (Кстытин Сѣрославичъ)¹⁷⁹⁾ とガーリチ人だった。かれらは、約 5 週間、〔ヴシチジ城を包囲して〕布陣した後に、かれ〔スヴァトスラフ [C341]〕と和を結んだ。その条件は、〔スヴァトスラフ・〕ウラジーミロヴィチ [C341] がスヴァトスラフ [C43] を父と見なし、すべてについて後者の命令に従って、従軍するというもので、〔前者は後者に〕十字架接吻をして〔誓った〕。こうして、一同はそれぞれの地へと帰郷した¹⁸⁰⁾。

アンドレイ [D173] は、イジャスラフ [C35] とヴォロクで出会った。

そして、〔アンドレイは〕ノヴゴロド人に対して使者を派遣してこう言った。「次のことを知るがよい。わしは、善き手段であれ、悪しき手段であれ、ノヴゴロドへの権利を主張し手に入れるだろう。そなたたちはかねて、わしに対して十字架接吻をして¹⁸¹⁾、【510】わしを自分たち

177) イパーチイ写本では Владимир¹⁷⁷⁾ となっているが、明らかな誤記なので、フレーブニコフ写本の読みである Владимирич¹⁷⁷⁾ を採用した。

178) この段落の記事も、内容的に前とつながっていることから、ヴラジミル・スーズドリ資料を用いていると考えてよいだろう。

179) このコンスタンチンは、ガーリチの上級貴族と考えられる。1157 年にイヴァン・ベルラドニク [A1221] の身柄をユーレイ [D17] から引き取りようとして、ヤロスラフ [A1211] が同名の側近貴族を派遣している ([イパーチイ年代記 (5): 298 頁, 注 395] 参照)。また、6680(1172) 年の記事にもガーリチの軍司令官として、「クスニャチン」(コンスタンチン) という人物が記されている (下注 616 参照)。これらと同一人物である可能性が高い。

180) この段落の記事と、すぐ後の、アンドレイ [D173] とイジャスラフ [C35] とのヴォロクでの会合は、その上の段落と内容的にダブっている。これは、ルーシ諸公のヴシチジ遠征やヴォロクでの会合が 2 度行われたのではなく、この段落の記事は、別の資料を用いたため、同じ事件について、記事がダブったと考えるべきだろう。記事では〈ルーシ諸公〉について詳しく書かれていることから見て、この部分は、チェルニゴフ公スヴァトスラフ [C43] のもとか、あるいはキエフで書き留められた記事が資料となっていると考えられる。[Бережков 1968: C. 332] も参照。

181) この、ノヴゴロド人とアンドレイ [D173] の間の十字架接吻の誓いが、何時どのような状況で行われたかについて、他の史料によって特定することはできない。「接吻した」の動詞が、複合的な過去完了形(プリアパーフェクト)で表現されていることから、かなり前のことを言っていると推定される。

の公とすると〔誓った〕。わしもそなたたちに〔善き事を〕望むことを〔誓ったのだから〕」。その時から、ノヴゴロド人のもとでは騒動が始まり、何度も民会が開かれた。

この年の冬¹⁸²⁾、ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] とその弟ヤロスラフ [I2]、ヤロポルク [I3]、ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181]、その兄弟のヤロポルク [D182] が¹⁸³⁾、ユーリイ・ヤロスラヴィチ [B321] を討伐すべく、トゥーロフへと進軍した。2週間半の間〔トゥーロフの〕城市を包囲したが、なにも戦果を挙げることができず、結局、それぞれ帰郷した¹⁸⁴⁾。

6669 [1161] 年

ノヴゴロド人は民会を開き、自分たちの公スヴァトスラフ・ロスチスラヴィチ [J4] のもとに使者を派遣して、こうかれに言った。「われらは、二人の公を持つことはできない。使者を派遣して、ノーヴィ・トルグ¹⁸⁵⁾ から〔あなたの〕兄弟のダヴィド [J3] を退去させよ¹⁸⁶⁾」。かれ〔スヴァトスラフ [J4]〕は、かれら〔ノヴゴロド人〕の心を損なわないよう、兄弟〔ダヴィド [J3]〕を退去させ、スモレンスクのロマン [J1] のもとへと行かせた¹⁸⁷⁾。

その時で、かれら〔ノヴゴロド人〕の悪意が止まることはなく、悪意はますますひどく働くようになった。しばらく待ってから、〔ノヴゴロド人は〕スヴァトスラフ [J4] に反旗を翻す民

182) 1159/1160年の冬に相当する。

183) このとき、ムスチスラフ [I1] はヴラジミルに、その弟ヤロスラフ [I2] はルチェスクに、ヤロポルク [I3] はおそらくブジェスクに座していたと考えられる。また、ウラジーミル [D181] も、その兄弟ヤロポルク [D182] とともに、ルチェスク近くの付属都市（ペレソプニツァもしくはドロゴブージ）に公座を持っていたのだろう。

184) この、ムスチスラフ [I1] を初めとするヴラジミル＝ヴォルィニ地方諸公の、ユーリイ・ヤロスラヴィチ [B321] 討伐遠征の理由は、かれらの父（祖父）の時代からの、大ムスチスラフ [D11] 公とヤロスラフ [B32] との対立に遡ることができる。〔イパーチイ年代記(5)：281頁、注296〕参照。ムスチスラフ [I1] 等は、トゥーロフのユーリイ [B321] の勢力が弱まったことを見て、旧領トゥーロフの回復を企てたと考えられる。

なお、1158年にも、キエフ公になったイジャスラフ [C35] が、ユーリイ・ヤロスラヴィチ [B321] 討伐のトゥーロフ遠征を行っており（〔イパーチイ年代記(5)：304頁、注421〕）、これは、ユーリイ [D17] の死によって空白になったトゥーロフの公座を不当に略取したことに対する懲罰だったが、総じてトゥーロフの公座は不安定と見なされていたのだろう。

185) 「ノーヴィ・トルグ」については、〔イパーチイ年代記(3)：338頁、注55〕を参照。

186) 「二人の公」の経緯については、『ノヴゴロド第一年代記』の6666(1158)年の記事に、それまでノヴゴロド公だったロスチスラフ [D116:J] がノヴゴロドを退去する際に「かれ〔ロスチスラフ〕は、自分の息子スヴァトスラフ [J4] をノヴゴロドの公座に就け、ダヴィド [J3] をノーヴィ・トルグの公座に就けた」とある〔Новгородская первая летопись: С. 30, 217〕〔ノヴゴロド第一年代記 XII: 25頁〕。

187) 年代記記述の時系列から見ると、1160年の3月頃のことと考えられる。

会を開いた。こうして、かれらはロスチスラフ [D116:J] とその息子スヴァトスラフ [J4] に対する十字架接吻〔の誓い〕に違反したのである¹⁸⁸⁾。

公〔スヴァトスラフ [J4]〕は、城砦区にある聖受胎告知教会¹⁸⁹⁾に居を定めていたが、見よ、そこのかれのところに伝令が駆けつけてきて言った。「公よ、城内で大きな悪事がなされています。人々があなたを捕らえようとしています¹⁹⁰⁾」。すると、スヴァトスラフ [J4] が言った。「わしを捕まえようとしているなど、いったいわれらが、かれら〔ノヴゴロド人〕にどんな悪をなしたというのか。かれらは、わしの父に対して十字架に接吻¹⁹¹⁾して、わしの生命が尽きるまで、わしを自分たちの公とすることを誓ったのではないか。また、昨日はみながわしに対して聖なる聖母に接吻し〔て忠誠を誓っ〕たのではなかったか」。

かれ〔スヴァトスラフ [J4]〕がこう言うと、見よ、多勢の民衆が乱入して、公〔スヴァトスラフ [J4]〕を捕まえて、小屋の中に閉じ込め、**【511】** 公妃を修道院へと連行し¹⁹²⁾、かれの従士たちを枷で縛めた。そして、かれとその従士たちの財産を掠奪した。その後、公〔スヴァトス

188) 『ノヴゴロド第一年代記』6665(1157)年の記事によれば、ムスチスラフ [D17:J] に入れ替わる形でノヴゴロドにダヴィド [J3] とスヴァトスラフ [J4] が入った三日後に、ロスチスラフ [D116:J] 自身もノヴゴロドにやって来て、翌年の記事の冒頭で息子二人をそれぞれ公座に着けて当時の領地であったスモレンスクへ帰って行った ([Новгородская первая летопись: С. 30, 217][ノヴゴロド第一年代記 XII: 24 頁])。このプロセスのどこかで、ノヴゴロド人は、ロスチスラフ [D116:J] とスヴァトスラフ [J4] を裏切らずに忠誠を誓う旨の十字架接吻を行っていたと推測できる。

189) 「城砦区」(городище)は城市の中心から南に2kmほどヴォルホフ川を遡った右岸に位置しており、ユーリエフ修道院のほぼ対岸に建てられた小規模な城砦。考古学的には9世紀までさかのぼることができ、古くからノヴゴロドに招聘された公とその従士団の住居がおかれていた。12世紀になって、ノヴゴロドで民会の発言力が高まるにつれて、城砦区は、ノヴゴロド公の居住地のみならず、ノヴゴロドにおける公権力の象徴的な場所と見なされるようになった。1103年には、ここに、当時のノヴゴロド公ムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ [D11] の手で、「聖受胎告知教会」(святое Благовещение) が定礎されている。

190) 『ラヴレンチイ年代記』6668(1160)年の並行記事では、ノヴゴロド人のスヴァトスラフ [J4] 追放について、「なぜなら、かれの父ロスチスラフ [D116:J] は、かれら〔ノヴゴロド人〕の兄弟たちを地下牢に繋いで苦しめ、多くの財産を取り上げたからである」として、『イパーチイ年代記』では以下に書かれている、キエフでのロスチスラフ [D116:J] によるノヴゴロド人弾圧が、スヴァトスラフ [J4] 排斥運動の直接の原因だったように書かれている。

191) 1160年の受胎告知祭は3月25日で、この年の復活祭3月27日に近く、特別な祭日だったと考えられる。この聖母への接吻とは、受胎告知祭の時にノヴゴロドの有力者たちが、スヴァトスラフ公 [J4] の受胎告知教会に参詣して、聖堂の本尊である聖母イコンに接吻して、公に忠誠を誓ったことを指している可能性がある。

192) 『ノヴゴロド第一年代記』6668(1169)年の記事では、この修道院は「ヴァルヴァラ修道院へ」(въ монастырь святых Варвары) (ソフィア区にある女子修道院) と特定されている。[Новгородская первая летопись: С. 30, 217]

ラフ [J4] をラドガ¹⁹³⁾ (Ладoga) へと連行し、かれを〔監禁して〕、多数の監視をつけた。

キエフのロスチスラフ [D116:J] に報告がもたらされた。かれの息子〔スヴァトスラフ [J4]〕がノヴゴロドで捕らえられたというのである。〔ロスチスラフ [D116:J]〕は〔キエフに滞在していた〕ノヴゴロド人たちを逮捕して、ペレセチェン¹⁹⁴⁾ の地下牢 (П ересѣченъскыи погреб) に投げ込むよう命じた。こうして、一夜のうちに〔ノヴゴロドの〕14人の有力者が死んだ。

ロスチスラフ [D116:J] に対して、地下牢で人が窒息死したという報告がなされた。かれは、かれら〔ノヴゴロド人〕のことを悲しみ、かれらを地下牢から出して、それぞれの城市へと帰すよう命じた。

ノヴゴロド人は、スーズダリのアンドレイ・ユーリエヴィチ [D173] のもとに使者を遣ると、かれの息子¹⁹⁵⁾ をノヴゴロドの公にするよう請願した。かれ〔アンドレイ〕は、かれら〔ノヴゴロド人〕に息子を与えず、自分の兄弟のムスチスラフ [D17j] を与えようとした。しかし、かれら〔ノヴゴロド人〕はかれ〔ムスチスラフ [D17j]〕を望まなかった。かれ〔ムスチスラフ [D17j]〕は、以前にかれら〔ノヴゴロド人〕のもとで公だったからである¹⁹⁶⁾。結局、〔アンドレイは〕自分の甥である、ムスチスラフ・ロスチスラヴィチ¹⁹⁷⁾ [D1711] を、かれら〔ノヴゴロド人〕のもとに〔公として〕行かせた¹⁹⁸⁾。

神が、また尊い十字架の力が、スヴァトスラフ [J4] を解放した。かれはポロツクへ行った。

193) 「ラドガ」(Ладoga) は、ヴォルホフ川の河口に位置するノヴゴロドの古い付属城市。

194) 「ペレセチェニ」(Пересѣчен) は、キエフの丘から南南東6kmほどのドニエプル右岸の地名で、ほぼルイベジ川がドニエプルに注ぐ河口あたりにあった。城外の軍事施設があり、そこに地下牢獄も設置されていたのだろう。〔イパーチ年代記(5):279頁、注238〕も参照。その場所は、現在のドニエプロ・ペトロウスクに相当する。

195) 先にヴシチジ遠征のときに活躍したイジャスラフ [D1731] (上注172) を指すと思われる。

196) ムスチスラフ [D17j] は1155年1月にノヴゴロド公となり、およそ2年後の1157年3月に市民の騒動によって公座から追放されている。『イパーチ年代記(5):303頁、注417〕を参照。この時点(1160年春)では、ノヴゴロドには、かつてムスチスラフ [D17j] を追放した勢力が力を保っていたということだろう。

197) ムスチスラフ [D1711] の父であるロスチスラフ [D171] は、1139年にノヴゴロドで公に就いているが、ほどなくして追放されている。ロスチスラフ [D171] は、1151年に逝去しており、その息子ムスチスラフ [D1711] は、当時最年長の叔父アンドレイ [D173] の庇護下にあったと推定される。

198) 『ノヴゴロド第一年代記』6668(1160)年の記事によると、「(ノヴゴロド人は)ユーリイ [D17] の孫でロスチスラフ [D171] の息子ムスチスラフ [D1711] を、〔1160年〕6月21日に〔城内〕に引き入れた」としている。〔Новгородская первая летопись: С. 30-31, 218〕〔ノヴゴロド第一年代記 XII: 25頁〕

ログヴォロド [L11] は、かれ〔スヴァトスラフ [J4]〕をポロツクからスモレンスク¹⁹⁹⁾まで連れて行った²⁰⁰⁾。

この年、ヴラジミル〔クリャジマの〕の聖なる聖母教会の石造りの聖堂が完成した²⁰¹⁾。篤信にして敬神の公アンドレイの手になるものだった。かれは、聖堂を驚異の、多くの種類のイコンや無数の宝石、聖なる器物で飾った。聖堂の屋根は金で葺いた。神は、かれ〔アンドレイ〕の聖なる聖母に対する信仰と努力を嘉して **[512]**、あらゆる地方から職人たちをこの地に導き、他の教会とは比べものにならないほど美しく聖堂を飾ったのである。

この年、ロストフで火事があり、すべての教会が焼けた。大いなる驚異の聖なる聖母の首座教会²⁰²⁾も燃えた。このような〔素晴らしい教会は〕かつてなく、これからもないであろう²⁰³⁾。

この年、ログヴォロド [L11] が、ロスチスラフ・グレーボヴィチ [L52] を討つべくミンスクへと軍を進めた。そして、かれ〔ロスチスラフ [L52]〕と和を結んでから、帰郷した。

この年、月にしるしがあった。あたかも、それ〔月〕がすべて消滅するようだった。8月20日のことである²⁰⁴⁾。

この年、ロスチスラフ [D116:J] は、スヴァトスラフ [C43] のもとに使者を遣って言った。「息子のオレーグ [C431] を、わしのもとへ派遣せよ。かれ〔オレーグ [C431]〕が、キエフ人の要

199) スモレンスクはロスチスラフ [D116:J] 一族の拠点都市であり、当時は、スヴァトスラフ [J4] の兄弟ロマン [J1] が公支配しており、兄弟のダヴィド [J3] も滞在していた。

200) 当時のポロツク公ログヴォロド [L11] が、このスヴァトスラフ [J4] の父親ロスチスラフ [D116:J] (当時はキエフ公) と姻戚関係を含めた同盟関係にあったことについては、上注 142 を参照。

201) ヴラジミル〔クリャジマ河畔の〕の首座教会である「聖母就寝教会」(Успенский собор) の聖堂の完成のこと。1158年にアンドレイ [D173] によって定礎され ([イバーチイ年代記 (5): 302 頁, 注 411] 参照), この年 (おそらく 1160 年) に完成したことになる。

202) ロストフに建立された「聖母就寝教会」(Успенская церковь) のこと。木造教会だが、いつ建てられたかは不明。

203) ヴラジミルの聖母教会建立とロストフの聖堂の火事の記事は、『ラヴレンチイ年代記』6668(1160)年の項にも同一の並行記事がある。内容からみても、明らかにウラジーミル=スーズダリ記事に拠って書かれている。なお、この記事が挿入された前後の記事の時系列 (直後に 1160 年 8 月の月食の記事があるなど) から推測して、この事件が起こったのは、1160 年と考えることができる。

204) 1160 年 8 月 18 日の夕方に、最大食分 0.6 程度の月食がこの地方で観測されている。二日の差はあり、皆既食ではないものの、この時の月食を指すと見てよいだろう ([Бережков 1963: С. 163, 172] 参照)。ただし、1161 年 8 月 7 日に皆既月食 (「すべてが消滅する」) が観測されており、こちらを指している可能性も否定できない。([日食・月食・星食情報データベース] 参照)。

人たち、ベレンディ人、トルク人と知り合いになるために²⁰⁵⁾」。スヴァトスラフ [C43] は、いかなる邪心もなく²⁰⁶⁾、かれ〔ロスチスラフ [D116:J]〕のもとに自分の息子〔オレーグ [C431]〕を派遣した」。

オレーグ [C431] は、オルジチ²⁰⁷⁾ (Олжичь) に到達すると²⁰⁸⁾、そこからロスチスラフ [D116:J] に使者を遣って、かれに言った。「兄弟よ、そなたは、わたしがどこで留まるよう命ずるのですか」。ロスチスラフ [D116:J] は、かれ〔オレーグ [C431]〕に対して、オレーグ〔の墓〕²⁰⁹⁾ のところで留まるよう命じた。なぜなら、自分自身は、ボロク (Борок) 近郊のシェルヴォヴェ²¹⁰⁾ (Шелво́ве) の村に幕営を張っていたからである。

こうして、〔オレーグ [C431] は〕かれ〔ロスチスラフ [D116:J]〕のもとで、2日間昼食をともにした。3日目にオレーグ [C431] が幕営を馬で出かけようとした²¹¹⁾。すると、かれら〔オレーグの従士たちの〕前に、ロスチスラフ [D116:J] の家臣の一人が、かれ〔オレーグ [C431]〕を迎えてこう言った。「公よ、わたしには、あなたに対して重大な事柄があります。どうか約束して下さい。これを、誰にも言わないことを」。そこで、〔オレーグ [C431] は〕かれに約束した。

205) ロスチスラフ [D116:J] は、イジャスラフ [C35] が再び攻めてくることに備えて、スヴァトスラフ [C43] と同盟関係を強化し、スヴァトスラフの息子オレーグ [C431] がキエフの軍隊(キエフ人、ベレンディ人、トルク人)の指揮を執れるようにと考えた上での招聘だったと思われる。同時に、同盟を保証するための人質という意味合いもあっただろう。

206) この「いかなる邪心もなく」(безо всякого извѣта)の表現は、1159年5月のモロヴィイスクの会合におけるスヴァトスラフ [C43] の姿勢を描くときにも用いられており(上注123参照)、スヴァトスラフ [C43] に好意的な年代記記者の慣用表現である。「相手に悪意があることをまったく疑うことなく」の意味。

207) 「オルジチ」(Олжичь)は1142年の項にも「オリジチエ」(Ольжичие)として言及されている「オリガの村」を意味する場所([イパーチイ年代記(2):326頁,注229]参照)。ドニエブル川とデスナ(Десна)川の合流地点近くにあり、キエフの丘からは北東に9kmほど離れ、ドニエブル川左岸を並行して流れる Choltoi 川に接している。

208) オレーグ [C431] は、当時プチヴリの公位に就いていたことから、キエフに行くためには、セイム川からデスナ川に入り、ドニエブル川に入る手前で、一旦陣を構えたことになる。

209) 「オレーグのところ」(Олговы стати)とは、キエフの丘北西に隣接するシチェコヴィツァの丘(Щековица)にあったと推定されている「オレーグの墓」(Ольгова могила)を指している。([イパーチイ年代記(2):343頁,注345]参照)。ロスチスラフ [D116:J] は、オレーグ [C431] に、ドニエブルを渡って、キエフの丘の側に来るように指示したのである。

210) 「シェルヴォヴェ」(Шелво́ве)は、キエフの丘から西に3kmほど行った村(сьлец)の名前で、街道沿いに「ボロク」(борок)(普通名詞としては「小さな森」という意味)を通過して行くことができた。1146年にはイジャスラフ [D112:I] が、イーゴリ [C42] 及びスヴァトスラフ [C43] と戦った際に、イジャスラフ [D112:I] が陣を張ったところで、ここには西側からの攻撃に備えるための土塁が築かれていた。

211) オレーグ [C431] とのその従士団が、キエフ人、ベレンディ人、トルク人の部隊と「知り合い」になり、共同行動をとれるようにするための、いわば軍事演習のことだろう。

すると、〔家臣は〕、かれに言った。「公よ、わたしは本当のことを言います。気をつけなさい。あなたは捕えられようとしています²¹²⁾」。

オレーグ [C431] は、母親が病気になったとの口実を使って **【513】**、チェルニゴフの父親のもとに帰郷することを、ロスチスラフ [D116:J] に願い出た。ロスチスラフ [D116:J] は、〔オレーグに〕親愛²¹³⁾を抱いてきたことから、かれ〔オレーグ [C431]〕を自分のもとから帰してしまうことは望んでいなかった。かれの心の中に悪意はなかったからである。ところが、邪悪な人間たちが、兄弟の間に善意を見ることを望んでいなかった。そして、そのように〔悪を〕なしたのである。

ロスチスラフ [D116:J] は、オレーグ [C431] を父親のもとへ帰郷させた。オレーグ [C431] はチェルニゴフに到着すると、そのこと〔帰郷した理由〕を父親に告げず、内心では父親に対して怒りを抱き、父親にクルスク²¹⁴⁾ (Курьск) へ行かせてくれるよう頼み始めた。スヴァトスラフ [C43] は事の次第をすべて知らないまま、オレーグ [C431] を自分のもとからクルスクへと行かせた²¹⁵⁾。

すると、見よ、イジャスラフ [C35] の使者が、親愛を求める言葉を携えて、〔クルスクのオレーグ [C431] のもとに〕やって来た。オレーグ [C431] は、自分の家臣をたちに、イジャスラフ [C35] の言葉を披露した。なぜなら、二人のフセヴォロドヴィチ〔スヴァトスラフ [C411:G] とヤロスラフ [C412]〕が、イジャスラフ [C35] と親愛を結んでいたからである²¹⁶⁾。

家臣たちはオレーグ [C431] に言った。「公よ、いったい、〔ロスチスラフ [D116:J] が〕キエフであなたを捕らえようとし、チェルニゴフをあなたの父親からとりあげて与えようとした²¹⁷⁾ ことは、善い事でしょうか。あなたの父親はすでに正しく、あなたも、十字架接吻にお

212) 以下の事態の進展から見ると、この家臣の進言は中傷であり、オレーグ [C431] とロスチスラフ [D116:J] を離反させ、さらに、オレーグ [C431] を父スヴァトスラフ [C43] を仲違いさせて、オレーグ [C431] をイジャスラフ [C35] 陣営に引き込もうとする謀略によるものだったことが分かる。

213) この年の記事に類出する「親愛」(любовь) は、基本的には「同盟関係にあること」、より広義には「味方であること」を意味している。

214) 「クルスク」(Курьск) はプチヴリよりさらにセイム川を上流に遡ったところにあり、平原(ステップ地帯)との境界にある城市。プチヴリの付属城市でスヴァトスラフ [C43] の支配下にあったと思われる。オレーグ [C431] が、平原に近いクルスク行きを願い出たのは、以下に述べられるイジャスラフ [C35] との同盟をすでに念頭に置いていたのだろう。

215) 『ヴォスクレセンスカヤ年代記』の並行記事では、この後に「オレーグ [C431] はクルスクへと出発した」の文言がある。

216) イジャスラフ [C35] は、当時ノヴゴロド・セヴェルスキイにいたスヴァトスラフ [C411:G] とヤロスラフ [C412] に対して工作を行い、ロスチスラフ [D116:J] =スヴァトスラフ [C43] 同盟から離反させることに成功していたことが分かる。

217) これはすぐ下で明らかにされるように、「ロスチスラフ [D116:J] が、チェルニゴフをスヴァトスラフ [C43] から取り上げてイジャスラフ [C35] に引き渡そうとしている」という噂のことを言っている。

いて〔正しく行動しているのです²¹⁸⁾〕。そして、オレーグ [C431] は父親と相談せずに、イジャスラフ [C35] と親愛を結んだ。

スヴァトスラフ [C43] のところに報告がもたらされた。二人のフセヴォロドの息子たち〔スヴァトスラフ [C411:G] とヤロスラフ [C412]〕、及びかれの息子オレーグ [C431] が、イジャスラフ [C35] と親愛の和議を結んだというのである²¹⁹⁾。スヴァトスラフ [C43] は、これを知って大変悲しみ、自分の家臣たちに、二人のフセヴォロドの息子たち〔スヴァトスラフ [C411:G] とヤロスラフ [C412]〕とオレーグ [C431] が、イジャスラフ [C35] の味方になったことを告げた。

家臣たちは、かれ〔スヴァトスラフ [C43]〕に言った。「公よ、あなたが、自分の甥〔イジャスラフ [C35]〕やオレーグ [C431] に憐れみをかけて **[514]**、自分の命と財産²²⁰⁾を守ろうとしないのは驚くべきことです。見よ、ロマン・ロスチスラヴィチ [J1] が、スモレンスクから、自分の司祭をイジャスラフ [C35] のもとに派遣して、『親父〔ロスチスラフ [D116:J]〕は、そなたにチェルニゴフを与えるだろう。親愛をもって、わし〔ロスチスラフ [D116:J]〕とともに生きよ』と言ったことは、虚報ではありません。他方、かれ〔ロスチスラフ [D116:J]〕自身は、あなたの息子〔オレーグ [C431]〕をキエフで捕らえようとしたのです。公よ、あなたはすでに、ロスチスラフ [D116:J] と手を結んだために、自分の領地を失っています。かれ〔ロスチスラフ〕はいつも、渋々としかあなたを助けていないではないですか」。

こうして、スヴァトスラフ [C43] は、やむを得ず、おのれの親愛をロスチスラフ [D116:J] からイジャスラフ [C35] へと移したのだった。

ポロヴェツ人は、多勢でイジャスラフ [C35] のところに向けて出発した²²¹⁾。イジャスラフ [C35] は、二人のフセヴォロドの息子の〔スヴァトスラフ [C411:G] とヤロスラフ [C412]〕兄弟たち、オレーグ [C431] と合流した。スヴァトスラフ [C43] は、チェルニゴフからやって来なかった²²²⁾。

218) 1158 年夏頃に、スヴァトスラフ [C43] とイジャスラフ [C35] が、ルタヴァで会合して合意したこと (上注 61 参照)、さらに 1159 年 5 月 1 日に、ロスチスラフ [D116:J] とスヴァトスラフ [C43] が、モロヴィイスクの会合において (上注 123, 124 参照) 合意した約定 (十字架接吻) を指している。

219) 上注 216 を参照。

220) 「命と財産」と訳した語は原文では живот の一語。当時の用語法では両方の意味を兼ねており、文脈でも両方を意味している ([Колесов 1986: С. 73-81])。

221) イジャスラフ [C35] は、ヴィリ (Вырь) に拠点を置いて、オレーグ一族諸公を味方につける外交工作を行うと同時に、キエフへの進攻、攻略を狙っていた。

222) 直前の記事に、スヴァトスラフ [C43] は、同盟相手をロスチスラフ [D116:J] からイジャスラフ [C35] へと換えたことから、その文脈から見れば、チェルニゴフから「やって来て」遠征に参加したと読むほうが自然である。それとも、スヴァトスラフ [C43] が遠征に不参加だったのは、ロスチスラフ [D116:J] に対して直接の敵対行動をとることにまだ躊躇があったのか。

〔イジャスラフ [C35] は〕 ポロヴェツを迎えるために平原に出て、ポロヴェツ人と合流した。そして、〔イジャスラフ [C35] は〕 自分の娘婿である²²³⁾ グレーブ [D178] を討つべく、ペレヤスラヴリへ向かった。かれ〔イジャスラフ〕は、かれ〔グレーブ〕に、自分とともにドニエブルを渡って、ロスチスラフ [D116:J] を討伐するように命じていたが、グレーブ [D178] は、かれらとは行動をともにしなかった〔からである〕。〔イジャスラフ [C35] たちは〕 ペレヤスラヴリで2週間、布陣をして〔城市を包囲したが〕、なにも成功しなかった。

ロスチスラフ [D116:J] のもとに報告がもたらされた。イジャスラフ [C35] が、すべての兄弟たちとともにペレヤスラヴリに到来したというのである。キエフの大いなる公ロスチスラフ [D116:J] は、多くの兵を集めると、イジャスラフ [C35] を討つべく出発し、トレポリ (Треполь) に達した²²⁴⁾。イジャスラフ [C35] は、ロスチスラフ [D116:J] が部隊を率いて、自分を討ちにやって来ることを聞いた。そして、イジャスラフ [C35] は逃げ出し、ポロヴェツも平原へと逃げて行った²²⁵⁾。

この年、府主教フェオドールが帝都からやって来た。【515】8月だった。ロスチスラフ公 [D116:J] が使者を派遣して、かれを招請したからだった²²⁶⁾。

イジャスラフ [C35] は、自分の兄弟たちとともに親愛をもって集合し、ポロヴェツ人を呼び招く使者を派遣した。こうして、かれのもとに大勢のポロヴェツ人がやって来た。

イジャスラフ [C35] は、二人のフセヴォロドの息子〔スヴァトスラフ [C411:G] とヤロスラフ [C412]〕とオレーグ [C431]、ポロヴェツ人とともに出発して²²⁷⁾、ヴィシエゴロドを目指して、

223) 上注 96 を参照。

224) 「トレポリ」(Треполь) はキエフの南南東約 50km のドニエブル川右岸に位置する城砦で、ペレヤスラヴリからドニエブルを渡河して、右岸沿いにキエフに向かって攻め上る軍隊を迎え撃つには好位置にあった。

225) この段落の記事は、ロスチスラフ [D116:J] に「キエフの大いなる公」(великий же князь Киевский) の称号が付されていることから見ても、かれに好意的な記事を資料として用いたと考えられる。

226) 1159 年 4 月頃にロスチスラフ [D116:J] は、新しい府主教をコンスタンティノポリスから招請することを、ムスチスラフ [I1] と約定している (上注 117 参照)。1 年以上経った 1160 年 8 月に、ようやく新しい府主教がキエフに着任したことになる。[Бережков 1963: С. 175-176]

227) 拠点地であったヴィリ (Вьрь) を出発したのである。

御堂²²⁸⁾の方面へと向かった。もう、日が暮れ始め、他には宿営を張る場所がどこにもなかったからである。その御堂のところでドニエプル川を渡河し、部隊を率いてキエフへ向かって進撃した。〔近くまで〕やって来ると、ドロゴジチ²²⁹⁾(Дорогожич)の向かいにある沼の柳の群生地陣を張った。

翌朝の2月8日²³⁰⁾、その日は水曜日だった。イジャスラフ[C35]は兄弟たちとともに、部隊を整列させ始めた。こうして武装をすませると、ポドリエ地区へ向かって軍を進めた²³¹⁾。他方、ロスチスラフ[D116:J]は、〔ウラジーミル・〕アンドレエヴィチ²³²⁾[D181]とともに、防柵のところに布陣していた。そのとき、丘からドニエプルの川岸までびっしりと、防柵が巡らせてあったのである²³³⁾。

両軍は非常に激しく戦った。多くの者が斃れ、両軍からは死者が続出した。見るも凄まじく、あたかも主の再臨が始まったかのごとくだった。

イジャスラフ[C35]側の形勢が良くなり始めた。すでにポロヴェツが〔キエフ〕城内に乱入しており、防柵を切り倒して、リハチ(Лихач)とラディスラフ(Радьслав)の司祭の館²³⁴⁾に火

228) この「御堂」(божьница)は、1150年の記事にもある「ダヴィドヴァ・ボジェンカ」と同じものを指し、ヴィシェゴロド近くにあったドニエプル川の渡河地点のこと。〔イパーチイ年代記(4):358頁、注181〕を参照。

この度の遠征では、イジャスラフ[C35]率いる諸公連合軍は、セム川からデスナ川の氷上を橇で遡行し、ヴィシェゴロドの地点でドニエプル川を渡河し、北からキエフを攻略する作戦を採ったことになる。

229) 「ドロゴジチ」(Дорогожич)は、キエフのポドリエ街区の北に面し、ポチャイナ川沿いに広がる一帯の名称で沼沢地帯だった。〔イパーチイ年代記(4):343頁、注111〕参照。

230) 1161年の2月8日は水曜日に当たり、この年のことである。

231) ポドリエ地区は、キエフ都市の内部で北側に位置する地区。南のヤロスラフ街区をはじめとする各街区より低地になっている。ヴィシェゴロドからドロゴジチの沼沢地を経てキエフに入る場合、通常の経路を取ればシチェコヴィツァの丘を右手に見る形でポドリエ地区へ入る門がある。イジャスラフ[C35]の軍はその経路でキエフに入ろうとしていたのだろう。

232) ウラジーミル・アンドレエヴィチ[D181]は、1158年12月にキエフに入城し、その後、ロスチスラフ[D116:J]がキエフ公になった後も、おそらくキエフにとどまって、ロスチスラフの支援をしていたのだろう。

233) この「防柵」(столпье)とは、ポドリエ地区(北側)とドロゴジチの沼の間に設置された、丸太による防衛用の柵のことで、ポチャイナ川の対岸にも、ドニエプルの川岸まで柵が打ち込まれていた。

234) 「リハチ(Лихач)とラディスラフ(Радьслав)の司祭の館」(двор Лихачевъ попов и Радьславль)については詳細は不明だが、名が挙がっている「リハチ」と「ラディスラフ」は、ポドリエ地区に居館を持っていた豪族(貴族)もしくは裕福な司祭の名前と考えられる。

をかけていた。ベレンディ人たちは、ウゴルの丘²³⁵⁾の方へと逃げ出し、他の者たちは金門²³⁶⁾の方へ〔逃げていった〕。

ロスチスラフ [D116:J] の従士たちはこう言い始めた。「公よ、あなたの兄弟たちは、あなたに加勢しようとせず、ベレンディ人もトルク人も〔逃げています〕。【516】かれら〔敵たちの〕兵力は強大です。どうか、ベルゴロドへ行って下さい。そこで、自分の兄弟たちを、また味方の援軍を待って下さい」。ロスチスラフ [D116:J] は、かれら〔従士たち〕の言葉を聞いて、自分の〔従士の〕部隊と、妃を連れてベルゴロドへと向かった。

その日、かれ〔ロスチスラフ〕のもとに、かれの甥ヤロスラフ [I2] とその兄弟のヤロポルク [I3] がやって来た²³⁷⁾。一方、〔ウラジーミル・〕アンドレエヴィチ [D181] は、トルチェスク²³⁸⁾ (Торческ) の方面へ、ベレンディ人とトルク人のもとへと行った。

イジャスラフ [C35] は、2月12日²³⁹⁾にキエフに入城した。かれはソフィア教会に入った。そして、捕らえられたすべてのキエフ²⁴⁰⁾人を釈放した。それから、イジャスラフ [C35] は、ベルゴロドへと軍を進めた。

その時、月に恐ろしく奇妙なしるしがあった。月がその形を変えながら、東から西へと天空を横切った。始めは少しずつ小さくなって、完全に消えてしまった²⁴¹⁾。それから、その形は黒い点のようだった。そして再び血のような色になり、それから、あたかも二つの顔を持つようになった。一つの顔は緑色で、別の顔は黄色だった。その真ん中にあたかも二人の戦士がいて、

235) キエフの丘から南に5kmほどの地点。キエフ城市の防衛に当たっていたベレンディ人たちは、ポロヴェツ人の勢いに押されて、北から南へと逃げ出したことになる。

236) 「金門」(Золотыи ворота) は、キエフの城市の南側にある、ヤロスラフ街区に外部から入ることができる門の一つ。ベレンディ人兵はポドリエ地区からポリチェフ坂を通過して、中央部を貫く道路を南下して逃げたことになる。

237) この頃、ヤロスラフ [I2] はルチェスク、ヤロポルク [I3] はブジェスクに座しており、ルチェスク及びブジェスクからベルゴロドへ援軍として駆けつけたのだろう。

238) 「トルチェスク」(Торческ) は、トルチェスキイ (Торчський) ともいい、ロシ川左岸支流のゴロフヴァトカ (Горхуватка) 川河岸に位置する、ベレンディ人やトルク人が居住する城市の名前。キエフから南方へ80kmほど離れている。ウラジーミル [D181] は、ベレンディ人等の勢力圏へと一時的に難を逃れたことになる。

239) 1161年の2月12日に相当する。

240) この記事では、キエフ人たちが誰によって「捕らえられた」(изоимали)のか判然としないが、『ヴォスクレセンスカヤ年代記』の並行記事には、「はかりごとによってロスチスラフが捕らえたキエフ人」(кинянь, ихже бе поималь Ростиславъ въ крамоле), と補足的な文言が記されている。

241) 月が「完全に消えた」ことから、皆既月食と思われるが、この時期に近い皆既月食は1161年8月7日で、記事の時系列とは合わない。実は、イジャスラフ [C35] がキエフに入城したまさにその日、1161年2月12日のキエフ時間午前4時前後に、皆既日食が観測されており、日蝕の記事が、月食と取り違えられたと考えれば、もっとも理解しやすい。(〔日食・月食・星食情報データベース〕参照)。

剣で斬り合っているようだった。一人は頭のところから血が流れているようであり、もう一人は乳が流れているように白かった。老人たちは、これは凶兆であると言った。これまでもあったように、あらゆる〔天の〕しるしは、公の死を予兆する²⁴²⁾というのである。

われらはもとの話に戻ろう。

イジャスラフ [C35] は、ベルゴロドに到来した。そして、内城の周囲を4週間にわたって包囲した²⁴³⁾。【517】ロスチスラフ [D116:J] は、かれ〔イジャスラフ〕が来る前に、外廊の防柵を自ら焼いていた²⁴⁴⁾。

スヴァトスラフ [C43] はチェルニゴフから、イジャスラフ [C35] のもとへ使者を派遣して、かれに和平に合意するよう命じた。「もし、かれら〔ロスチスラフ [D116:J] とその同盟諸公〕が、そなたと和平を結ばなくとも、そなたはドニエプル川を越えて〔対岸へと〕来るがよい、そうすれば、そなたが信義に適っていることになるだろう²⁴⁵⁾」。

ところが、イジャスラフ [C35] は、自分の兄弟のスヴァトスラフ [C43] の言葉に耳を貸さず、かれにこう言った。「わが兄弟たちは戻って来て、自分たちの領地へと帰るだろう。しかし、わしはポロヴェツ人のもとに戻るなどできない。また、ヴィリ (Верь)〔の城市〕に戻って飢えて死ぬことも嫌だ。ここで死んだほうがましだ」。

6670〔1162〕年

ムスチスラフ [I1] は、自分の部隊を率いて、ガーリチの援軍とともに、ヴラジミルを出陣し

242) この日蝕(?)から22日後(次注参照)に起こったイジャスラフ [C35] の死をふまえた言い方であることは疑いない。「太陽のしるし」を公の死の予兆とする解釈は、6621(1113)年のスヴァトボルク [B3] の死の記事にも記されている〔イパーチイ年代記(1):253頁〕。

243) 上注239に見るように、イジャスラフ [C35] は2月12日にキエフに入城しており、以下に見るように(下注263)3月6日にはキエフ郊外で殺害されている。その間は22日しかなく、かりに、すぐにキエフからベルゴロド包囲に出撃したとしても、「4週間」にわたってベルゴロドを包囲することはあり得ない。ここは「3週間」の誤記か。

244) 内城(дѣтинец)に籠城する場合、城壁やその周辺の外郭(острог)は敵に明け渡すことになり、敵が内城を攻撃する場合の拠点(隠れ家など)になる可能性があることから、焼き払ったのである。

245) 「そなたが信義に適う」(твоя правда будет)とは、公族の間で通用している法観念から見て正当であるということで、具体的には、この時点ではロスチスラフ [D116:J] が公族の中で最年長であることから、かれにキエフ公位を譲り、イジャスラフ [C35] は「ヴァティチの地」に引き返すべきということ。

た²⁴⁶⁾。

また、リューリク²⁴⁷⁾ [J2] は、ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181], ヴァシリコ・ユーリエヴィチ²⁴⁸⁾ [D174], ベレンディ人, コウイ人, トルク人, ペチェネグ人とともにトルチェスクを出陣した。かれらは、コテルニツァ²⁴⁹⁾ (Котелница) でムスチスラフ [I1] と合流し、そこから、ムティジル²⁵⁰⁾ (Мутижир) へ、さらにベルゴロドへと向かった。そして、クチャリ²⁵¹⁾ (Кучари) に到達した。かれら〔異族たち〕は、「公よ、〔敵が〕大軍であるかどうかを偵察するために」と言って、黒頭巾族²⁵²⁾ を先遣隊として行かせるよう、ムスチスラフ [I1] に頼み始めた。ムスチスラフ [I1] は、かれら〔黒頭巾族〕を先に行かせた。

〔イジャスラフ [C35] 陣営の〕原野のポロヴェツ人たちは、〔敵の〕軍に遭遇して、イジャスラフ [C35] のもとに急ぎやって来て、かれに大軍がいると告げた。イジャスラフ [C35] は、部隊を見ないまま、〔包囲を解いて〕ベルゴロドから逃げ出した²⁵³⁾。

他方、ロスチスラフ [D116:J] は、ヤロスラフ [I2], **[518]** ヤロポルク [I3] とともに、自分の部隊を率いて、〔ベルゴロドの〕都市を出撃した。そして、自分の兄弟たちの到着²⁵⁴⁾ を待って、全員が合流して、接吻の挨拶をすると、かれら〔イジャスラフ [C35] の軍〕を追って軍を進めた。

246) ムスチスラフ [I1] は、叔父ロスチスラフ [D116:J] の、イジャスラフ [C35] 討伐とキエフ公位回復を支援するために、キエフへ向かったのである。

247) リューリク [J2] は、父ロスチスラフ [D116:J] に同行してキエフにいたが、父がベルゴロドに退去したとき、ウラジーミル [D181] とともにトルチェスクへと逃げたようである。

248) ヴァシリコ [D174] は、1155年に父ユーレイ [D17] がキエフ公になったときに、「ロシ川河岸地域」〔イパーチイ年代記(5):280頁, 注288〕に領地を与えられたが、ユーレイ [D17] が没した(1157年)のちも、この地域のどこかの都市に居住し続けていたと推察することができる。

249) 「コテルニツァ」(Котелница) は、キエフから約120km南西に位置するキエフ領内の城砦。

250) 「ムティジル」(Мутижир) は、イルベニ(Ірпень)川左岸支流ブチャ(Буча)川の左岸に建てられた城砦。キエフの丘から西方向へ43kmほど離れた、現在のキエフ州モティジン(Мотижин)村に相当する。

251) 「クチャリ」(Кучарь) は、イルベニ(Ірпень)川左岸に存在した城砦と考えられるが、詳細は不明。近くに同名の川もある。

252) この「黒頭巾族」とは、ベレンディ人, コウイ人, トルク人, ペチェネグ人等異族たちを包括する集合的な名称で、自分たちを先遣隊として派遣してほしい(おそらく掠奪のため)とムスチスラフ [I1] に頼んだのである。

253) イジャスラフ [C35] は、黒頭巾族の先遣隊を大軍と誤認して、あわててベルゴロドの包囲を解いて逃げたと嘲笑的に叙述されていることから、記事のこの部分はロスチスラフ [D116:J] に好意的な記事が資料になっていると考えられる。

254) 兄弟たちとは、ヴラジミルから援軍に駆けつけたムスチスラフ [I1], トルチェスク方面からの、ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181], ヴァシリコ・ユーリエヴィチ [D174] (さらに、息子のリューリク [J2]) を指している。

トルク人は、ジェラニ²⁵⁵⁾ (Желань) 川でかれら [イジャスラフ [C35] 軍] の [輜重の] 荷車に追い付いた。そして、かれら [トルク人] の部隊は、ブーリチ²⁵⁶⁾ (Булич) 近郊で [敵軍に] 追い付いた。そこで、斬り合いが始まり、捕虜になる者もいた²⁵⁷⁾。その時、シヴァルン²⁵⁸⁾ (Шварн) とミリャティチ (Милятич) の二人、ステペン (Степен) とヤクン²⁵⁹⁾ (Якун), ペレヤスラヴリ人のナジル (Нажир Переяславич) が捕らえられた。

イジャスラフ [C35] は、松林に馬で入り込もうとしたが、湖のところ²⁶⁰⁾ で追い付かれた。ヴォイボル・ゲネチェヴィチ²⁶¹⁾ (Войбор Генечевичь) が、かれ [イジャスラフ [C35]] に追い付き、かれの頭を刀剣で斬りつけた。別の者は太腿を深く槍で突いた。かれは、その場で馬から落ちた。ムスチスラフ [I1] は、息絶え絶えのかれ [イジャスラフ [C35]] を捕らえて、コプイレフ街区にある聖シメオン修道院²⁶²⁾ へと送った。

[こうして]イジャスラフ [C35] は殺された²⁶³⁾。3月6日だった。[かれの遺体は]そこから、チェルニゴフへと送られた。スヴァトスラフ [C43] は、涙を流しながらかれ [イジャスラフ [C35]] の遺体を布で巻くと、かれの父親 [ダヴィド [C3]] の教会である聖殉教者ボリスとグレーブ

-
- 255) 「ジェラニ川」 (Желань) は、キエフから西南方向 12km ほどのところを流れる川。上注 255 参照。
- 256) 「ブーリチ」 (Булич) は、キエフの丘から西南西に 13km ほど離れたジェラニ川沿いの村の名前。現在のキエフの「ピリチ地区」 (Біличі) に相当する。
- 257) 以下に示される捕虜となった者の他の名は、すべて初出で詳細は不明だが、ロスチスラフ [D116:J] の陣営で参戦していた司令官者たちである。これは、ロスチスラフ [D116:J] に好意的な資料を用いていることによっている。
- 258) シヴァルンは、1146 年、1151 年の記事に、イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] に仕えていたキエフの軍司令官として名が出ている。イジャスラフ [D112:I] の死後、キエフ公イジャスラフ [C35] に仕えていた老将だったのだろう。1167 年の記事にもポロヴェツ人の捕虜になったとして登場する。(下注 381)
- 259) ヤクンは、スモレンスクの千人長 (貴族) で、ここでは、リユーリク [J2] に仕えていたのだろう。
- 260) ジェラニ川に形成されていた湖のような広い水域。
- 261) 「ヴォイボル・ゲネチェヴィチ」 (Войбор Генечевичь) は、ムスチスラフ [I1] に仕えていた貴族。
- 262) シメオン修道院は、キエフにおけるスヴァトスラフ [C] の一族の菩提寺のような役割を果たしていた [イパーチイ年代記 (3) : 355 頁, 注 140]。
- 263) イジャスラフ [C35] 殺害については、『ノヴゴロド第一年代記』 6668(1160) の記事の最後に、「この年の冬、ロスチスラフ [D116:J] は、ベルゴロドの近くでイジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] を撃ち破り、かれ自身を殺した。そしてポロヴェツ人の多くが斃れた」と簡潔に記されている。[Новгородская первая летопись: С. 30-31, 218][ノヴゴロド第一年代記 XII: 25 頁]。「この年の冬」は 1160/1161 年の冬のことで、『イパーチイ年代記』の 1161 年 3 月 6 日とほぼ一致する。

教会²⁶⁴⁾に遺体を埋葬した。3月13日で、その日は月曜日だった²⁶⁵⁾。

この年、ノヴゴロド人は、スヴァトスラフ・ロスチスラヴィチ [J4] を、再度、自分たちの公として受け入れた。ユーライ [D17] の孫であるムスチスラフ [D1711] は追放した²⁶⁶⁾。

この年、太陽にしるしがあった。8月17日の木曜日²⁶⁷⁾のことだった。

この年、**[519]** リャザンの公で、スヴァトスラフ [C51] の息子、ヤロスラフ [C5] の孫にあたる、ウラジーミル [C511] が逝去した²⁶⁸⁾。

この年、ベルラドニクと呼ばれた、イワン・ロスチスラヴィチ公 [A1221] がセルニー²⁶⁹⁾ (Селунь) で逝去した。ある者が語るところでは、かれの死は毒殺によるとのことである。

264) チェルニゴフの「ボリスとグレーブ教会」については、12世紀の文献「諸公についての説教」(Слово о князьях)に、イジャスラフ [C35] の父親ダヴィド・スヴァトスラヴィチ公 [C3] の手で建立(1115年頃)されたことが記されている。ダヴィド [C3] 自身もここに埋葬されており、チェルニゴフ諸公の菩提寺のような役割を果たしていた。[БЛДР-4: С.228, 623]

265) 1161年3月13日は月曜日に相当する。

266) このノヴゴロド人による、ムスチスラフ [D1711] の公位からの〈追放〉と、スヴァトスラフ [J4] の再度の公位への受け入れについて、『ノヴゴロド第一年代記』6669(1161)年の記事はやや詳しく書いている。それによれば、ロスチスラフ [D116:J] とアンドレイ [D173] との合意によって、ムスチスラフ [D1711] は廃位され、1161年9月28日に、スヴァトスラフ [J4] は、その「自由な意志によって」再度ノヴゴロドの公座に就いたとなっている。[Новгородская первая летопись: С. 31, 218][ノヴゴロド第一年代記 XII: 25頁]

267) 1161年の8月17日は確かに木曜日に相当し、この日のことと思われるが、[日食・月食・星食情報データベース]によれば、この日やその前後に日蝕は観測されていない。何らかの気象現象だった可能性が高い。また、翌年1162年1月17日(水曜日)に起こった日蝕の誤記である可能性もある。[Літопис руський, 1989: С. 283, прим. 2]

268) ウラジーミル [C511] は、1146年秋ごろに叔父のロスチスラフ [C54] の支配から逃げ出してスヴァトスラフ [C43] の庇護下に入り、その後はかれと行動を共にしていた([イバーチイ年代記(2):347頁, 注358])。当時のリャザンの支配公は、ロスチスラフ [C54] の息子グレーブ [C542:H] であり、このウラジーミルを「リャザンの公」としているのは、スヴァトスラフ [C43] に仕える年代記記者の視点かもしれない。

269) 「セルニー」(Селунь) は、Солуньとも標記され、現在のギリシアの第二の都市テサロニキのこと。この記事によって、イワン・ロスチスラヴィチ(ベルラドニク) [A1221] は、1160年初頭頃までは、イジャスラフ [C35] の庇護を受け、行動をともにしていたが、その後、イジャスラフ [C35] から離れて、おそらくガーリチ公ヤロスラフ [A1211] から逃れて、ビザンティンで亡命生活を送っていたことが分かる。「毒殺」についても当然ヤロスラフ [A1211] の関与が疑われる。

この年²⁷⁰⁾、ログヴォロド [L11] がポロツク人を率いて、ヴォロダリ [L53] を討つべく、ゴロデツ²⁷¹⁾ (Городец) へと来襲した。ヴォロダリ [L53] は、昼の間は、かれに対抗するために〔城内から〕部隊を出さなかったが、夜になると、リトアニア人を率いて、城を出て、かれ〔ログヴォロド〕に対抗した。その夜は、多くの悪行がなされた。ある者は〔ヴォロダリ [L53] の部隊によって〕撃ち殺され、別の者は生け捕りにされて捕虜となった。捕まった者のほうが、殺された者よりも多かった²⁷²⁾。

ログヴォロド [L11] は、スルチェスク²⁷³⁾ (Случьск) へと逃げ、そこで3日間滞在した。それから、ドルツク (Дрыютск) へ向かった²⁷⁴⁾ が、ポロツクまでは行こうとはしなかった。なぜなら、多くのポロツク人が殺されたからである。

ポロツク人は、ポロツクの〔公として〕〔フセスラフ・〕ヴァシリコヴィチ²⁷⁵⁾ [L221] を据えた。

この年、ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] がキエフを出発した。かれは、自分の〔父方の〕叔父ロスチスラフ [D116:J] に対して怒りを発したのである。かれらの間で多くの言葉（諍

270) 1161 年のこと。

271) 「ゴロデツ」 (Городец) もしくは「ゴロドク」 (Городок) の名を持つ城市は幾つもあるが、ここでは、ベレジナ川 (Бережина) 上流左岸にあったとされる、ミンスクの附属城砦のこと。リトアニア人の居住地に近い。ヴォロダリ [L53] は、ログヴォロド [L11] がポロツクで支配を確立したあとは、ミンスクとその周辺を所領としていた。ここでは、力を付けたログヴォロド [L11] が、潜在的な敵であるヴォロダリ [L53] の掃討を計画したのである。

272) この記事に関連して、『イーゴリ軍記』に触れられているグロドノ公イジャスラフ・ヴァシリコヴィチ [L223] のリトアニア人の長剣による死は、1162 年のこの戦いで、イジャスラフ [L223] がログヴォロド [L11] 軍に援軍として参戦したが、リトアニア人に打たれて戦死したという説がある。[木村 1971: 53 頁]

273) この時、ウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] が、このスルチェスクの城市の支配公だった。(下注 302 参照)

274) 1159 年に、ドルツクの人々は自身の公であったロスチスラフ [L52] の息子グレーブ [L521] を追放し、ログヴォロド [L11] を自分たちの公として迎えている。このときから情勢が変動していなければ、ドルツクは、ログヴォロド [L11] にとって退避地として適していたはずである。

275) 年代記記事では、「ヴァシリコヴィチ」としか記されていないが、ここは、ヴァシリコ [L22] の息子フセスラフ [L221] を指している。ヴァシリコの他の 2 人の息子（ヴォロドシャ [L224] とブリャチスラフ [L222]）は、ロスチスラフ [L52] とその兄弟によって捕らえられており、ログヴォロド [L11] が、かれらを救出したという経緯があった。その兄弟であるフセスラフ [L221] も、ログヴォロド [L11] とは比較的良好な関係にあったことが推察できる。

い) が交わされた²⁷⁶⁾。

ダヴィド [J3] は、父〔ロスチスラフ [D116:J]〕の命令なしに、トルチェスク (Торцьскыи) へと進軍した。かれ〔ダヴィド [J3]〕は、ムスチスラフ [I1] の代官ヴィシェク (Вышек) を捕らえて²⁷⁷⁾、キエフへ²⁷⁸⁾と連行して行った。ロスチスラフ [D116:J] は、自分の息子ムスチスラフ [J5] を、ベルゴロドへと派遣した²⁷⁹⁾。

その時、ムスチスラフ [I1] は、ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] を討つべく、ヴラジミルを出陣して、ペレソプニツァへと軍を進めていた²⁸⁰⁾。到着すると、ヴォブーチ²⁸¹⁾ (Въбучи) で陣を張った。そして、【520】ウラジーミル [D181] に使者を遣って、ロスチスラフ [D116:J] から手を引くように求めて、交渉を始めた。ウラジーミル [D181] は、ロスチスラフ [D116:J] への〔忠誠の〕十字架接吻に違反することはなく²⁸²⁾、全霊をもって、あらゆることに

276) この二人の間の争いと決裂の理由は書かれていないが、「かれらの間で多くの言葉が交わされた」(много рѣчи вѣста межи ими)の表現は、1159年4月頃にロスチスラフ [D116:J] とムスチスラフ [I1] が府主教の選出を巡って言い争った記事の表現「論争は続き、かれらの間で激しく繰り返された」(рѣчи продолжившиися и пребывши крѣпцѣ межи ими) (上注 117) と似ていることから、ここでも、府主教を巡る対立が起こったことが推定できる。

277) ムスチスラフ [I1] は、キエフ公ロスチスラフ [D116:J] と争いを起こして、キエフから根拠地のヴラジミル (ヴォルィニ地方の) へと退去するときに、ペレンディ人支配の拠点の一つであるトルチェスク城砦に、自分の代官 (посадник) ヴィシェクを残留させた。これは、トルチェスクがムスチスラフ [I1] の所領だったことによる。ロスチスラフ [D116:J] にとっては、この城砦にムスチスラフの代官がいることは、キエフの領国支配の安定のためには不都合だったに違いない。ただし、おもてだつてのムスチスラフとの対立を避けるために、息子を自分の「命令なしに」トルチェスクに行かせて、代官を捕らえさせたのではないか。

278) 「キエフへ」(ко Киеву)の語句はイパーチイ写本にはなく、フレーブニコフ写本の読みを採用した。

279) ベルゴロドも、トルチェスクと同様にムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] の所領 (волость) だったことから、ロスチスラフ [D116:J] は息子を代官として派遣して、ムスチスラフ [I1] の影響力の排除を策したのである。

280) 1157年、ユーレイ [D17] は、弟アンドレイ [D18] の領地であったヴラジミル (・ヴォルィンスキイ) をムスチスラフ [I1] から奪還してウラジーミル [D181] に与えようとしたが失敗し、代わりに、ゴルイナ川流域のペレソプニツァをはじめとする諸城市をウラジーミル [D181] に与えている ([イパーチイ年代記 (5): 297頁, 注 391])。

ウラジーミル [D181] は、盟友ロスチスラフ [D116:J] のキエフ就位が安定した後、自領地のペレソプニツァに引き返した。そこへ、ロスチスラフ [D116:J] との対立が先鋭化したヴラジミル公ムスチスラフ [I1] が遠征を仕掛けたのである。

281) ヴォブーチ (Въбучи) は、ゴルイナ川支流プチヴィルカ川流域にあった城砦。現在のウクライナ、リヴノ州ポスニクウ村 (Посників) 近郊に相当する。ペレソプニツァ (現在の都市リヴネ) からだと西に約 37km 離れている。

282) 1159年にムスチスラフ [I1]、ウラジーミル [D181]、ヤロスラフ [A1211] が、ロスチスラフ [D116:J] をキエフ大公位に就けるために後者を招聘したが、このときに十字架接吻がなされている (上注 109)。このときのものを指しているか。

ついでロスチスラフ [D116:J] の味方だった。ムスチスラフ [I1] は、ヴラジミルへと引き返した。

この年、オレーグ一族〔の諸公〕が、ロスチスラフ [D116:J] に対して〔忠誠の〕十字架接吻〔の誓い〕を行った。それは、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] と二人のフセヴォロドヴィチ〔スヴァトスラフ [C411:G] とヤロスラフ [C412]〕である。

この年、アンドレイ [D173] は、主教レオン (Леон) をスーズダリから追い出した²⁸³⁾。

また〔アンドレイ [D173] は〕、自分の兄弟であるムスチスラフ [D17] とヴァシリコ [D174]²⁸⁴⁾、ロスチスラフ [D171] の息子で、自分の甥にあたる二人²⁸⁵⁾、さらに自分の父の重臣たちを追放した²⁸⁶⁾。これは、かれ〔アンドレイ〕が、スーズダリの地のすべてについて、専政の支配を望んだからであった。

主教レオンはその罪を悔い改めて、ロストフへ戻って来たのだが²⁸⁷⁾、スーズダリに座を与えられることはなかった。

かれ〔アンドレイ〕は、レオンが4ヶ月間主教の座に就いていたとき²⁸⁸⁾、復活祭の日から諸

283) このレオン追放の経緯については以下に詳しく説明されている。下注 287, 288, 293 を参照。

284) 16世紀の『ニコン年代記』では、6668(1160)年の項に、この兄弟追放は、アンドレイ [D173] の悪しき郎党 (злые домашние) がかれに讒言したことから起こったとしている。さらに、追放された兄弟の中にミハイル・ユーリエヴィチ [D175] の名も加えられている [ПСРЛ Т.9, 2000: С. 221]。

285) これは、アンドレイ [D173] の長兄で、1151年に没したペレヤスラヴリ公ロスチスラフ [D171] の二人の息子、ムスチスラフ [D1711] とヤロ波尔ク [D1712] を指している。兄の死後、アンドレイ [D173] は、この二人をスーズダリに引き取っていたのだろう。

286) 下注 305にあるように、追放先はコンスタンティノポリスであり、加えて、ユーレイ [D17] の未亡人と末弟フセヴォロド [D177] も同時に追放されている。アンドレイ [D173] は、継母 (と想定される) とその息子たち、孫たち、かれらを支持する父ユーレイ [D17] の旧臣たちを、国外追放というかたちで一気に排除して、スーズダリの地の一元的な支配を狙ったと考えられる。

287) レオンは、1158年にロストフの主教に任じられたが ([イパーチイ年代記(5): 303頁, 注417])、翌1159年にロストフ人、スーズダリ人の手で追放されている (上注9参照)。その後、「罪を悔い改めて」再度スーズダリの地に戻り (възврати опять), 4ヶ月間主教の座に就いていたが、その間に精進日の肉食の問題でアンドレイ大公と対立し、再び追放されたことになる。

この「戻って来た」時については、本年代記の年紀では1162年だが、『ラヴレンチイ年代記』では、6672(1164)年の記事に記されている。しかし、レオンは府主教フェオドール (1163年6月没) とキエフで論争していることから (下注292, 294参照) 見て、1162年と考えるのが妥当ではないか。

288) 前注のように1162年にレオンがスーズダリの地に戻ってきたとするなら、この「4ヶ月間主教の座に就いていた」期間は、以下に見るように、具体的に争点となった、復活祭 (1162年4月8日) と諸聖人の日 (1162年6月3日) を含む4ヶ月の間ということになる。

聖人の日までの期間²⁸⁹⁾、水曜日と金曜日にも²⁹⁰⁾肉食ができるよう、かれ〔主教レオン〕に頼んでいた。主教は、かれ〔アンドレイ〕に対して、光明週間²⁹¹⁾にのみ、水曜日と金曜日にも肉食ができるが、その他の期間は正しく〔精進を〕守るよう命じた²⁹²⁾。かれ〔アンドレイ〕は、この非難に対して、かれ〔レオン〕を自分の土地から追放した²⁹³⁾。

〔レオンは〕チェルニゴフのスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] のところにやって来た。スヴァトスラフ [C43] は、かれ〔レオン〕を丁重に慰めると、キエフのロスチスラフ [D116:J]

289) 「復活祭」(въскресение Христова) も「諸聖人の日」(всех святыхъ) も移動祭日だが、その間の 57 日間は、1 年の周期から見ると、復活祭から続く〈祝祭期間〉に相当する。なお、諸聖人の日の翌日が「ペテロの斎」(Петров пост) の初日で、ここから 1 年の〈精進期間〉が始まる。

290) 一週間の周期の中で、水曜日と金曜日が精進日であることについては、キエフ洞窟修道院のフェオドーシイがイジャスラフ・ヤロスラヴィチ公 [B] に宛てた書簡の中で、「すべてのキリスト教徒は、水曜日と金曜日に精進すること。俗人は肉を断ち、聖職者は乳製品をも断つこと。なぜなら、水曜にはユダヤ人たちがキリストに対してはかりごとをなし、金曜には無法の者たちが主を磔刑に処したからである」と説明している。同時に「(主、聖母、十二使徒の祭日が) 水曜日や金曜日のときには、聴罪司祭から肉食の許可を得ること (… そのときには肉を食してもよい) とあるように ([Понырко 1992: C. 15-16][БЛДР T.1: C. 446-448]), 11 ~ 12 世紀のルーシでは、キリストや聖母にかかわる祭日や主要な祭日が水曜日、金曜日に当たる場合には、例外的に肉食が許されていたようである (「慣習主義」)。このことは、『キリク問答集』(Вопрошение Кирика) を初めとするこの時代の他の教義的文献にも言及されている。ビザンティン教会 (総主教庁) でも、「主の降誕祭」「神現祭」が水曜日、金曜日の場合に限り肉食を容認していた (「容認主義」) [Понырко 1992: C. 18]。しかし、キエフ府主教コンスタンチン〔二世〕(在任 1167 年 ~ 1170 年頃) は、水曜日、金曜日の肉食は「光明週間」以外は禁止して (原則主義) おり、そこに対立が生じていた。

291) 「光明週間」(неделя порозная) は、復活祭から一週間の期間のこと。レオンは、祝祭 (肉食) はこの期間に限るとして、「主の降誕祭」や「神現祭」でも肉食を禁じていることから、精進に対してとりわけ厳格 (原則主義) な姿勢を示したことになる。

292) 精進日についてのアンドレイ [D173] と主教レオンとの論争については、『ラヴレンチイ年代記』6672(1164) 年の記事でも触れられているが、そこでは、やや異なった事例と経緯が示されている。すなわち、「主の〔キリストにかかわる〕祭日が水曜日と金曜日である場合、それが主の降誕祭であれ、神現祭であれ、肉を食べてはならない」と原則主義的な立場をレオンが説き始め、アンドレイ公及び在地の聖職者との間で論争が起こった。〔そして、レオンはアンドレイに追放される〕府主教フェオドールとも論争し ([Поппэ 1996: C. 457] 参照)、レオンは論破された。結局レオンは、諸都市からの使者 (聖職者) とともに裁定を求めてコンスタンティノポリスへ向かった。その途上、皇帝マヌイル一世の前で、容認主義的なブルガリア主教アンドリアンと論争したが、レオンは論破された ([ПСРЛ T. 1, 1997: Стб. 351-352][スズダリ年代記訳注 [IV]: 13 頁]) とされている。いずれにせよ、精進 (肉断ち) に対するレオンの厳格な姿勢 (原則主義) が、アンドレイ公 [D173] をはじめとするロシア人から強い反発を受けたことは確かである。『ラヴレンチイ年代記』はこれを「レオンの異端」(ересь Леонтианская) と呼んで強く非難している。これについては、[岡本 2010: 121-130 頁] も参照。

293) この追放は、上注 283 の追放を指している。

のもとへと行かせた²⁹⁴⁾。

この年、ロスチスラフ [D116:J] は、ユーリイ・ヤロスラヴィチ [B321] と和を結んだ²⁹⁵⁾。

この年、**[521]** 多くのポロヴェツ人がユーリエフへ来襲し、ルート川 (Рот) 流域²⁹⁶⁾ の多くの幕舎を掠奪し、イジャスラフ [C35] 殺害の手下人であるヴォイボル²⁹⁷⁾ (Въибора) を殺した。

黒頭巾族は総勢が集結して、かれら〔ポロヴェツ人〕を追って出発し、ロシ川でかれらに追い付いた²⁹⁸⁾。かれらの多数を撃ち倒し、かれらの捕虜になっていたすべての者を取り戻した。自分たちの中から、500人以上が捕虜に獲られていた。サトマズ (Сатмаз) 侯の二人の息子²⁹⁹⁾ や他の侯の息子たちが捕虜になっていた。

この年、リューリク [J2] とトゥーロフ公スヴァトボルク・ユーリエヴィチ³⁰⁰⁾ [B3213], スヴァ

294) スーズダリを追放された主教レオンは、アンドレイ [D173] の政敵にあたるチェルニゴフ公スヴァトスラフ [C43] 及びキエフ公ロスチスラフ [D116:J] に庇護を求め、受け入れられたのである。『ラヴレンチイ年代記』にある府主教フェオドールとレオンの論争は、レオンがキエフに滞在していたとき (1162 年末 ~ 1163 年初め) に行われたものであろう (上注 292 参照)。その後レオンは、裁定を求めてコンスタンティノポリスへ向かった。

295) ユーリイ [B321] はトゥーロフ公。1159/1160 年冬に、ムスチスラフ [I1] 等の同盟諸公が、トゥーロフ攻略を試みたが、2 週間半の包囲ののちに撤退しており (上注 184 参照)、ユーリイ [B321] によってムスチスラフ [I1] は潜在的な敵であった。他方、キエフ公ロスチスラフ [D116:J] も、この時点 (1162 年頃) ではムスチスラフ [I1] と対立状態にあった (上注 276 参照)。このように、ロスチスラフ [D116:J] とユーリイ [B321] との和議は、ムスチスラフ [I1] に対抗する戦略としては、双方にとって利益があった。

296) ルート川 (Рот; Рут) は、ロシ川の左岸 (北側) 支流で、現在のプロトカ (Протока) 川に相当する。その沿岸地帯はキエフ公に仕えるチュルク系の諸族 (黒頭巾族) の居住地だった。

297) ヴォイボルがイジャスラフ公 [C35] を殺害した経緯については上注 261 を参照。ヴォイボルはヤロスラフ [I1] の代官として、ロシ川流域のヤロスラフが所領としていた城市 (例えばトルチェスク) に据えられていたと考えられる。

298) 黒頭巾族はルート川を下るかたちで南下し、城市ユーリエフのあたりで、ポロヴェツ人に追い付いたのである。

299) キエフの年代記記者の視点から書かれていることから、この「自分たち」はキエフ公に仕えるベレンディ人たちを指している。

1159 年の記事に、代々キエフ公に仕え、当時のキエフ公イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] に勤務していたベレンディ人の首領の一人として「トゥドル・サトマズヴィチ」(Тудор Сатмазовичь) の名が言及されている (上注 90 参照)。ここの「サトマズ侯の二人の息子」(два княжича Сатмазовича) の一人は、この「トゥドル」であることは間違いないだろう。

300) スヴァトボルク・ユーリエヴィチ [B3213] は、父のユーリイ [B321] とともにトゥーロフの公位に就いていた。(上注 295 参照)

トスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] とその兄弟のヤロスラフ [C412], オレーグ・スヴァトスラヴィチ [C431], [スヴァトスラフ・] ウラジーミロヴィチ [C341], クリヴィチの諸公³⁰¹⁾ が, ウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] を討伐すべく, スルチェスク³⁰²⁾ へと〔遠征に〕向かった³⁰³⁾。

ウラジーミル [D115] は, かれらの軍勢を見て, かれらとの和議に同意した。そして, スルチェスクをかれらに譲り渡し, 自分はキエフの自分の兄弟ロスチスラフ [D116:J] のもとへと向かった。ロスチスラフ [D116:J] は, かれ〔ウラジーミル [D115]〕にトレポリ (Трьполь) と, その他トレポリに付属する4つの城市³⁰⁴⁾ を与えた。

この年, ユーリイ [D17] の二人の息子, ムスチスラフ [D17j] とヴァシリコ [D174] が, 母親とともに帝都へ行った³⁰⁵⁾。三人目の兄弟にあたる, 年少のフセヴォロド [D177:K] も連れて行った。皇帝³⁰⁶⁾ はヴァシリコ [D174] に, ドナウ川沿岸の4つの城市を与え³⁰⁷⁾, ムスチスラフ [D17j]

301) ポロツク地方の諸公を指している。

302) スルチェスク (Случьск) については, 上注 14 を参照。

303) ウラジーミル [D115] は, 1157年5月に盟友イジャスラフ [C35] がキエフ公になってから, スルチェスクを所領として受けたと考えられる。かねてトゥーロフの領有を狙ったが叶わなかったかれにとって ([イパーチイ年代記(5):304頁, 注424] 参照), トゥーロフに近く, 状況が許せばいつでもこの城市への攻撃が可能なこのスルチェスクは, 格好の領地だったのであろう。

これに対して, おそらくトゥーロフ公スヴァトボルク [B2313] が危機を未然に防ぐために申し立てて, 遠征が実現したものだろう。遠征軍の連合諸公の筆頭にリューリク [J2] の名があることから見て, この遠征はキエフ公ロスチスラフ [D116:J] が, 息子のリューリク [J2] に命じて組織したものであることが推定できる。

304) 詳細は不明だが, トルチェスクに近い, スヴェニゴロドやベルゴロドを指すのではないか。トルチェスクを含め, これらの諸城市は, ムスチスラフ [I1] 等がキエフを攻略したとき (1158年12月22日) に, キエフ地方における所領としてムスチスラフ [I1] が保持していたが, その後, ロスチスラフ [D116:J] との対立が表面化して, キエフを退去してヴラジミルに帰国したとき (1161年) に, ロスチスラフの手で没収された城市である。

305) 上注 286 の記述に加えて, ムスチスラフ [D17j] とヴァシリコ [D174] とともに, かれらの母 (ユーリイ [D17] の未亡人) と末弟フセヴォロド [D177:K] も追放されたことが分かる。この未亡人はカラムジン [Карамзин 1998: С. 372, прим. 405] 以来, この個所を根拠にギリシア女と推定されることが多いが, もしそうであれば, 何らかの出身地の言及があるはずであり, その可能性は低い。[Raffensperger 2016: p. 94]

306) この「皇帝」(царь) は, ビザンティン帝マヌイル一世コムネノス (在位 1143-1180年) のこと。

307) このヴァシリコ [D174] に与えられた領地については, ビザンティン歴史家イオアンネス・キンナモス (Ἰωάννης Κίνναμος) の歴史書の 1165年の項に記述がある。それによれば, 「かつて皇帝がゲオルギオスの子ヴァシリクに与えたイストルの土地で, このヴァシリクはタウロスキフ〔ロシア〕の一族の長であった」[Древняя Русь-Хрестоматия Т. 2: С. 270, прим. 6] としている。注によれば, このイストル (Истр) は, ドナウ川河口付近を指すと推定されている。

にはオトスカラン (Отъскалан) の領地を与えた³⁰⁸⁾。

6671 [1163] 年

ロスチスラフ [D116:J] は、ムスチスラフ [I1] と和を結び、ムスチスラフ [I1] にトルチェスク (Торьский) やベルゴロドなどすべての城市を返還した³⁰⁹⁾。また〔ロスチスラフ [D116:J] は〕トレポリの代わりに³¹⁰⁾、かれ〔ムスチスラフ [I1]〕にカーネフ³¹¹⁾を与えた。

この年、ロスチスラフ [D116:J] は、【522】ポロヴェツの侯ベルークの娘³¹²⁾ (Белуковна) をポロヴェツ人のところから連れてきて、自分の息子リューリク [J2] に娶せた。

この年、〔ロスチスラフ [D116:J] は〕ポロヴェツ人と和を結んだ。

その頃、府主教フェオドール (Федор) が逝去した。かれは、10ヶ月間府主教の座に就いていた³¹³⁾。

308) 「オトスカラン」 (Отъскалан) は、パレスチナの都市名アスカロン (Ascalon) (エルサレムから西へ 60km ほど離れた海岸沿いの都市アシュケロンに相当) のこと。「ドナウ川沿岸の4つの城市」もそうだが、ビザンティン帝国の周縁地域に相当する。

309) トルチェスク、ベルゴロド、トレポリは、ムスチスラフ [I1] が自らの遠征でキエフを攻略したとき (1158 年 12 月) に、キエフ地方における自らの領地として確保していた。1161 年にキエフを退去したときロスチスラフ [D116:J] によって没収されたが、今回の和解によって、トレポリを除く旧領を回復したのである (上注 304 も参照)。

310) ロスチスラフ [D116:J] は、本来ムスチスラフ [I1] の所領だったトレポリを、すでにウラジーミル [D115] に与えていたため、和議に際して、代替の領地としてカーネフを引き渡したのである (上注 304, 309 を参照)。

311) カーネフ (Канев) は、キエフ南東約 90km のドニエプル川右岸の城市。上注 311 参照。

312) 「ベルーク」 (Белук Бурнович) は、Белюк とも表記され、ペレヤスラヴリ地方に隣接するドン川河畔ポロヴェツ人連合の首長の名前。のちの首長グザク (Гзак) の父親でもある。

313) 先の記事にあるように (上注 226)、府主教フェオドールが 1160 年 8 月にキエフに赴任し、10ヶ月間府主教を務めた後に没したとすれば、死去した時は 1161 年 6 月ということになり、これは、6671(1163)年の項の記事としては、時間的な差が大きすぎる。ポッペは、年代記の年紀にしたがって、フョードルの死を 1163 年 6 月としており ([Поппэ 1996: С. 457-458])、その場合、在位は 2 年 10 ヶ月となる。年代記編集の過程で「2 年」の語が脱落したものか。

この年、ポーランド人がチェルヴェン³¹⁴⁾ (Чьрвьн) の周辺で掠奪を行った。

6672 [1164] 年

府主教イオアン (Иван) がルーシにやって来た³¹⁵⁾。ロスチスラフ [D116:J] は、かれを受け入れようとしなかった。なぜなら、かれ〔ロスチスラフ [D116:J]〕は、クリメントを府主教〔として叙任させ〕ようと³¹⁶⁾、ギュリャタ・セムコヴィチ³¹⁷⁾ (Гюрята Семкович) を使者として〔ビザンティンの〕教会へ派遣していたのだが、ギュリャタは、オレシエ³¹⁸⁾ (Олешье) から府主教と皇帝の使節を連れて戻って来たからである³¹⁹⁾。

皇帝は多くの贈物を使節に持たせてロスチスラフ [D116:J] のもとに派遣した³²⁰⁾。それは、ピロード生地や絹布、様々な色に刺繍した生地だった。皇帝の使節は、ロスチスラフ [D116:J] にこう言った。「皇帝はあなたにこう言っています『もし、あなたが親愛をもって聖なるソフィ

314) 「チェルヴェン」(Червен) は、ヴラジミルから南西へ約 49km 離れたポーランド国境周辺の城市。1157 年のユーリイ手長公 [D17] によるガーリチ遠征のとき、配下のウラジーミル [D118] が、チェルヴェンを攻略し、掠奪している ([イパーチイ年代記 (5): 296 頁, 注 387])。その後この城市は、ウラジーミル [D118] の所領となって、かれの代官が派遣されていた可能性が高い。そのために、ポーランド人 (ляхове) による城市掠奪の報告が、キエフの年代記記者のもとに届いたのだろう。

315) 1164 年の春～夏に着任したと考えられる。[Поппэ 1996: С. 458-459]

316) ロスチスラフ [D116:J] は、前年にムスチスラフ [I1] と和解した際に (上注 309 参照)、父イジャスラフ [D112:I] が任命したクリメントを推すムスチスラフ [I1] の意見を容れて、クリメント・スモリャティチを再び府主教とすることに同意したとみられる。

317) 「ギュリャタ・セムコヴィチ」(Гюрята Семкович) については他に言及がないが、ロスチスラフ [D116:J] 側近の貴族だろう。

318) 「オレシエ」(Олешье) は、ドニエプル川河口の州に建てられた城砦。当時はキエフ公の支配下にあった。上注 137 を参照。

319) 情況としては、ギュリャタの使節団がキエフから派遣された時とほぼ同時に、コンスタンティノポリスからも、府主教イオアンをともなった皇帝 (マヌイル一世コムネノス) の使節が派遣され、両者はドニエプル川河口のオレシエで偶然出遭うことになったと考えられる [Поппэ 1996: С. 458-459]。ギュリャタの使節団が、いったんコンスタンティノポリスに到着して、その後、イオアンと皇帝の使節を同行して帰国したという説もあるが (カラムジン, ゴルピンスキイ), その場合、わざわざ「オレシエ」の地名に言及する理由が説明できない。

320) このマヌイル一世がキエフに派遣した使節団については、上注 307 と同様にイオアンネス・キンナモス (Ἰωάννης Κίνναμος) の歴史書に 1165 年の項に記述がある。これによれば、マヌイル一世は、イオアンの府主教就任をロスチスラフ [D116:J] に認めさせただけでなく、帝国の対ハンガリー政策のためのルーシの軍事支援の約束を取り付けたとしている。[Древняя Русь-Хрестоматия Т. 2: С. 267-268]

アからの祝福を受け入れるならば (…)³²¹⁾』

(…) 従士団は、オレーグ [C431] に答えて言った³²²⁾。「公よ、ぐずぐずせずに速やかに行かれよ。〔スヴァトスラフ・〕フセヴォロドヴィチ [C411:G] は、あなたの父上 (スヴァトスラフ [C43]) とともに、そなたともうまくやってきいくことができなかつたではありませんか。〔スヴァトスラフ [C411:G] は〕 なにか、悪しきはかりごとをすることでしょう」。そこで、オレーグ [C431] は、速やかにチェルニゴフへ行ったが、生きて父親に会うことはできなかった。

オレーグ [C431] が到着する3日前に、かれ〔スヴァトスラフ [C43]〕は死んでいたが³²³⁾、その死は秘密にされていた。これをなしたのは、公妃だった。かの女は主教³²⁴⁾や公の側近の家臣たちと評議して、聖なる救世主〔の聖像〕に接吻して、ノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕にいる〔スヴァトスラフ・〕フセヴォロドヴィチ [C411:G] のもとに使者を派遣しないことを〔誓った〕。最初に接吻したのは、聖救世主教会の主教³²⁵⁾だった。その後に、従士たちが接吻〔して誓った〕。

千人長の【523】ユーリイ³²⁶⁾ (Гюрги) はこう言った。「われわれは、主教に聖なる救世主〔の聖像〕に接吻させ〔誓わせる〕のはよろしくないだろう。なぜなら、かれは高位聖職者なのだ

321) 『イパーチイ年代記』のすべての写本について、テキストがこの個所で断絶している。なお、タティエーシチェフの歴史書には、この部分の続きとして「今後は、もし総主教が教会法に違反して、自分たちに無断でルーシの府主教を任ずるようなことがあれば、その府主教を受け入れないだけでなく、主教の叙任は大公の手で行うという条件をのませた。その上で、府主教イオアンを受け入れ、使節団を帰国させた」[Татищев Т. III, 1995 С. 79-81] という内容が記述があるが、これは、タティエーシチェフの想像による補筆であろう。[Толочко А. 2005: С. 215 прим. 46]

322) 文脈から判断して、この断片は、プチヴリ (もしくはクルスク) にいたオレーグ [C431] のもとに父スヴァトスラフ [C43] 危篤の知らせが届いたが、チェルニゴフへの出発を渋っているオレーグ公 [C431] に対して、かれの従士団が諫めている場面から始まっている。

323) スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] の死は、下注 332 にあるように 1164 年 2 月 15 日のことである。

324) 次注 325 参照。

325) イパーチイ写本では、写本の右欄外余白に「アントン」(Антонъ) の語が別人の筆跡で書き込まれており、フレーブニコフ (ボゴージン) 写本でも本文中に Антонъ の名がある。これは後代の挿入である可能性が高い。ちなみに、当時のチェルニゴフ主教はアントニイ (Антоний)(Антон はその俗称)であり、1159 年のコンスタンチン府主教の死の物語でも、その名が言及されている。上注 120 参照。

326) 6667(1159) 年の記事に、スヴァトスラフ [C43] に仕えるユーリイ (ゲオルギイ)・イヴァノヴィチという人物が言及されているが、この千人長と同一人物だろう (上注 72 参照)。

から³²⁷⁾。この〔主教が約束を守る〕ことについて、われわれには疑問の余地はない。なぜなら、かれ〔主教〕は、自分の公たち〔チェルニゴフ諸公〕に親愛を抱いてきたのだから。

すると、主教が言った。「わたしは、そなたたちの前で身の証をたてよう。わたしは、神と〔神を〕生んだ御方〔聖母〕に〔誓う〕。わたしが、いかなる手段によっても、〔スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] のもとに人を遣らないことを。裏切りの密告を行わないことを。さらに、息子たちよ、そなたたちに明言する。そなたたちが魂を滅ぼさないように、ユダのような裏切者にならないように〕」。

見よ、こうして、〔主教アントニイは〕かれら〔従士たち〕に明言したが、内心は欺瞞を隠していた。かれはギリシア出身だったのだから。

見よ、こうして、〔主教は〕聖なる救世主〔の聖像〕に最初に接吻したのだった。それから、悪しき〔誓約〕違反をなし、文書を記し、それを使者に持たせて〔スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] のもとに派遣して、こう言わせた。「あなたの叔父〔スヴァトスラフ [C43]〕が亡くなりました。また、オレーグ [C431] を呼び寄せる使者が派遣されました。従士たちは〔チェルニゴフから〕遠い諸城市にいます。公妃は気が動転して子供たちとともに³²⁸⁾ います。かの女のもとには多くの物資があります。速やかに駆けつけよ。オレーグ [C431] はまだ入城していません。ご自身のお望みのままに、かれ〔オレーグ [C431]〕と約定を結ぶことができるでしょう」。

スヴァトスラフ [C411:G] は、文書を読むとすぐ、自分の息子³²⁹⁾ をゴミイ (Гомии) へ遣り³³⁰⁾、諸城市へは代官たちを派遣した。そして、自分はチェルニゴフへ行こうとした。〔しかし、スヴァトスラフ [C411:G] は〕オレーグ [C431] がすでにチェルニゴフにいることを聞いた。

二人〔スヴァトスラフ [C411:G] とオレーグ [C431]〕は、領地について合意するために、互

327) この発言は、新約聖書（『マタイ伝』5:33-37）の「誓ってはならない」という章句に基づく「誓約禁止」（запрещение клятвы）規定にかかわるもので、世俗の諸公の間で行われてきた「十字架接吻」の形を取った誓約については教会は看過しても、聖職者自身が「誓い」にあたる行いをするのは厳しく禁止されていたことが背景にある〔Стефанович 2004: С. 98-99〕。

328) この「子供たち」は、年少のイーゴリ [C432]（当時およそ 12 歳）とその弟フセヴォロド [C433] を指している。

329) これまでの年代記記事に、スヴァトスラフ [C411:G] の息子についての言及はない、後の記事では、まず年長者であるウラジーミル [G2] が言及されることから、かれである可能性が高い。

330) スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] が、チェルニゴフ公領の北西辺の城市ゴミイへ息子を派遣し、「諸城市への」（по городом）へは代官を派遣したのは、チェルニゴフ公領の城市の中で、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] 一族の支配が及んでいない地点を自らの領地として早めに確保する意図によるものだろう。

いに使者を交換しを始めた。オレーグ [C431] は譲歩して、話をまとめるために、スヴァトスラフ [C411:G] にチェルニゴフを譲り、自分はノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕を取った。

そして、オレーグ [C431] は、イワン・ラディ斯拉ヴィチ³³¹⁾ (Радьставич) に十字架を持たせて〔スヴァトスラフ [C411:G] のもとに〕派遣した。スヴァトスラフ [C411:G] は、オレーグ [C431] に対して、〔約束を〕守ることを、十字架接吻〔で誓った〕。

しかし、かれ〔スヴァトスラフ [C411:G]〕は〔約束を〕守らなかった。〔スヴァトスラフ・〕フセヴォロドヴィチ [C411:G] は、十字架 **【524】** 接吻〔の誓約〕の際に「そなたの弟たち、イーゴリ [C432] とフセヴォロド [C433] に〔領地を〕分与するつもりだ」と言ったにもかかわらず、二人への〔約束を〕守らなかったのだった。

スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] が逝去したのは、2月15日³³²⁾ のことだった。17日の月曜日に遺体は棺に納められた。

この年、ガーリチでは大洪水が起きた。神の思し召しによって突然大量の雨が降り、一昼夜でドニエストル川から大量の水が溢れだして沼地になった。水はブイコヴォ (Быково) 沼まで及び、ウデチ³³³⁾ (Удеч) から塩を運んでいた 300 人以上が溺れ死んだ。また、多くの人が、流し出された水流で〔つかまっていた〕樹木や杭から離れて〔溺れ死んだ〕。他にも多くの者が溺れ死んだ。この年の冬³³⁴⁾ は穀物の値段が急騰した。

この年、アンドレイ大公 [D173] の息子で、キリストを愛する篤信の公イジャスラフ [D1731] が逝去した³³⁵⁾。父のアンドレイ公 [D173] と兄弟のムスチスラフ³³⁶⁾ [D1732] は、かれ〔イジャスラフ〕を〔悼んで〕泣いた。こうして、かれ〔イジャスラフ〕は、大いなる哀泣とともに

331) 「イワン・ラディ斯拉ヴィチ」 (Иван Радьставич) は、父称をともなった敬称で記名されていることや、任務の重要性から見て、オレーグ [C431] 配下の貴族と考えられる。

332) 1164 年の 2 月 15 日のこと。この年の 2 月 17 日は確かに月曜日に相当する。

333) 「ウデチ」 (Удеч) は、ガーリチから北西に約 51km 離れた、ストルイ川がドニエストル川に注ぐ河口近くの城市で、現在のウクライナ、リヴィウ州のジダチウ市 (Жидачів) に相当する。

334) 年代記記事の時系列から見て、ガーリチの大洪水は、1164 年春～秋のことであり、「この年の冬」は 1164/1165 年の冬だろう。

335) イジャスラフ [D1731] は、1159 年に父アンドレイ [D173] の命令によって、ヴシチジのスヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341] 討伐の諸公連合軍に参加している (上注 172 参照)。また、『ラヴレンチイ年代記』 6672(1164) 年の記事によれば、父アンドレイ [D173] とともにカマ川沿岸のブルガール人の討伐遠征 (1164 年) に参加している。まだ若年のため、独立した所領は持っていなかったのだろう。

336) ムスチスラフ [D1732] についてはこの部分が初出。まだ若く、父アンドレイのもとに住んでいたのだろう。後に (1167/1168 年冬) に父アンドレイはかれを、キエフへの討伐遠征に派遣している (下注 535 参照)。

ヴラジミル〔クリャジマ河畔〕の聖なる聖母教会³³⁷⁾に埋葬された。10月28日のことだった³³⁸⁾。

6673〔1165〕年

皇帝の従兄弟にあたる³³⁹⁾アンドロニコス(Андроникъ)殿下³⁴⁰⁾が、帝都からガーリチのヤロスラフ[A1211]のもとに亡命した³⁴¹⁾。ヤロスラフ[A1211]は大いなる親愛をもってかれ〔アンドロニコス〕を受け入れた。ヤロスラフ[A1211]は、かれのために幾つかの城市を与えた³⁴²⁾。

337) 1158年4月にアンドレイ[D173]によって定礎された、首座教会の聖母就寝教会(Успенская церковь)のこと(上注201)。アンドレイ[D173]一族の菩提寺であったことがわかる。

338) この段落の記事は、『ラヴレンチイ年代記』の6673(1165)年の項に並行記事がある。『イパーチイ年代記』では父と兄弟が「泣いた」ことが加筆されているが、文言はほぼ一致している。共通のソース資料を用いていることは疑いない。イジャスラフ[D1731]の没年は『ラヴレンチイ年代記』の年紀に拠って1165年の10月28日であろう[Bережков 1963: C. 67]。

339) 「従兄弟」の原語は братанъ で、父方の伯叔父の息子を意味している。実際に、当時の皇帝マヌイル一世の父ヨアンニス二世(1143年没)と、アンドロニコスの父イサキオスは実の兄弟(父はアレクシオス一世コムネノス)である。

340) 後にコムネノス王朝最後の皇帝(在位1183～1185年)となる、アンドロニコス1世コムネノスのこと。「殿下」は原文では кюръ と呼称されている。

341) アンドロニコスの亡命の経緯は大概次の通りである。かれは、ビザンティンと敵対していたハンガリー王ゲーザ二世と同盟して、皇帝マヌイル一世の帝位転覆をはかったが、陰謀が発覚して、1154年に帝都の監獄に幽閉された。長期の監禁生活を強いられたアンドロニコスは、1158年に脱獄して捕らえられるが、1164年には巧妙な手段で再度脱獄を果たし、ダーダネルス海峡から、アンキアル(現在のブルガリアのブルガス)を経て、ドナウ川河口まで到達する。そこから、ガーリチに向かおうとしたアンドロニコスは、境界地帯でビザンティンの警備隊のワラキヤ人に捕縛されたが、仮病を使ってなんとか逃れ、陸路をだどってガーリチにたどり着いたという[Юревич 2004]。

『ニコン年代記』の並行記事は、6672(1164)年の項におかれているが[ПСРЛ Т.9, 2000: C. 232]、ビザンティンの年代記資料等と対照すると、アンドロニコスのガーリチ到来は、1164年末頃のことだろう[Юревич 2004: C. 86-87]。

アンドロニコスがガーリチに亡命した動機の一つに、かれの母親が、ガーリチ公ヤロスラフ[A1211]の伯母であったことを指摘する研究者もいる[Юревич 2004: C. 50-53, 91]。その場合、アンドロニコスは、ヤロスラフにとって従兄弟にあたり、かれの親愛の理由も説明できるだろう。ただし、アンドロニコスの母の出自については、史料学的根拠が乏しく、これは推定にとどまる。

342) ヤロスラフ[A1211]がアンドロニコスに示した欲待については、ビザンティン側の史料にも示されている([Древняя Русь-Хрестоматия Т. 2: C. 267-268, 280-281] 参照)。

その後、皇帝は二人の府主教を派遣して³⁴³⁾、かれ〔アンドロニコス〕を呼び寄せようとした。ヤロスラフ [A1211] は、大いなる名誉をもって、〔アンドロニコス〕をかれ〔皇帝〕のもとに帰国させた。かれ〔アンドロニコス〕には、自分の主教であるクジマ (Кузма) と側近の家臣たちを付き添わせた。

この年、ロスチスラフ [D116:J] の娘アガーフィア (Огафья) が連れてこられ、オレーグ・スヴァトスラヴィチ [C431] と結婚した。【525】 6月29日のことだった³⁴⁴⁾。

この年、ダヴィド・ロスチスラヴィチ [J3] がヴィテブスク³⁴⁵⁾ (Витебски) の公座に就いた。

ロスチスラフ [D116:J] は、ヴァチェスラフ [D16] の孫ロマン³⁴⁶⁾ [D1611] に、ヴァシーレフ (Васильев) とクラスン (Красн) を与えた³⁴⁷⁾。

343) 皇帝マヌイル一世の使節については、ビザンティン側の史料にも記述があり、皇帝は当時対立していたハンガリー王イシュトバン三世との戦闘を有利に進めるために、ガーリチ公ヤロスラフ [A1211] の援助を取り付けると同時に、アンドロニコスに恩赦を約束したとしている。実際、これを受けて、アンドロニコスは1165年の前半(4月以前)にはコンスタンティノポリスに帰国している ([Древняя Русь-Хрестоматия Т. 2: С. 267-268, 280-281] 参照)。また、『ニコン年代記』には、「(ヤロスラフ [A1211] は) 大いなる名誉をもって〔アンドロニコス〕を帰国させ、かれに従者を付けた。それは、主教、貴族たち、上級の軍司令官たちであり、このように名誉をもって付き添って行った」[ПСРЛ Т.9, 2000: С. 232] とある。([Юревич 2004: С. 91-92] も参照)

344) ロスチスラフ [D116:J] の長男ロマン [J1] は、1149年にスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [D43] の娘と結婚しており ([『イパーチ年代記(3): 369頁, 注204]), かの女はオレーグ [C431] の姉妹(おそらく姉)に当たる。今回の結婚は、ロスチスラフ [D116:J] の側が娘を送り出すことで、ロスチスラフ一族とスヴァトスラフ一族の間の婚姻同盟をより強化する意図があったことは明らかである。結婚がなされたのは、1165年の6月29日のこと。

345) 「ヴィテブスク」(Витебск) は、現在もベラルーシの同名の都市で、ポロツクから東南東方向に約95km 離れ、西ドヴィナ川上流左岸に位置している。ポロツク公領とスモレンスク公領の境界地帯にあり、1161年にノーヴィ・トルグを退去して以降、スモレンスクの兄ロマン [J1] のもとにいわば寄食していたダヴィド [J3] は(上注199)、自身の支配領獲得のために、なかば強引にこの城市を奪い取ったのだろう。

346) ヴァチェスラフ [D16] には1130年に夭折した息子ミハイル [D161] がいたが [イパーチ年代記(2): 303頁], ロマン [D1611] はこのミハイルの息子である。

347) 「ヴァシーレフ」と「クラスン」はともにキエフ南方50～60kmのところにあるキエフ公領の付属城市。キエフ公の地位を安定させたロスチスラフ [D116:J] は、従来からキエフで勤務していた従兄弟にあたるロマン [D1611] に、キエフに近い領地を与えたということ。[イパーチ年代記(5): 282頁, 注297] も参照。

この年、ヴァシリコ・ヤロボルコヴィチ³⁴⁸⁾ [I31] は、ロシ川³⁴⁹⁾ でポロヴェツ人を撃ち破った。かれら〔ポロヴェツ人〕の多くが生け捕りになった。かれ〔ヴァシリコ〕の従士たちは、多くの武器や馬を獲得した。かれ〔ヴァシリコ〕自身も、多くのかれら〔ポロヴェツ人捕虜の〕身代金を得た。

6674 [1166] 年

ヤロスラフ公³⁵⁰⁾ は、大ノヴゴロドの主教にイリヤ(Илья)を任じた。イリヤはノヴゴロドの出身者だったからである³⁵¹⁾。

この年、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] の娘が、ヤロボルク・イジャスラヴィチ [I3] のところに嫁入りした³⁵²⁾。

348) ヴァシリコ [I31] は、すぐ翌年に結婚の記事があるヤロボルク [I3] 公と最初の妻との間の息子で、当時は、ブジェスク公だった父のもとに居たと推定できる。

349) 『イパーチイ年代記』のすべての写本は「ルーシで」(на Руси)とあるが、これは奇妙な用法である。他方、『ヴォスクレセンスカヤ年代記』の並行記事では、「ロシで」(на Роси)すなわち「ロシ川流域」でとなっている。ロシ川は、これまでもポロヴェツ人がキエフ公に仕えるベレンディ人などを襲撃してきた場所であり、こちらが自然であることから、『ヴォスクレセンスカヤ年代記』の読みを採用した。

350) 『イパーチイ年代記』のすべての写本で、Ярославъ князь となっているが、これは明らかに、Ростислав князь (ロスチスラフ公 [D116:J]) の誤記である。

351) イリヤのノヴゴロド主教叙任については、『ノヴゴロド第一年代記』6673(1165)年の項により詳しい記述がある。それによれば「イリヤが府主教イオアンによって、ノヴゴロドの大主教に叙任された。ルーシの公がロスチスラフ [D116:J] の時で、3月28日の柳の日曜日のことだった。かれは、5月11日にノヴゴロドに到着した。スヴァトスラフ [J4] がノヴゴロドの公で、ザハリイが市長官の時だった」とある [Новгородская первая летопись: С.30][ノヴゴロド第一年代記 [II]: 26]。これは、1165年に相当する。

イリヤはのちに聖イオアンとして叙聖されたことから、聖人伝が残されている。後代に書かれたその史料によると、ノヴゴロのリューヂン街区の聖ヴラーシイ教会の司祭を勤めており、1163年9月19日に没した主教アルカージイを継いで、民会によって後任の主教に選ばれた。1170年には、ミヤチノに受胎告知修道院を建立している。その後、聖堂建設やノヴゴロドの外交活動に貢献し、1186年に没している。

352) スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] は、すでに、1164年2月に没しており、この結婚は、キエフ公ロスチスラフ [D116:J] が主導したものではないか。記事もその立場から書かれている。ヤロボルク [I3] は、1159/1160年冬のムスチスラフ [I1] によるトゥーロフ遠征のときに、ブジェスクに座しており(上注 183, 237)、このときもブジェスク公だったのだろう。すぐ上に息子のヴァシリコ [I31] の遠征についての記事があることから、この結婚は再婚であることが分かる。

この年、大公ユーリイ [D17] の息子で、キリストを愛する篤信の公ヤロスラフ³⁵³⁾ [D176] が逝去した。かれの兄弟アンドレイ [D173] はかれを哀悼して泣いた。ヴラジミル〔クリャジマの〕の聖なる聖母教会に埋葬された³⁵⁴⁾。4月12日だった。

スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] の妃³⁵⁵⁾ が逝去した。

6675〔1167〕年

ダヴィド [C3] の孫のスヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341] が、ヴシチジ (Вщижи) で死んだ³⁵⁶⁾。

この年、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] は、オレーグ [C431] に対して、〔スヴァトスラフ・〕ウラジーミロヴィチ [C341] 〔の領地を巡って〕戦いを起こした。なぜなら、オレーグ [C431] は、信義にもとづいて〔領地を〕分けるように求めたからである。しかし、スヴァトスラフ [C411:G] は、かれ〔オレーグ〕に分け与えず、自分の兄弟³⁵⁷⁾ にもっとも良い領地を与え、自分の息子³⁵⁸⁾ をヴシチジの公座に就けた。

ロスチスラフ [D116:J] は信実を判断して、スヴァトスラフ [C411:G] がオレーグ [C431] に侮辱を与えたと定め、オレーグ [C431] に援助を行い始めた。ロスチスラフ [D116:J] は、スヴァ

353) この、ヤロスラフ・ユーリエヴィチ公 [D176] については、『ラヴレンチイ年代記』1164年の項に、アンドレイ [D173] のボルガール討伐遠征に従軍したという記事がある（〔スズダリ年代記訳注 [IV] : 14頁〕）。アンドレイの弟として一貫してかれに仕えていたのだろう。

354) 『ラヴレンチイ年代記』6674(1166)年の項に並行記事がある。上のイジャスラフ [D1731] の死亡記事（上注338）と同様に、「アンドレイが泣いた」という補足を別にすれば記事はほぼ一致しており、やはり共通の資料が使われている。「4月12日」は、1166年4月12日のことである。

355) スヴァトスラフ [C43] がノヴゴロド公だった1137年に、ノヴゴロド人の女性（市長官ペトリロの娘という説もある）と結婚し（『ノヴゴロド第一年代記』6644(1136)年の項）、ノヴゴロド主教ニフォントの反対を受けているが、そのときの結婚相手である。

356) スヴァトスラフ [C341] は、叔父イジャスラフ [C35] の庇護によりヴシチジの公座を得たが（上注166参照）、イジャスラフの死後は、キエフ公ロスチスラフの反対派として孤立していた。その死について、「死んだ」(умре)と卑称形の動詞が用いられているのは、キエフ公の側に立っている年代記記者の観点が反映しているのだろう。

357) 弟のヤロスラフ [C412] のことを指している。「もっとも好い領地」とは、以下に述べられているスタロドゥーブのことを言っているのだろう。

358) スヴァトスラフ [C411:G] の息子に言及しながら、その名が示されていない記事は6672(1164)年の項にもあるが（上注329）、ここの「息子」も、ゴミイに配置されていたウラジーミル [G2] のことを指すのだろう。

トスラフ [C411:G] に対して何度も使者を遣って、信義に基づいて〔領地を〕分けるよう命じた。かれら〔二人〕に、善事を望んだのである。〔しかし、〕スヴァトスラフ [C411:G] は、かれ〔ロスチスラフ [D116:J]〕に聴き従わなかった。

オレーグ [C431] は **【526】** は、スタロドゥーブ³⁵⁹⁾ (Стародуб) に向けて出撃した。これまで、スタロドゥーブの住民がオレーグ [C431] に〔公となることについて〕使者を派遣していたにもかかわらず、かれらは、先にヤロスラフ³⁶⁰⁾ [C412] に対して、城市へ来て〔公座に就く〕ようにとの援助を求めたからである³⁶¹⁾。城市の住民は自分たちの〔以前の〕考えを果たさなかった。オレーグ [C431] は引き上げるときに憤然として、多くの捕虜を獲った。

スヴァトスラフ [C411:G] は、自分の弟のヤロスラフ [C412] に、ポロヴェツ人を率いさせて、ノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕へと派兵した。かれらは、モロチナ (Молочьна) 川³⁶²⁾ まで到達したが、そこから引き返した。〔ノヴゴロド・セヴェルスキイの〕城市からは 15 露里 (верста) の地点だった。

その時、オレーグ [C431] はひどく健康を害しており、かれは馬に乗ることができなかった³⁶³⁾。ロスチスラフ [D116:J] は、オレーグ [C431] が重病なのを知ると、オレーグ [C431] に宛てて使者を派遣して、和を結ぶよう命じた。オレーグ [C431] は、これに聴き従い、兄弟〔従兄弟〕と和を結んだ。スヴァトスラフ [C411:G] は、オレーグ [C431] に 4 つの城市を与えた。二人は

359) スタロドゥーブ (Стародуб) は、オレーグ [C431] の拠点城市ノヴゴロド・セヴェルスキイからはほど近く、北北西方向へ 75km ほどの場所にある。伝統的にチェルニゴフ公領であり、1156 年の記事からスヴァトスラフ [C411:G] がここに滞在していたと推定でき ([イパーチイ年代記 (5): 288 頁, 注 336])、この時点でもスヴァトスラフ [C411:G] の支配下にあったのだろう。

360) 当時ヤロスラフ [C412] は、チェルニゴフ公領の小城市であるロベスクにいたと思われる。上注 101 参照。

361) このスタロドゥーブ住民の態度の変化は、オレーグ [C431] の父スヴァトスラフ [C43] の死 (1164 年 2 月) が契機になったことは疑いない。すなわち、父スヴァトスラフがチェルニゴフ公である間は、チェルニゴフ領内の城市として、息子のオレーグ [C431] が公として就位して、城市の防衛にあたってもらうのが妥当な要請だったが、すでにスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] がチェルニゴフ公に就いているこの時点では、オレーグがスタロドゥーブの公位に就けば、スヴァトスラフ [C411:G] からの反発を受けて、攻撃される可能性が当然高くなる。それよりも、スヴァトスラフ [C411:G] の弟のヤロスラフ [C412] に公位に就いてもらったほうが、城市の安全にとっては確実性が高いという計算があったのだろう。

362) 「モロチナ川」(Молочьна) はデスナ川の右岸支流で、現在のスードスチ川 (Судость) (旧名マロテチカ川 (Малотечка)) に相当する。その河口からノヴゴロド・セヴェルスキイまでは 35km ほど離れている。

363) 軍事遠征ができないということ。

十字架に接吻して〔和議の遵守を誓った〕。

見よ、ポロヴェツ人は、諸公が不和であることを聞き付けると、〔ドニエプル川の〕早瀬³⁶⁴⁾のところやって来て、ギリシア商人たち³⁶⁵⁾を襲い始めた。ロスチスラフ [D116:J] は、ポーランド人ヴワディスラフ³⁶⁶⁾ (Володислав) に軍隊を率いさせて派遣し、商人たちを救い出した。

この年、オレーグ [C431] に息子が生まれた。かれは洗礼名をボリス、世俗の名をスヴァトスラフ [C4311] と名付けられた。

この年、ヴォロダリ・グレーボヴィチ³⁶⁷⁾ [L53] が、ポロツクへと軍を進めた。フセスラフ・ヴァシコヴィチ [L221] は、ポロツク人を率いて、かれ〔ヴォロダリ〕を迎撃すべく出陣した。ヴォロダリ [L53] は、〔敵軍が〕自分に向かってくるのを知って、かれ〔フセスラフ [L221]〕に合流する暇を与えず³⁶⁸⁾、〔フセスラフの部隊に〕急襲を仕掛けた。そして、多くの敵を撃ち倒し、他の者は生け捕りにした。フセスラフ [L221] はヴィテブスク³⁶⁹⁾ (Витебськ) へと逃げた。

364) このドニエプル川の早瀬 (порог) については、上注〔イパーチイ年代記 (5):264 頁, 注 207〕を参照。岩石質の河床で水深が浅く、流れが早いため、交易船の商人は船から降りて船をひっぱったり、場合によっては荷物を降ろして、船を岸に上げなければならなかった。当然、遊牧民にとっては攻撃、掠奪の好機であり、商人にとってはもっとも危険な場所だった。

365) この個所の「ギリシア商人」(гречники) とは、後の 6678(1170) 年の記事で言及される、キエフと黒海を結ぶ「ギリシア商人の通商路」(греческий путь) (下注 493) によって交易する商人たちのこと。つまり、ドニエプル川を船で通行してルーシとビザンティン帝国領と間で交易を行っているギリシア人やルーシ人の商人たちを指している。

366) 「ヴワディスラフ」(Володислав) は、ロスチスラフ [D116:J] 配下のポーランド人軍司令官。ロスチスラフ [D116:J] は、1163 年に実の娘エレナを、ボレスワフ 3 世の当時 25 歳の息子カジミエシュ(当時はクラクフ公で、後にカジミエシュ 2 世スブラヴィエドリヴィ (Kazimierz II Sprawiedliwy)) に嫁がせており [Войтович 2006: С. 519 (Олена Ростиславна)], ポーランドとの姻戚関係を確立したばかりだった。その関係で、このヴワディスラフはキエフに軍司令官として招かれたのだろう。かれの名は、これ以降の記事にしばしば登場する。

なお、このポロヴェツ人による「ギリシア商人」襲撃事件は、1165 年春～夏の渡航可能期間に起こった出来事だろう。

367) ヴォロダリ [L53] は、ゴロデツ (Городец) 公で、この城市からポロツクへ向けて遠征した。(上注 270 参照)。

368) この場合の「合流」(сьвѣкупитися) とは、ダヴィド [I3] の部隊が、ヴィテブスクからポロツクへ援軍として駆けつけ、ポロツク人たちの部隊と合流することを意味している。

369) ヴィテブスクまではポロツクからだ和西ドヴィナ川を遡って、直接行くことができた。1165 年以降、ダヴィド [J3] がヴィテブスクの支配公だった (上注 345 参照)。

ヴォロダリ [L53] は、ポロツクに入城すると、ポロツクの住民と十字架接吻して〔公座に就くことについて誓い〕、それから、【527】ダヴィド [J3] とフセスラフ [L221] を討つべくヴィテプスクへと進軍した。そして、〔ヴィテプスクの城市に〕到来すると、河岸に陣を張って、川³⁷⁰⁾を挟んで戦闘を始めた。ダヴィド [J3] は、これに部隊を出して戦おうとはしなかった。なぜなら、自分の兄弟ロマン [J1] が、スモレンスク人を連れてやって来るのを待っていたからである。

すると見よ、深夜に奇妙なことが起こった。猛烈な雷が鳴り、あたかも大軍が川を渡渉しているかのごときだった。ヴォロダリ [L53] の兵士たちは恐怖にとらわれた。ヴォロダリ [L53] の従士たちは「公よ、なぜじっとして、立ち去ろうとしないのですか。見よ、ロマン [J1] が川を渡って来ます、ダヴィド [J3] も〔ヴィテプスクの城内から〕出て来るでしょう」と言った。

ついに、ヴォロダリ [L53] は、ヴィテプスクから逃げ出した³⁷¹⁾。翌日、ダヴィド [J3] は、ヴォロダリ [L53] が逃げ出したことを認めると、追討の部隊を派遣したが、追い付くことはできなかった。かえって、かれ〔ダヴィド〕の部隊は森³⁷²⁾の中に迷い込み、多くが捕虜に獲られた。〔ダヴィド [J3] は〕フセスラフ [L221] をポロツクへと派遣した³⁷³⁾。

この年、ガーリチの公ヤロスラフ [A1211] は、自分の息子ウラジミルコ³⁷⁴⁾ [A12111] を、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] の娘ボレスラヴァ (Болезлава) と結婚させた³⁷⁵⁾。

370) 西ドヴィナ川を指している。

371) ヴォロダリ [L53] はヴィテプスク城下から逃げ出して、ポロツクへは行かずに、従来の根拠地であったベレジナ川河岸のゴロデツ (上注 271 参照) に逃げ戻ったということ。これ以降、ヴォロダリ [L53] について年代記には言及がない。

372) フレーブニコフ写本 (ポゴージン写本) では、この部分は「荒野で」(по полю) となっているが、ポロツク周辺は森林地帯であることから、イパーチイ写本の読み「森」(по лесу) のほうが適当であろう。

373) フセスラフ [L221] は追放されたポロツクの公位に復位したことになる。ただし、ダヴィド [J3] を初めとするスモレンスクの一族の影響力が強くなったことは言うまでもない。

374) 原文では Володимир だが、学術上の通用名「ウラジミルコ」と訳した。このウラジミルコ [A12111] については年代記では本記事が初出。1187～1188年、1190～1199年にガーリチ公として支配し、1199年に没している。

375) 当時、チェルニゴフ公スヴァトスラフ [C411:G] は、オレーグ [C431] への領地配分を巡って、キエフ公ロスチスラフ [D116:J] と対立状態にあった。そのため、やはりロスチスラフ [D116:J] と対立していた、ガーリチ公ヤロスラフ [A1211] との婚姻同盟によって、領地問題を有利にすすめ、ひいては、ロスチスラフ [D116:J] 亡き後のキエフ公を巡る情勢を優位に進めようとしたものと考えられる。

なお、このガーリチ=チェルニゴフの同盟関係を強化するために、後年ヤロスラフ [A1211] は娘のエフロシニヤをノヴゴロド・セーヴェルススキイの公でスヴァトスラフ [C43] の息子イーゴリ [C432] と結婚させている。

この年、ヤロスラフ³⁷⁶⁾・イジヤスラヴィチ³⁷⁷⁾ [I2] は、ユーリイ・ヤロスラヴィチ [B321] の娘マルフリド (Мальфрид) をトゥーロフから連れてきて、息子のフセヴォロド [I23] と結婚させた³⁷⁸⁾。

この年、オレーグ・スヴァトスラヴィチ [C431] と結婚した、アンドレイの娘 (Андреевна) が死んだ³⁷⁹⁾。

この年、オレーグ・スヴァトスラヴィチ [C431] は、ボニャク (Боняк) と戦った。オレーグ [C431] はポロヴェツ人に勝利した³⁸⁰⁾。

この年、ポロヴェツ人は、ペレヤスラヴリの向こうで、シヴァルン (Шварн) を捕虜にし、かれの従士たちを撃ち破った。〔ポロヴェツ人は〕多額のかれ〔シヴァルン〕の身代金を取っ

376) 『イパーチイ年代記』ではすべての写本で、Ярославичь と表記されているが明らかな誤記なので、ここでは『ヴォスクレセンスカヤ年代記』の読み Ярославъ を採用した。

377) 当時はルチェスク公だったと考えられる。

378) 1159/1160年の冬には、ヤロスラフ [I2] は、兄ムスチスラフ [I1]、弟ヤロ波尔ク [I3] とともに、ユーリイ [B321] が支配するトゥーロフへ遠征を行い、城市を包囲したが戦果なく撤退している (上注 182)。この時点では、ヤロスラフ [I2] とユーリイ [B321] は敵対していたわけだが、1162年に、ユーリイ [B321] はキエフ公ロスチスラフ [D116:J] と和を結ぶなど (上注 295)、トゥーロフにおける支配を安定させていった。そのため、ヤロスラフ [I2] (および兄のムスチスラフ [I1]) は、トゥーロフへの権利要求はあきらめ、ユーリイ [B321] に対しては和親政策に転じたと思われる。この婚姻もその政策の一環だろう。

379) 1165年6月29日にオレーグ [C431] は、キエフ公ロスチスラフ [D116:J] の娘アガーフィアと結婚していることから (上注 344)、この「アンドレイの娘」 (Андреевна) はオレーグ [C431] の先妻で離縁した女性を指していると推定できる。「死んだ」 (умре) という卑称動詞が用いられていることから、年代記記者 (オレーグ [C431] の一族の立場に立っている) から見て感心しない理由で離縁されたのだろう。この女性の父親「アンドレイ」は、アンドレイ・ムスチスラヴィチ [D181]、もしくはアンドレイ・ユーリエヴィチ [D173] の可能性があるが、どちらとも定め難い。

380) 1096年にキエフに来襲したポロヴェツの首長として「ボニャク」 ([ロシア原初年代記: 527頁] 参照) の名が記されているが、ここでオレーグ [C341] が撃ち破った「ボニャク」は、年代が離れすぎていることから、別の人物だろう。おそらく、ドニエプル川中流域に展開してきた「ボニャク=セヴェンチ」父子の一族に属する首長で、ボニャクの名を継承した人物 (セヴェンチの息子?) ではないか。

た³⁸¹⁾。

6676 [1168] 年

ロスチスラフ [D116:J] は、自分の兄弟と息子たちに宛てて使者を發し、すべての者が各自全軍を率いて、自分のもとに集合するよう命じた³⁸²⁾。【528】ムスチスラフ [I1] はヴラジミル〔ヴォルィニ地方の〕から、その兄弟ヤロスラフ [I2] はルチェスク³⁸³⁾ (Лучьск) から、ヤロ波尔ク [I3] はブジェスク³⁸⁴⁾ (Бужьск) から〔やって来た〕。ウラジミル・アンドレエヴィチ³⁸⁵⁾ [D181]、ウラジミル・ムスチスラヴィチ³⁸⁶⁾ [D115]、グレーブ・ユーリエヴィチ³⁸⁷⁾ [D178]、リユーリク³⁸⁸⁾ [J2]、ダヴィド³⁸⁹⁾ [J3]、ムスチスラフ³⁹⁰⁾ [J5]、グロドノのグレーブ [F112]、イワン・ヤロ

381) 「シヴァルン」(Шварн)は歴代のキエフ公に仕えたキエフ在地の貴族(軍司令官)で、1146年、1151年、1162年(上注258参照)の記事に言及されている。この時には、かれはムスチスラフ [D116:J] に仕えており、ベレヤスラヴリの「向こう」、すなわち南方(スポイ川もしくはスーラ川沿い)の城砦警備にあたっていたところ、捕虜になったと考えられる。かれは、キエフ人やキエフ公にとっていわば功勞者であることから、キエフ公(ロスチスラフ [D116:J])は、多額の身代金を払って身柄を買収したのではないか。

382) このキエフ公ロスチスラフ [D116:J] による諸公召集は、上記の「ボロヴェツ人は、諸公が不和であることを聞き付け」でドニエプルの早瀬に來襲した事件(上注364)と関連づけられており、ロスチスラフが「不和」を克服して諸公に号令をかけたというデモンストレーションとしても記述されている。

なお、この召集は1166年春～夏の渡航期間に行われたと見るべきだろう。

383) 「ルチェスク」(Лучьск; Луческ; Луцк)は、ヴラジミル・ヴォルィンスキイ公領にあり、ストイリ川左岸に位置する城市。1155年にユーリイ手長公 [D17] の勢力によって追われたムスチスラフ [I1] が、弟のヤロスラフ [I2] をルチェスクに残して、ポーランドに亡命するエピソードがあり、ヤロスラフ [I2] はこのときからルチェスクを拠点としていた。

384) 「ブジェスク」(Бужьск)は、ヴラジミル・ヴォルィニ公領を流れる西ブーグ川の流域左岸にある城市で、ガーリチ公領との境界付近に位置している。現在のリヴィウからは北東におよそ51kmの位置にあるブーシク市(Буськ)に相当する。当時は、ヤロ波尔ク [I3] の兄ムスチスラフ [I1] が支配するヴラジミルの付屬城市の役割を果たしていた。([イパーチイ年代記(5):247頁、注119]参照)

385) ウラジミル [D181] は、ベレソプニツァもしくはドロゴブージュに公座を持っていた。

386) ウラジミル [D115] は、トレポリとその附屬城市に公座を持っていた。

387) グレーブ [D178] は、当時はベレヤスラヴリ公だった。

388) リユーリク [J2] は、当時はスモレンスク公だった。

389) ダヴィド [J3] は、1165年からヴィテブスク公だった。(上注345を参照)

390) ムスチスラフ [J5] は独立した公座を持たず、兄リユーリク [J2] のもと、スモレンスクにいたと思われる。

スラヴィチ³⁹¹⁾、ガーリチからの援軍等がやって来た。

かれらは、ギリシア商人³⁹²⁾とザロズィ商人³⁹³⁾たちがやって来るまで、長い間カーネフ近郊で陣を構えていた。そして、そこからみな帰郷した³⁹⁴⁾。

この年、ロスチスラフ [D116:J] は、〔キエフを〕出発すると、ノヴゴロドへと向かった。なぜなら、ノヴゴロド人が、かれ〔ムスチスラフ〕の息子スヴァトスラフ [J4] と良好に共にあることができなかつたからである³⁹⁵⁾。

かれ〔ロスチスラフ〕は、チチュエルスク³⁹⁶⁾ (Чичьрьск) へ、娘婿のオレーグ [C431] のもとへと行った。オレーグ [C431] は妻³⁹⁷⁾ とともにかれを待ち受けていた。オレーグ [C431] は、ロスチスラフ [D116:J] を迎え入れて、食事に招待した。その日はかれらの間に大いなる喜びがあった。オレーグ [C431] は、多くの贈物をロスチスラフ [D116:J] に与えた。〔ロスチスラフの〕娘も、

391) 「イワン・ヤロスラヴィチ」 (Ивань Ярославичь сын) については、該当する公の名が他の史料には見当たらず、同定は難しい。続いて「ガーリチの援軍」に言及されることから、ガーリチ公ヤロスラフ [A1211] の息子であるか？

392) ここの「ギリシア商人」 (гречник) については上注 365 を参照。

393) 「ザロズィ商人」 (залозник) とは、1070 年の年代記記事に言及されている「ザロズィ商人の通商路」 (залозный путь) (下注 495) を交易路としている商人たちを指している。「ザロズィ」の意味は、クードリャシェフによれば、「ロズィ」 (лозы) の語は蔓性のヤナギ科の低木を意味し、これが繁茂していた、アゾフ海北岸に広がる川の河岸や中州地帯を指していると解釈している。「ザロズィ」は、キエフから見てこの「ロズィ」地帯の向こう側の場所を指すことから、アゾフ海河岸、ドン・ドネツ川河口地帯の方面からベレヤスラヴリ及びキエフに向かう交易路があったことが想定できる。その場合、この行路は、カーネフあたりで、ドニエブル川に合流することになる [Кудряшов 1948: С. 103-109][Древняя Русь 2015: С. 287]。

394) 1166 年春～秋の航行期間に、帝都及びビザンティン領からの商人や、アゾフ海沿岸地帯から来た商人たちの商品が、ドニエブル川を遡ってカーネフを通過して、キエフを初めとするルーシ諸城市に安全に向かうのを、河川地帯を警備しながら見届け、それが終わったら各自帰郷したということ。情況から判断して、名が挙がっている諸公が一挙にカーネフに来たわけではなく、順次やってきては交替でカーネフ近郊での警備に就いていたのではないか。

395) この時の、ノヴゴロド人とスヴァトスラフ [J4] の不和の原因については明記されていないが、1060 年にもスヴァトスラフ [J4] はノヴゴロド人と紛争を起こしてラドガに幽閉されたことがあり、この時も同様に、ノヴゴロドの反対派の手によって紛争が再燃したのだろう。

396) 「チチュエルスク」 (Чичьрьск; Чечерск) は、現在のベラルーシのチャチュエルスク市 (Чачэрск) に相当する、ソジ川 (Сож) 河畔の城市で、当時のチュエルニゴフ公領の北西端に位置している。オレーグ [C431] のいる城市ノヴゴロド・セヴェルスキイからだと、北西へ 190km ほど離れている。オレーグ [C431] は岳父に敬意を表して、チェチュエルスクまで出向いたことになる。

ここは、スモレンスクに近いことから、オレーグ [C431] の妃 (1165 年 6 月に結婚) でロスチスラフ [D116:J] の娘アガーフィアに所領地として与えられていたのだろう。

397) 1165 年 6 月にオレーグ [C431] と結婚した、ロスチスラフの娘アガーフィアのこと。前注及び上注 344 を参照。すぐあとに言及される、ロスチスラフの「娘」と同じ人物。

かれ〔ロスチスラフ〕に多くの贈物を与えた。翌日、ロスチスラフ [D116:J] は自分のもとにオレーグ [C431] と娘を呼んだ。そして、はるかに多い贈物を全員に与えた。

そして、かれ〔ロスチスラフ〕はスモレンスクへと行った。スモレンスクの上級家臣たちは、かれ〔スモレンスク〕を〔城から〕300 露里（ヴェルスタ）のところで出迎えた³⁹⁸⁾。その後、孫たちがかれを出迎えた。その後、息子のロマン [J1] と主教マヌイル³⁹⁹⁾、ヴネズド⁴⁰⁰⁾ (Внѣзд) が出迎えた。ほとんど全城市の者がかれ〔ロスチスラフ〕を出迎えるために城を出た。こうして、皆はかれ〔ロスチスラフ〕の到来を喜んだ。多くの贈物がかれに捧げられた。

かれ〔ロスチスラフ〕は、そこ〔スモレンスク〕から、トロペチ⁴⁰¹⁾ (Торопечь) へ行った。そこから、息子のスヴァトスラフ [J4] のいるノヴゴロドへ使者を派遣して、自分を迎えるために、ルキ⁴⁰²⁾ (Луки) まで **[529]** 出てくるようにかれ〔スヴァトスラフ〕に命じた。ロスチスラフ [D116:J] はひどく健康を害していたからである⁴⁰³⁾。

こうして、かれ〔ロスチスラフ〕は、ルキで息子〔スヴァトスラフ [J4]〕とノヴゴロド人たちと会合した⁴⁰⁴⁾。ノヴゴロド人は十字架に接吻して、ロスチスラフ [D116:J] に対して、死が両者を分かつまで、息子〔スヴァトスラフ [J4]〕を自分たちの公とすること、他の公を求めないこと〔を誓った〕。

かれ〔ロスチスラフ〕は、息子〔スヴァトスラフ [J4]〕とノヴゴロド人から、多くの贈物を

398) 露里 (верста) を約 1.1km として換算すると、スモレンスクから 300 露里 (ヴェルスタ) の距離 (330km) だと、現在のベラルーシのレチツァ (Рэчыца) のあたりまで迎えに来たことになる。この地点からキエフまでは 210km ほど離れているから、中間地点よりもキエフに近いところまで来たことになるか。

399) マヌイルは、ギリシア人で、1137年に主教としてスモレンスクに赴任していることから、当時はかなり高齢だったと思われる ([イパーチイ年代記 (2): 312 頁, 注 148] 参照)。

400) 「ヴネズド」(Внѣзд) は、1159年の項に「ヴネズダ」(Внѣзда) として言及されており (上注 30 参照)、ロスチスラフ [D116:J] の旧臣のスモレンスクの貴族 (軍司令官) で公と主教に次ぐ高官だったとされる ([Соловьев 1988: С. 510])。

401) 「トロペチ」(Торопечь) は、スモレンスクから北へ 190km ほど行ったノヴゴロド領の付属城市。ルキからだ、東北東方向へ 70km ほどと近い。現在のトロペツ市 (Торопец) に相当する。

402) ルキ (Луки) は、イリメニ湖の南方、ロパチ川沿岸に位置するノヴゴロドの付属城市で、ノヴゴロドから南方へ 250km ほど離れている。現在のヴェリーキエ・ルキ (Великие Луки) に相当する。

403) ロスチスラフ [D116:J] のルキ行きについては、『ノヴゴロド第一年代記』6674(1166)年の記事に、「この年の冬、ロスチスラフ [D116:J] はキエフからルキに来て、ノヴゴロドの人々を会議に呼んだ。家職長 (огнищаны), 親衛隊 (гридьба), 商人 (купцы) たち〔を呼んだ〕。そして、かれ〔ロスチスラフ〕は発病した」とある [Новгородская первая летопись: С. 219][ノヴゴロド第一年代記 XII: 25 頁]。後で述べられるロスチスラフ [D116:J] の死亡日時 (1167年3月14日) から見て、これは 1166/1167年の冬のことである。

404) このノヴゴロド人たちとの会合については、上注 403 を参照。

受け取った。そして、そこ〔ルキ〕からスモレンスクへと戻った。

かれ〔ロスチスラフ〕の姉妹のログネダ⁴⁰⁵⁾ (Рогдѣд) は、兄弟がひどく衰弱しているのを見て、スモレンスクの〔ロスチスラフ〕自身〔が建てた〕聖堂で横たわる〔埋葬される〕ことを、ロスチスラフに頼み始めた。かれ〔ロスチスラフ〕は、かの女に言った。「ここに、横たわる〔埋葬される〕わけにはいかない。わしをキエフに運んでくれ。もし、道中で神がわしを召すようなことがあれば、父が祝福した聖テオドロス教会⁴⁰⁶⁾ にわしを葬れ。もし、このいとも淨き聖母とわれらが聖なる師父、洞窟修道院典院のフェオドーシイの祈りによって、神がこの病気を癒されたときには、(わしは洞窟修道院で剃髪し得度するつもりだ)⁴⁰⁷⁾」。

なぜならそれは、かれ〔ロスチスラフ〕は、このはかなく過ぎる現世を去るにあたって、自分の聴罪司祭のシメオン(Семьон)に対して、「そなたは、わしが得度することを引き留めたことについて、神への責任を果たさなければいけない」と言っていたからである。

これについては、ロスチスラフ[D116:J]は、洞窟修道院の典院ポリカルプ⁴⁰⁸⁾ (Поликарп) に、しばしばこう言っていた。「典院猊下、チェルニゴフから、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ[C43]の死の報がわしのところに来たそのとき、得度したいとの思いがわしを捉えたのだ」。

また、かれ〔ロスチスラフ〕は、典院に対して常々こう言っていた。「典院猊下、どうかわしを良い庵室に入れて欲しい。虚しい死をわしは恐れる。神とそなたたち〔修道士たち〕の祈りの定めるとおりになるように」。

かれ〔ロスチスラフ[D116:J]〕は、次のような有徳の【530】習慣を定めていた。大齋期の土曜日と日曜日には、12人の修道士とともに席に着いた。13番目は典院ポリカルプだった。

405) 「ログネダ」(Рогдѣд)については、他の史料に記述はない。嫁ぎ先から戻ってきたかの女を、スモレンスク公のロスチスラフ[D116:J]が手元に引き取ったものか。

406) テオドロス教会(修道院)はキエフのウラジーミル街区にあった。ムスチスラフ[D11]が、1129年に定礎し(『イパーチイ年代記(2):303頁,注109])、かれ自身も1133年にここに埋葬されていた(『イパーチイ年代記(2):307頁,注121])。1154年にイジャスラフ[D112:I]が逝去したときも、この聖テオドロス教会に埋葬された。

407) 丸括弧内はフレーブニコフ写本だけにある語句。

408) 「ポリカルプ」(Поликарп)は、1164年にキエフ洞窟修道院の掌院(修道院長)に選ばれる。その後、祭日の肉食について慣習主義的な立場を取っていたことから、1168年の末には、原則主義の府主教コンスタンチンの手で破門に処される[Поппэ 1996: C. 459]。その後、復職して、1182年7月に没するまで洞窟修道院の管理運営にあたった。ルイバコフによると、『イパーチイ年代記』の1171年までのキエフ関連記事は、ポリカルポフの執筆になるとしている。[Рыбаков 1972: C. 36-59]

同様にまた、乞食たちに⁴⁰⁹⁾ 食を施して帰宅させた。自分自身は日曜ごとに聖体に与り、おのれの顔を涙で濡らし、しきりに息をついては自らを慎み、心から嘆きの声を上げていた。かれ〔ロスチスラフ〕がかくの如く恭順に〔聖堂の中に〕立っているのを、人々は見ても、涙を抑えることができなかった。

〔ロスチスラフは〕すべての大齋期〔の精進〕を終えると、すべての修道士たちを歓待した。すなわち、ラザロの土曜日⁴¹⁰⁾ には、洞窟修道院の修道士たちをすべて呼び、全ての〔近傍の〕修道院からも呼び寄せて〔ご馳走し〕た。他の日の、水曜日と金曜日には、洞窟修道院の修道士たちに慰めを与えた。

〔ロスチスラフ [D116:J] は〕聖なる聖母と聖師父フェオドーシイ⁴¹¹⁾ を大いに愛していた。そして、ポリカルプと〔次のような〕談話を行っていた。「わたしは毎日のように、はかなく虚しいこの世から、短く騒がしいこの生から解放されることを願ってきました。これについては、以前も、あなたに語って聞かせたことです」。すると、かれ〔ポリカルプ〕は、かれ〔ロスチスラフ〕にこう言った。「神は、あなたたち〔諸公〕に対して、この世で信義をもって行動し、信義をもって裁きを行い、また、十字架接吻を正しく遵守することを命じているのです」。

すると、ロスチスラフ [D116:J] は答えた。「師父よ、公として支配することや俗世にあることは、罪なくしてはあり得ません。わたしはすでに、少なからぬあいだこの世に身を置いてきました。わたしは努めたいと望んで来ました。すべての義しき信仰の王たちが苦しみを受け、自らの主なる神によって報われて **【531】** きたように。聖なる殉教者たちが自らの血を流し、不朽の王冠を戴いたように。聖なる師父たちが、齋戒によって肉体を蔑ろにし、細く狭い道を通して、天の王国を受けたように。かの義しき信仰のコンスタンティノス帝⁴¹²⁾ 自身が言った〔次の言葉を〕、わたしは聞いたのです。『もし、修道士とはかくも尊い位であり、〔修道士は〕天

409) 「乞食たちに食を施して帰宅させた」(накорми нищихъ, отпушаше)の語句が、イパーチイ写本では「かれら〔修道士たち〕に食を施して、空腹では帰さなかった」(накорми, не тщихъ отпушаше)と改変されている。

410) 「ラザロの土曜日」とは、大齋の第6週目の土曜日のことで、この日が40日の大齋の最後の日になる。その、翌日が「聖枝祭」(キリストのエルサレム入城の祭日)にあたる。

411) 「フェオドーシイ」は、キエフの洞窟修道院の実質的な創設者で、1074年に死去。1156年のノヴゴロド主教ニフォントが死の間際に見た幻視にも現れるなど、多くの人々から崇敬を集めていた。

412) 文中に「緋衣」(багряница)という語があることから、ローマ帝国マケドニア王朝の皇帝コンスタンティノス7世「ポルフュロゲネトス」(багрянородный) (在位: 913年~920年, 944年~959年)のことと考えられる。かれは、文筆家としても『帝国統治論』『儀式の書』などを書いており、その翻訳がルーシで読まれていたということだろう。

なお、ゴランインのポーランド語訳ではコンスタンティノス1世(272 - 337年, ローマ皇帝在位 306 - 337年)のこととしているが[Goranin 1994: p. 173, n. 23], 可能性は低い。

使たちとともに主の玉座へ支障なく昇って行くことができることを、自分が知っていたら、自分は帝冠も緋衣も脱ぎ捨ててしまったものを』。

このようにかれ〔ロスチスラフ〕は、典院ポリカルプに語った。典院は、かれ〔ロスチスラフ〕に言った。「公よ、もし、そのようなこと〔修道士の位〕をお望みなら、それは神の御心次第です」。ロスチスラフ [D116:J] は、典院のこの言葉を聞くと、〔その言葉を〕自分の心の中に留め置いた。そして、かれ〔ポリカルプ〕に言った。「さらに少しの間だけ待とう。わたしにはまだ少しなすべきことがある」。こうして、かれ〔ポリカルプ〕はかれ〔ロスチスラフ〕と会話を交わすと、かれを祝福し立ち去らせた。

さて、われらは以前の話に戻ろう。

こうして、かれ〔ロスチスラフ〕の一行はスモレンスクを出発したが、すでにかれはひどく衰弱していた。そして、ログネダの所領の村であるザループ⁴¹³⁾ (Заруб) に滞在したとき、かれ〔ロスチスラフ〕は、自分の侍従官イヴァンコ・フロロヴィチ⁴¹⁴⁾ とボリス・ザハーリチ⁴¹⁵⁾ に向かって、こう言い始めた。「そなたたち二人は、〔わしの聴罪〕司祭シメオンを、祈禱を行わせるために⁴¹⁶⁾、わしのところに連れてきなさい」。

そして、かれ〔ロスチスラフ〕自身も、両手を挙げ、聖なる聖母のイコンに目をやりながら、こう祈りを唱えた。「あなたは、いと高き天使です。すべての被造物をつかさどる大天使です。侮辱を受け希望のない者にとっての尊い援助者です。孤児たちの庇護者です。貧しき者たちの養い手です。悲しむ者の慰め手、罪ある者の好き手、全てのキリスト教徒の助け手です。慈悲

413) 「ザループ」(Заруб) は一般的に森の開削地を意味し、この「ザループ」は、これまで言及されたペレヤスラヴリ対岸の渡河地点 ([イパーチイ年代記(2)注328] など) とは異なり、スモレンスク公領の村の名前。スモレンスクから130kmほどドニエプル川を下り、コピシ(Копысь; Копись) からやや南のドニエプル川右岸に位置していた村 [Барсов 1865: С. 76]。1150年頃とされる教会税に関する「ロスチスラフ公の規定文書」(Уставная грамота князя Ростислава) にもこの村の名が言及されている [ПРП-2: С. 40, 48]。

なお、マフノヴェツの索引では、デスナ川上流域のログネチノから北に20kmほどのオソヴィク村(Осовик)、スモレンスクからだと130kmほど南東に行った場所に同定している。その場合には、ロスチスラフ [D116:J] 一行は、スモレンスクからデスナ川に連水陸路で渡り、チェルニゴフ経由でキエフへ向かおうとしたことになる。

414) 「侍従官」(покладник) については用例が少なく詳細は不明だが、主君の身の回りを世話をする後代の「寝殿官」(постельник) に相当するとされている。

415) 「ボリス・ザハーリチ」(Борис Захарьич) はキエフの在地貴族で、この時にも、キエフ公であるロスチスラフ [D116:J] に仕えて、ノヴゴロド行きに同行していた。その後の年代記記事でも、キエフ公に勤務する高官として何度か言及されている。

416) 臨終の際の、いわゆる「終油の秘蹟」(елесошьяение) の儀式を聴罪司祭が執行することを意味している。

深き女宰よ【532】、その慈しみをもって、罪深い僕であるわたし、ミハイル⁴¹⁷⁾を憐れみ給え。その尊い衣で護り給え。どうか、あなたによって肉体を得た神に頼んで下さい。わたしに、われらの見えざる敵、見える敵に打ち勝つための、天上からの力を与えるように。おお、すべてに慈しみ深き聖母よ、わたしを罪の深みから引き上げ、わたしの心の眼に光を当て、あなたの罪深い僕であるわたしを救い給え。われらが神キリストの国を、あなたが、父と子と聖霊とともに〔救われるように〕。

それからまた、かれ〔ロスチスラフ〕は、創造主御自身のイコンに目をやり、目から涙を流しながら、静かな声で語り初めた。「主よ、今こそ、あなたの僕たる〔わたしを〕、お言葉どおり安らかに去らせ給え⁴¹⁸⁾」。

横たわっていたかれのこめかみに、真珠の粒のような涙が見えた。その涙を布で拭きながら、かれ〔ロスチスラフ〕はこの世を去った。3月14日のことだった⁴¹⁹⁾。21日⁴²⁰⁾に、かれの父の修道院の聖テオドロス〔教会〕に埋葬された。自分の父祖の仲間に加えられたのである⁴²¹⁾。キエフで公として支配したのは、50年⁴²²⁾を1ヶ月欠ける期間だった。

417) 「ミハイル」はロスチスラフ [D116:J] の洗礼名。[Литвина, Успенский 2006: С. 600-601]

418) このロスチスラフ [D116:J] の言葉は、『ルカ福音書』2:29の文言からの借用。

419) 1167年3月14日のこと。『ラヴレンチイ年代記』6675(1167)年の並行記事には3月21日の日付が記されているが、これは、『イパーチイ年代記』にあるキエフにおける埋葬の日を転記したものでしょう。ベレジコフによれば、この部分は通常の紀年にくらべて、2年後ろにずれている [Бережов 1963: С. 67]

420) ザループ (Заруб) で没したロスチスラフ [D116:J] の遺体をキエフまで移送するのに7日かかったことになる。

421) この「自分の父祖の仲間に加えられた」(приложився к отцем своим)の文言は、旧約『士師記』2:10の句に由来しているが、『原初年代記』1093年のイジャスラフ公 [B] の死のエピソードで、同じ文言が用いられており [ロシア原初年代記: 238頁]、その後も諸公の死に関する記事で使われている。

422) この個所は、『イパーチイ年代記』のすべての写本が「50年」となっているが、これは文字による数字表記の際の転記ミスによるもので、8の数値を表す $\cdot\tilde{н}$ の文字が、誤って50の数値を表す $\cdot\tilde{л}$ に転記されたことによると考えられる。実際、1159年4月12日のロスチスラフ [D116:J] のキエフ入城 (上注118) から1167年3月の死亡までに期間は7年11ヶ月であり、これはまさに「8年を1ヶ月欠ける」期間に相当する。

なお、『ラヴレンチイ年代記』6675(1167)年の並行記事には、「キエフを治めること9年」とあるが、これは、1159年から1167年まで年数を積算した数字だろう (([ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 353][スズダリ年代記訳注 [IV]: 15頁]))。

この年の冬⁴²³⁾、オレーグー族⁴²⁴⁾が、ポロヴェツ討伐の遠征をした⁴²⁵⁾。この年は非常に厳しい冬だったからである。オレーグ [C431] は、コザ⁴²⁶⁾ (Коза) 一族の幕営地を襲って、その妻女と子供たちを捕獲し、金銀を掠奪した。ヤロスラフ⁴²⁷⁾ [C412] は、ベグリユク⁴²⁸⁾ (Беглюк) の幕営地を掠奪した。〔二人は〕、神といとも淨き聖母を讚美しながら、帰還した。

6677 [1169] 年

ロスチスラフ [D116:J] の死後、兄たち、すなわちウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115]、リューリク [J2]、ダヴィド [J3] は、ムスチスラフ [I1] を呼ぶための使者を派遣した⁴²⁹⁾。キエフ人も独自に使者を〔ムスチスラフのもとへと〕派遣した。黒頭巾族も独自に使者を派遣した。

ムスチスラフ [I1] は、自分より先に、ヴワディスワフ・【533】 ヴォロティスラヴィチ⁴³⁰⁾

423) 1166/1167 年の冬を指している。

424) この「オレーグー族」(Олговичи)の「オレーグ」は、オレーグ・スヴァトスラヴィチ [C4] を指しているが、実際には、スヴァトスラフ・ヤロスラヴィチ [C] の末裔(一族)を広く意味している。

425) プレトニョーヴァによれば、この「オレーグー族」の二人の侯の共同遠征は、オスコル(Оскол)川左岸地帯(Заосколье)(北ドネツ川とドン川の間)まで進出したと推定している。[Плетнева 1990: С. 151]

426) 「コザ」(Коза)は、当時のドン河畔ポロヴェツ人連合の首長。6688(1180)年の項(実際は1181年夏と推定される)のドニエプル川の戦いで戦死したポロヴェツ人の中に「コゼル・ソタノヴィチ」(Козел Сотанович)という侯(князь)の名が挙がっているが、これと同一人物と考えられる[Плетнева 1990: С. 152]。なお、この人物については、『イーゴリ軍記』で言及されている「グザク」(Гзак, Гза)に同定する説もあるが(例えば[Goranin 1994: p. 174, n. 33])、論拠に乏しい。

427) ヤロスラフ [C412] は、城市スタロドゥーブの支配をめぐるオレーグ [C431] と紛争になったが、まもなくチェルニゴフ公スヴァトスラフ [C411:G] の仲介によって和解している(上注 359 参照)。ここで共同遠征を組織したことを見ると、その後は同盟関係に入ったと思われる。

428) この「ベグリユク」(Беглюк)は、6671(1163)年の記事にある、リューリク [J2] の岳父であるポロヴェツの首長(侯)「ベルーク」(Белук)と同一人物(上注 312 参照)。ドニエプル下流域沿岸に展開していたと推定される。[Плетнева 1990: С. 151-152]。

429) 年長制序列(старшинство)によれば、当時ヴォルィニのヴラジミルの公座に就いていたムスチスラフ [I1] が「年長」であることから(ウラジーミル [D115] は大ムスチスラフ公 [D11] の後妻の息子であることから除外された)、亡きロスチスラフ [D116:J] の息子たちも、キエフをムスチスラフ [I1] に譲り渡すことについては合意されており、そのためかれをキエフに招聘したのだろう。

430) 「ヴワディスワフ」は、ロスチスラフ [D116:J] に仕えていたポーランド人貴族。上注 366 を参照。ロスチスラフの死に伴ってその息子ではなく甥のムスチスラフ [I1] に臣従しているのは不思議である。ムスチスラフ [I1] 自身がポーランド王ボレスワフ 3 世の娘アグネシカと 1151 年頃に結婚していることから[Balzer 1895: S. 183]、そちらの関連でムスチスラフ [I1] への勤務換えをしたものか。

(Володислав Воротиславич)を〔使者として〕、ヴァシリコ・ヤロポルコヴィチ⁴³¹⁾ [I31]のもとに派遣して、自分が到着するまでは、キエフの〔公座〕に就いているよう命じた。さらに、一人の配下の家令⁴³²⁾を〔キエフへと〕派遣した。

〔キエフにおける〕ムスチスラフ [I1]の支持者たちが、ヴァシリコ [I31]とヴワディスワフにこう言い始めた。ウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115]と〔ウラジーミル・〕アンドレエヴィチ [D181]、ムスチスラフ [I1]の弟ヤロスラフ [I2]、リユーリク [J2]とダヴィド [J3]〔等諸公〕は、お互いに十字架接吻〔の誓いを交わして〕、ムスチスラフ [I1]から、自分たちが欲しいだけの領地を獲ろうとしている。すなわち、ウラジーミル [D115]は自分の領地に加えて⁴³³⁾トルチェスク⁴³⁴⁾ (Торцький)とロシ川流域 (Поросье)のすべての〔城市〕を、〔ウラジーミル・〕アンドレエヴィチ [D181]はベレスチエ⁴³⁵⁾ (Берестий)を、ヤロスラフ [I2]はヴラジミル〔の城市〕を獲ろうとしていると言うのである。

ヴァシリコ [I31]は、かれら〔諸公〕の目論見を察知して、ヴラジミルにいるムスチスラフ [I1]のもとに使者を派遣して、かれらの言葉をすべてかれ〔ムスチスラフ〕に明らかにした。

ムスチスラフ [I1]は、自分に忠誠を誓った〔異族の〕者たち⁴³⁶⁾、ガーリチのヤロスラフ [A1211]、ポーランド人、フセヴォロドコ [F11]の二人の息子⁴³⁷⁾〔ムスチスラフ [F113]とボリス [F111]〕のもとへと使者を派遣して、兄弟としての毅然とした意志を表明した。

そして、ムスチスラフ [I1]は、ポーランド人およびガーリチのヤロスラフ [A1211]と合流した。ムスチスラフ [I1]は、公座を獲得すべくキエフへと進軍を始めた。ヤロスラフ [A1211]は、5個のガーリチ人部隊を、かれ〔ムスチスラフ [I1]〕に与えた。ムスチスラフ・フセヴォロドコヴィチ [F113]とボリス・フセヴォロドコヴィチ [F111]は、かれ〔ムスチスラフ [I1]〕とともに〔進軍した〕。

431) ヴァシリコ [I31]は、ムスチスラフ [I1]の甥にあたり、ブジェスクにいたと想定される。当時ヴラジミル・ヴォルィンスキイにいたムスチスラフ [I1]よりもキエフの近くにおり、機動性があったことから、先ず甥をキエフに派遣したのだろう。

432) 「家令」(тиун)とは、公や貴族のための徴税などの経済活動を代行していた上級の役人のこと。

433) 当時、ウラジーミル [D115]はトレポリとその周辺の諸城市を所領としていた。

434) トルチェスクは、キエフから南方約 80km に位置するドニエプル川右岸支流のロシ川左岸の城市。

435) 「ベレスチエ」(Берестье)は、ヴラジミルからおよそ 120km 北に位置するブグ川沿いの都市。現在のベラルーシのプレストに相当する。

436) 以下に示されているベレンディ人、トルク人、ペチェネグ人などの「黒頭巾族」たちを指している。

437) フセヴォロドコ [F11]の二人の息子のムスチスラフ [F113]とボリス [F111]は、当時グロドノに座していた。

かれらは、ミクーリン⁴³⁸⁾ (Микулин) まで達すると、そこへ、ベレンディ人の全軍、トルク人、ペチェネギ人、すべての黒頭巾族がやって来た。〔ムスチスラフ [I1] は〕かれらに〔忠誠を誓わせる〕儀式を行った。そして、〔ムスチスラフ [I1] は〕自分の兄弟⁴³⁹⁾ にベレンディ人を率いさせて、先行して進軍させ、自分はその後から進軍して行った。

その時、ウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] は、妻子を連れてトレボリを出て、ヴィシエゴロド⁴⁴⁰⁾ へと向かっていた。【534】 その日に、ムスチスラフ [D11] の未亡人で、かれ〔ウラジーミル [D115]〕の母親⁴⁴¹⁾ もまた、ヴィシエゴロドへと向かっていた。

ヤロポルク [I3] はベレンディ人を引き連れて⁴⁴²⁾、ジェリヤニ (Желянь) 川のダブルイ・ドゥーブ⁴⁴³⁾ (Добрий Дуб)〔村のところで〕ウラジーミル [D115] に追いついた。しかし、ベレンディ人は、かれら〔ウラジーミル [D115] の軍勢〕と射撃を交わさなかった。なぜなら、ベレンディ人が〔怖じ気づいて〕逃げを打ったからである。すなわち、ベレンディ人は、かれら〔ウラジーミル [D115]〕

438) ミクーリンは、ドニエストル川左岸支流セルト川河岸に位置し、テレボリから近く 10km ほど上流 (北) にある城市。現在のミクーリツィ村 (Микулинці) に相当する。ヴラジミルとガーリチの中間地点にあり、部隊を合流させるには適した立地である。ここからキエフまでは、まだ 370km ほど離れている。

439) この「自分の兄弟」(брат свой) は、ヤロポルク・イジャスラヴィチ [I3] を指しており、かれはブジエスクからキエフに向けて出発した。

440) 年代記には言及はないが、このときにヴィシエゴロドは、キエフ公ロスチスラフ [D116:J] の手によって、誰かかれの息子が拠点として公支配をしていたのではないか。後の推移を見ると、この時点ですでに、リューリク [J2] とダヴィド [J3] はヴィシエゴロドに陣を構えて、ロスチスラフ [I1] 勢の動向をうかがっていたと思われる。

441) ウラジーミル [D115] の母親については、1158 年の記事で、ムスチスラフ [I1] の手で捕らえられてルチェスクに連行されたという記録があるが ([イパーチイ年代記 (5) : 292 頁, 注 361]), その後、息子のウラジーミル [D115] とともに行動して、かれが、トレボリに移ったときには同行したのだろう (上注 304 参照)。

442) ヤロポルク [I3] とベレンディ人は、ブジエスクから長路遠征して、キエフ近くまで接近していたことになる。

443) 「ダブルイ・ドゥーブ」(Добрий Дуб) (イパーチイ写本は Доброгубуж) は、キエフから南西に 8km ほど離れたジェリヤニ川 (Желянь) が、ベルゴロドへ向かう街道と交わる地点にある村の名前。

軍]の後を、フセヴォロド [C41]の修道院⁴⁴⁴⁾まで馬で進んで行った。そこからヤロボルク [I3]は方向転換して、[キエフの]城市へ入城した。

翌日⁴⁴⁵⁾、ムスチスラフ [I1]は、かれ [ヤロボルク [I3]]の後を追って、キエフへと向かった。かれ[ムスチスラフ]は自分の部隊に命じて、ヴァシリコ [I31]が行った道を進ませた。こうして、[ムスチスラフ [I1]は]オレーグの墓⁴⁴⁶⁾まで行き、キエフに入城した。

すると、キエフ人はみな城を出て [ムスチスラフを出迎えた]。[ムスチスラフ [I1]は]兄弟たち、従士たち、キエフ人たちと約定を結んだ。その日のことだった。[ムスチスラフ [I1]は]キエフ人を率いて、ヴィシエゴロドへと軍を進め、ベレンディ人には [ヴィシエゴロドへの]襲撃を命じた。かれらは、ドニエプル川の岸辺の低地⁴⁴⁷⁾にあるダヴィド [J3]の千人長ラディオ⁴⁴⁸⁾ (Радио)の館に火をかけた。他に7つの館も燃やした。

ムスチスラフ [I1]は、[ヴィシエゴロドに]到来すると、松林から高地にかけての一带⁴⁴⁹⁾に布陣した。歩兵部隊は土塁の間に配置した。ベレンディ人たちは、ひとりのウラジーミル [D115]の家臣を殺害した。相手方も、ベレンディ人の有力者たちを殺害した。

その日は金曜日だった。翌日の土曜日⁴⁵⁰⁾に戦闘が始まり、[ヴィシエゴロドの]城市への攻撃がなされた。城市からも出撃があり、激しく戦った。

結局、リューリク [J2]、ダヴィド [J3]、ウラジーミル [D115]とムスチスラフ [I1]の間で使者

444) キエフの丘から北西へ2kmほどのところにあるキリル修道院 (Кирилловский монастырь) を指している。この修道院については、この個所が初出であるが、キエフの公座に就いていたフセヴォロド・オリゴヴィチ [D41]の洗礼名がキリル (Кирилл) であることから [Литвина, Успенский 2006: С. 504-505], かれの在位 (1140-1146年)に創建されたと推定されている。そのため「フセヴォロドの修道院」(Всеволожь монастырь)と呼ばれたのだろう。

なお、ゴラニンのポーランド語訳注では、この「フセヴォロド」をフセヴォロド・ヤロスラヴィチ [D]として、この修道院はかれが11世紀末に創建したヴィドビツキ修道院 (Выдубицкий монастырь) のことと解釈している [Goranin 1994: p. 175, n. 12]。しかし、この修道院は、ダブルイ・ドゥープからヴィシエゴロドへ向かう行路からは外れており、その可能性は低い。

445) ムスチスラフ [I1]のキエフ入城の日 (1167年5月15日月曜日、下注452参照) から逆算すると、5月12日に相当する。

446) 「オレーグの墓」(Ольгова могила) はキエフの丘の北西に隣接するシチェコヴィツァの丘 (Щековица) にあったと推定されている。

447) キエフとヴィシエゴロドの間には、ドニエプル=ポチャイナ川河岸一帯の低地 (большое, оболонье) が広がっていた。

448) 当時ダヴィド [J3]はヴィテプスクで公支配をしていたが、父親のキエフ公ロスチスラフ [D116:J]から、ヴィシエゴロドを所領として受けており、そこに代官として配下の千人長ラディオ (Радио) を派遣していたのだろう。

449) 河岸とは反対側の高台から、すなわち西側からヴィシエゴロドを包囲しようとしたことになる。

450) 1167年5月13日の土曜日に相当する。

が交わされて、領地についての話し合いが始まった。そして、領地について合意がなされ、十字架接吻⁴⁵¹⁾がなされた。

ムスチスラフ [I1] は、月曜日にキエフに入城した⁴⁵²⁾。【535】

イジャスラフ [D112:I] の子、ムスチスラフ [I1] のキエフにおける公支配の始まり。

ムスチスラフ [I1] は城市に入城した。5月19日のことだった⁴⁵³⁾。かれはヤロスラフの座⁴⁵⁴⁾、自分の父、自分の父祖たちの公座に就いた。

さて、ウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] は、ムスチスラフ [I1] に対する策謀を練り始めた⁴⁵⁵⁾。その時、ダヴィド [J3] の家臣の一人ヴァシーリイ・ナスターシチ (Настасичь) が、〔ウラジーミル [D115]〕のもとに居た。かれ〔ヴァシーリイ〕は、自分の公〔ダヴィド [J3]〕に〔策謀について〕告げた。ダヴィド [J3] はそのことを、兄弟のムスチスラフ [I1] に明らかにした。ウラジーミル [D115] は、自分の策謀がムスチスラフ [I1] に明らかにされたことを知ると、弁明のために〔キエフへと〕やって来た。

ムスチスラフ [I1] は洞窟修道院にやって来た。そのあとから、ウラジーミル [D115] もやって来た。〔ムスチスラフは〕、かれ〔ウラジーミルに〕食料系の庵室に着座するよう命じ⁴⁵⁶⁾、自分は典院⁴⁵⁷⁾の庵室に場所をとった。

そして、ムスチスラフ [I1] はかれ〔ウラジーミル〕に使いを遣って言った。「兄弟よ、何のためにそなたは来たのか。わしは、そなたを呼び出した覚えはない」。すると、ウラジーミル

451) この約定によって、ムスチスラフ [I1] がキエフの公座に就き、リューリク [J2]、ダヴィド [J3]、ウラジーミル [D115] 等もある程度はそれまでの領地を保持することができた。

452) 次注にあるように、1167年5月15日のこと。月曜日に当たっている。

453) 1167年5月15日のこと。『ノヴゴロド第一年代記』では、6675(1167)年の最初の記事に、ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] のキエフ公座就位について記されている [Новгородская первая летопись: С. 31, 218][ノヴゴロド第一年代記 XII: 26頁]。

454) 「ヤロスラフの座」(стол Ярославль) は、大ヤロスラフ公 [13] (在位 1019-1054年) を指していると考えられることもできるが、この表現でキエフの公座を示したことはこれまでなく、また、文脈から判断すると、前のキエフ公 [D116:J] を指す「ロスチスラフの」(Ростиславль) を後代の編集者が誤って「ヤロスラフの」(Ярославль) と挿入したと考えるべきだろう。

455) ウラジーミル [D115] は、ムスチスラフ [I1] との協定のあとも、ダヴィド [J3] とともに、ヴィシェゴロドに残っていた。「策謀を始めた」(нача думати) とは、キエフの公座を略取する計画のことで、以下の記述を見ると、ムスチスラフ [I1] の謀殺も狙っていた可能性がある。

456) 「食糧係」と訳出したのは иконом という語で、修道院で賄いを担当する修道士のこと。ムスチスラフ [I1] は、自分が典院の僧庵に座り、ウラジーミル [D115] を食糧係の僧庵に座させることで暗に自身の方が上位にあることを示そうとしていたと思われる。

457) 洞窟修道院の典院はポリカルブを指している。上注 408 参照。

[D115]は、〔修道院の〕堂役⁴⁵⁸⁾イモルムイジ(Имормыж)を使いとして派遣して、こう言った。「兄弟よ、悪人たちがわしを誹謗しているとの噂を聞いたのだ」。ムスチスラフ [I1]は言った。「兄弟のダヴィド [J3]が、わしに教えてくれたのだ」。

そこで、ヴィシェゴロドのダヴィド [J3]のもとに〔問合せの〕使者が派遣された。ダヴィド [J3]は、係争の〔証人とする〕ためにヴァシーリイ⁴⁵⁹⁾を派遣した。かれには、千人長ラディオ⁴⁶⁰⁾(Радио)とヴァシーリイ・ヴォルコヴィチ⁴⁶¹⁾(Волкович)を同行させた。

ムスチスラフ⁴⁶²⁾ [I1]は、3日間待った。そして、〔ヴァシーリイが〕洞窟修道院に到着した。ウラジーミル [D115]も、自分の家臣であるラグイロ⁴⁶³⁾(Рагуйло)とミハリ⁴⁶⁴⁾(Михаль)を〔キエフへと〕派遣した。ヴァシーリイとの論争が始まった。ヴァシーリイ側の証人【536】として、ダヴィド・ボルニチ(Борынич)が呼び出された。

ムスチスラフ [I1]は、この〔判決を〕神判にゆだねることにして⁴⁶⁵⁾、ウラジーミル [D115]に言った。「兄弟よ、そなたは十字架に接吻して〔誓った〕⁴⁶⁶⁾。まだそなたの唇は乾いていない⁴⁶⁷⁾。しかしまた、われらの父たち、われらが祖父たち〔が共通であることを〕確認したではないか。これに違反した者は、神がその者を裁くであろう。今は〔新たに〕、そなたがわしに対して策謀をなさなかったということを、また、わしに悪しきことを企てないということを、十字架に接吻して〔誓う〕がよい」。

(ウラジーミル [D115]は言った。「兄弟よ、喜んで接吻して〔誓おう〕。すべては、わしを貶めようとする嘘なのだから」。こうして、〔ウラジーミル [D115]は〕十字架に接吻して〔誓った〕⁴⁶⁸⁾。ムスチスラフ [I1]は、かれ〔ウラジーミル [D115]〕をコテルニチ(Котелнич)へと退

458) 「堂役」(дьячк)は、教会や修道院の雑務を行う奉公人で、聖職者ではない。

459) 上記の、ダヴィド [J3]の家臣ヴァシーリイ・ナスタシチのこと。

460) ダヴィド [J3]の千人長ラディオについては、上注 448 を参照。

461) 「ヴァシーリイ・ヴォルコヴィチ」(Василий Волкович)は、ダヴィド [J3]の側近貴族。

462) 「ムスチスラフ」の語はイパーチイ写本にはなく、フレーブニコフ写本から補った。

463) 「ラグイロ」(Рагуйло)は、ウラジーミル [D115]に勤務する千人長。1147年の記事にその名が見えることから、長年仕えていた側近だったことがわかる。〔イパーチイ年代記(3):351頁、注123〕参照。

464) 「ミハリ」(Михаль)もまた、1147年の記事に、「ミハイル」の名で、おそらくはウラジーミル [D115]配下の貴族の名として記されており、これと同一人物であろう。〔イパーチイ年代記(3):353頁、注133〕参照。

465) それまでは証人を召喚するなど、係争(裁判)の手続きが進んでいたが、ここでムスチスラフ [I1]は、法(правда)に則った世俗的な裁き(суд)を行うのではなく、以下にあるように、ウラジーミル [D115]に再度十字架接吻を行わせる(神判)ことによって、策謀の一件をひとまず解決しようとしたのである。

466) ムスチスラフ [I1]がキエフに入城する直前の領地に関する約定とその遵守の誓いを指している。上注 451 参照。

467) 「そなたは自分の誓ったことを覚えているはずである」という意味の修辭的な表現。

468) 丸括弧内のテキストは、イパーチイ写本にはなく、フレーブニコフ写本から補った。

去させた⁴⁶⁹⁾。

この年⁴⁷⁰⁾、ウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] は、十字架〔接吻の誓い〕に違反した。そして、かれのところ、チャゴル一族 (Чагровичи) のチェクマン (Чекъман) とその兄弟のトシマン (Тошман)、そしてモナチュク⁴⁷¹⁾ (Моначюк) が使者を派遣してきた⁴⁷²⁾。

ウラジーミル [D115] は、かれらの策謀を喜び、ラグイロ・ドブリニチ (Рагуйло Добрыничъ)、ミハリ (Михаль)、ザヴィド (Завид) 等⁴⁷³⁾ にも使者を遣って、かれらに自分の策謀を明かした。

かれ〔ウラジーミル [D115]〕の従士たち⁴⁷⁴⁾ は、かれに言った。「公よ、あなたは自分だけではかりごとを考えている。われらは、あなたについて行かない。われらは、そのことについて知らないのだから」。ウラジーミル [D115] は、下級従士たちの方を見て、こう言った。「見よ、この者たちがわしの貴族となるだろう⁴⁷⁵⁾」。

こうして、かれ〔ウラジーミル [D115]〕はベレンディ人のもとに行き、ロストヴェツ⁴⁷⁶⁾

469) 「コテルニチ」 (Котелничъ) は「コテルニツァ」とも言い、キエフから約 120km 南西のキエフ公領とヴォルニ公領の境界地帯に位置する城市。現在のスタラ・コテリニヤ (Стара Котельня) 村に相当する (上注 249 参照)。キエフからはかなり遠方にあり、ムスチスラフ [I] は潜在的な敵である叔父を遠方に追いやったことになる。

470) 1167 年夏~秋と推定される。

471) ここに列挙されている人名はすべて初出だが、以下の事件の進展から見ると、ウラジーミル [D115] が同盟を結んでいた、ベレンディ人の首長たちの名前であろう。次の記述にあるように、ウラジーミル [D115] は、ベレンディ人の部族を糾合して、キエフへと軍を進める策謀を行っていた。

なおこれについて、『ラヴレンチイ年代記』 6676(1168) 年の記事の冒頭には、「ムスチスラフ [I] は、ウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] をキエフから追い出した。ウラジーミル [D115] はポロヴェツ人のもとへ行つた」と簡単にウラジーミル [D115] の動向を記している。ここの「ポロヴェツ人」は「ベレンディ人」の誤りと見るべきだろう。

472) 『ヴォスクレセンスカヤ年代記』の並行記事 (6677(1169) 年) では、「そして『われらはあなたを味方にする』と言った」 (глаголюще: «мы тебе приемъ») という文言が付け加わっている。

473) 「ラグイロ」と「ミハリ」については、上注 463, 464 を参照。「ザヴィド」 (Завид) については初出だが、前の二人同様に、ウラジーミル [D115] に勤務する在地の貴族だろう。この三人は、キエフに近いヴィシエゴロドの領地に残ってことから、ウラジーミル [D115] はコテルニツァからかれらに宛てて使者を派遣したのである。

474) この「かれの従士たち」 (дружина его) は、在地の上級従士の貴族たちを指しており、公との関係では独立した立場を保持することができた。

475) この言葉は、自分の企図に反対する従士 (貴族) たちに向かって、それでは直接自分に勤務している下級の従士 (детские) を貴族にとりたてて、かれらを伴っても戦うつもりであるという決意の表明と解釈することができる。

476) 「ロストヴェツ」 (Растовец; Ростовиц) 川はロシ川の支流で、ベレンディ人の居住地域だった。ウラジーミル [D115] がいたコテルニツァからだと、40 ~ 50km ほど北へ行った場所になる。

(Растовец) 川下流でベレンディ人と合流した。かれら〔ベレンディ人〕は、公〔ウラジーミル〕がひとりだけで⁴⁷⁷⁾ やって来たのを見て、かれに言った。「あなたは、われらに、『兄弟〔諸公〕たちも、みな自分と一緒にである』と言っていたではないか。いったい、ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181]、ヤロスラフ [I2]、ダヴィド [J3] はどうしたのか。見よ、あなたはひとりだけでやってきて、自分の家臣たちも連れてはいない。われらを騙したのだ。われわれは、仲間が〔弓で〕撃たれるよりも、異族の者を〔弓で撃った〕ほうがほうがました。〔こう言うと〕、かれら〔ベレンディ人〕は、かれ〔ウラジーミル [D115]〕に向かって射撃を始めた。2本の矢が公〔ウラジーミル [D115]〕に当たった。【537】

公〔ウラジーミル〕は言った。「ああ、いかなるときでも邪教の者どもを信じるのではなかった。わしは、もはや魂も財産も失ってしまった」。かれ〔ウラジーミル [D115]〕は逃げ出した。かれに付き随っていた下級従士たちは撃ち殺された。かれ〔ウラジーミル [D115]〕自身はドロゴブージ⁴⁷⁸⁾ (Дорогобужь) へと逃れた。かれの妻も先んじてそこへ逃れていた。〔ウラジーミル・〕アンドレエヴィチ [D181] は、ゴリニ (Горинь) 川の橋を落として⁴⁷⁹⁾、かれ〔ウラジーミル [D115]〕を自分のところに通そうとしなかった。

そこで、かれ〔ウラジーミル [D115]〕は、ラディミチ⁴⁸⁰⁾ (радимичи) の地へと方向を転換して、スーズダリのアンドレイ [D173] のもとへと向かった。アンドレイ [D173] は、自分のもとに来ようとしているかれ〔ウラジーミル [D115]〕に対して使者を遣って、言った。「リャザンの、自分の〈父〉である、グレーブ [C542:H] のもとに⁴⁸¹⁾ 行かれよ。わしは、そなたに〔領地を〕分け与えよう」。そこで、〔ウラジーミル [D115]〕は、そこへ向かって行った。妻と息子たちは、

477) 他の公たちやその軍勢を伴わず、という意味。

478) 「ドロゴブージ」(Дорогобужь) は、ゴリニ川 (Горинь) 中流左岸に位置するヴラジミル公領の中の主要城市の一つ。現在も同名のドロホブージ村に相当する。ロストヴェツからだど 230km ほど西北に移動したことになる。

479) ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] は、当時、ゴリニ川右岸に位置するベレソプニツァに座していた (上注 280 参照)。ベレソプニツァとドロゴブージの間はゴリニ川を挟んで 43km ほどしか離れておらず、ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] は、ウラジーミル公 [D115] の来襲を恐れて、橋を落としたのである。

480) 「ラディミチ」(радимичи) は、ソジ (Сож) 川流域を居住地とするスラヴ人の古い部族名だが、以下の記述にあるように、ウラジーミル [D115] が、グルーホフを経由してリャザンの地へ向かったとするならば、これは「ヴァティチ」(вятичи) の地の誤記である可能性もある。あるいは、デスナ川＝ウグラ川経由 (上流域にはラディミチ人が居住している) でオカ川に入ったのかもしれない。

481) グレーブ [C542:H] は、1145～1147、1159～1177 年の間リャザンの公。「自分の父」(отчиць свой) の解釈は難しいが、マフノヴェツの注釈によれば、グレーブはかれはウラジーミル [D115] にとって洗礼の際の代父だったのでこのように呼ばれているという。

グルーホフ⁴⁸²⁾ (Глухов) のフセヴォロド [C41] の未亡人⁴⁸³⁾ のもとに残していった。

ムスチスラフ [I1] は、ウラジーミル [D115] の母親⁴⁸⁴⁾ にこう言った。「ゴロドク⁴⁸⁵⁾ へ行き、そこから好きな場所へ行かれよ。わしは、そなたと、同じ場所に住むことはできない。なぜなら、そなたの息子が、十字架〔接吻の誓い〕に背いて、常にわしの生命を狙っているのだから」。かの女はチェルニゴフの〔スヴァトスラフ・〕フセヴォロドヴィチ [C411:G] のもとに行った⁴⁸⁶⁾。

この年、ノヴゴロド人は、屋内で密かに民会を開いて、自分たちの公であるスヴァトスラフ・

482) 「グルーホフ」(Глухов) は、デスナ川とセイム川に挟まれ、プチヴリから北へ約 37km の地点にあったチェルニゴフ公領の城市。現在のウクライナの「フルーヒウ」(Глухів) に相当する。[イパーチイ年代記 (5): 249 頁, 注 134]。スヴァトスラフ [C411:G] は、母親にこの城市を所領として与えて、住まわせていたのである。次注参照。

483) 1120 年頃にフセヴォロド [C41] に嫁したムスチスラフ [D11] の娘マリアのこと。かの女は当時まだ存命で、1179 年に没している。かの女は、当時のチェルニゴフ公スヴァトスラフ [C411:G] の母親であり、ウラジーミル [D115] にとっては腹違いの姉妹にあたる。

また、このことから、キエフ公ムスチスラフ [I1] に追われたウラジーミル [D115] は、チェルニゴフ公スヴァトスラフ [C411:G] の庇護も受けていたことが分かる。

484) 上注 441 参照。老齢のかの女は、ヴィシエゴロドに残ったまま、息子のウラジーミル [D115] の逃避行には同行しなかったことが分かる。

485) 「ゴロドク」(Городок) はデスナ川支流オステル川河口の城市で、立地から見て、チェルニゴフ公領へと退去することが含意されている。

486) ウラジーミル [D115] の母親は、チェルニゴフ公スヴァトスラフ [C411:G] にとって、母親 (マリア) の義理の母ということになる。そのような縁戚によって、スヴァトスラフ [C411:G] をかの女を引き受けたのだろう。同時に、ウラジーミル [D115] との間でもある程度と同盟関係を結んでいたことが想定できる。

ヤロスラヴィチ⁴⁸⁷⁾ [J4] に造反をし始めた⁴⁸⁸⁾。かれ〔スヴァトスラフ [J4]〕の支持者たちは、〔公が居住する〕城砦区⁴⁸⁹⁾ にやって来て、こう告げた。「公よ、民衆が夜中に民会を開いて、あなたを捕まえようと企んでいます。どうか、自分のことを配慮して下さい」。公〔スヴァトスラフ [J4]〕は、自分とかれら〔ノヴゴロド人〕についての通報を聞いて、そのことを自分の従士たちに伝えた。従士たちはかれ〔スヴァトスラフ〕に言った。「あなたの父〔ロスチスラフ [D116:J]〕の死後も、今までは、全員が十字架接吻をして、あなたに〔忠誠を誓って〕いました⁴⁹⁰⁾。しかし、いかなる公であれ、これに忠誠心を持たない者はいつでもいるものです。われらは自分たちのことを配慮しましょう。さもなければ、民衆がわれらのことを配慮してしまうでしょう」。【538】

6678〔1170〕年

神は、ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] の心に、ルーシの地に幸いあれとの思慮をお与えになった。なぜなら、かれ〔ムスチスラフ〕はすべての心をもって、それ〔ルーシの地〕に善を願ったからである。

487) 「ヤロスラヴィチ」は「ロスチスラヴィチ」の誤りである。これは、上注 454 の誤記と同じ性格であり、後代の『イパーチイ年代記』編集者の誤認にもとづくものだろう。

488) 1167 年夏のスヴァトスラフ [J4] のノヴゴロドの公座からの追放の経緯については、『ノヴゴロド第一年代記』6675(1167)年の記事で次のように記されている。すなわち、ノヴゴロド人の謀議を察知したスヴァトスラフ [J4] がルキに逃げ、ノヴゴロド人に向けて使者を遣って「自分はもはや公として座すつもりはない」と通告した。ノヴゴロド人もスヴァトスラフ [J4] の追放を決め、ルキへ軍隊を派遣した。これを知ったスヴァトスラフ [J4] は、スモレンスク公領のトロベツへ逃げ出し、そこから連水陸路を通ってヴォルガ川に入り、アンドレイ [D173] の援助を得て、ノヴゴロド領の商都ノーヴィ・トルグを焼き打ちした [Новгородская первая летопись: С. 32, 219][ノヴゴロド第一年代記 XII: 26 頁]、と言うものである。すぐあとの記事に「ノヴゴロド人はシメオンの日から復活祭まで、ムスチスラフ [I1] の息子〔ロマン [I11]〕の到着を待って、公を持たなかった」と記されており、「シメオンの日」(Смень день) は 9 月 1 日であることから [ノヴゴロド第一年代記 XII: 42 頁, 注 63]、スヴァトスラフ [J4] は 1167 年 8 月の末には最終的にノヴゴロドから追放されたことが分かる。

この追放劇は当然、1167 年 5 月のムスチスラフ [I1] のキエフ公座就位に連動しており、ノヴゴロド人としては、キエフ公ロスチスラフ [D116:J] が没したために、スヴァトスラフ [J4] からもはや確かな軍事援助が期待できなくなったのである。実際、キエフ人は、9 月頃にはムスチスラフ [I1] の息子ロマン [I11] をノヴゴロドの公座に招いている (下注 532 参照)。

489) ノヴゴロドの「城砦区」(городище)については上注 189 を参照。

490) スヴァトスラフの父ロスチスラフ [D116:J] が、死の直前にルキで行った十字架接吻のこと (上注 403, 404 参照)。ロスチスラフは、ノヴゴロドの人に対して、スヴァトスラフ [J4] の生涯に渡って公の地位を維持させることを誓わせた。スヴァトスラフの従士たちは、ノヴゴロドの住民がかれを公位から追放しようとしていることを、十字架接吻への違反として非難している。

かれは、自分の兄弟たちを呼び寄せると、かれらと協議を始め、かれらにこう言った。「兄弟たちよ、ルーシの地のことを気に掛けよ。自分たちの父の地、祖父の地のことを〔心配せよ〕。〔ポロヴェツ人どもは⁴⁹¹⁾〕キリスト教徒たちを、毎年のように自分の幕舎へ掠っていくではないか。かれらは、われらと誓約を交わしながら⁴⁹²⁾、いつもこれに違反している。かれらは、すでにギリシア商人⁴⁹³⁾の通商路、また塩商人⁴⁹⁴⁾やザロズィ商人⁴⁹⁵⁾の通商路ををわれらから奪い取ろうとしている。兄弟たちよ、われらは神の助けと、聖なる聖母に祈りを恃みとして、自らの父たち、自らの祖父たちの通商路と、自らの名誉を獲得すべきである」。

かれ〔ムスチスラフ [I1]〕のこの言葉は、なによりも神〔の御心〕に、また兄弟たちやかれらの家臣たちの心の適ったものだった。兄弟たちは皆、かれ〔ムスチスラフ〕に言った。「兄弟よ、どうか、神がそのような思慮を心にお与えになったことについて、神の助けがあなたにありますように。どうか、神よわれらを導き給え。われらもまた、キリスト教徒のため、ルーシの地のために、戦場に斃れ、いとも淨き殉教者の列に加われますように」。

かれ〔ムスチスラフ [I1]〕は、チェルニゴフのすべてオレーグ一族の諸公に対して、二人のフセヴォロドヴィチ〔スヴァトスラフ [C411:G] とヤロスラフ [C412]〕に対して使者を派遣して、全員が自分のもとに来るように命じた。その時、オレーグ一族の諸公はムスチスラフ [I1] の意志に服しており、全員がムスチスラフ [I1] の考えに同意していたからである。

こうして、すべての兄弟たちがキエフに集合した。すなわち、リユーリク [J3]、ダヴィド [J3]〔が来た〕。ヤロボルク [I3] も来たが、かれ自身は健康を損なっていた⁴⁹⁶⁾。スヴァトスラフ [C411:G] とヤロスラフ [C412] の二人のフセヴォロドヴィチも来た⁴⁹⁷⁾。オレーグ・スヴァトスラヴィチ

491) この文には主語はないが、文脈から見て明らかにポロヴェツ人を指している。

492) ドニエプル沿岸地方に展開するポロヴェツ人が、公が交替したときなどに、ルーシ諸公といわば相互不可侵の約定を交わしていることについては、〔イパーチイ年代記 (5) : 301 頁, 注 409〕を参照。

493) 「ギリシア商人」については上注 365, 392 を参照。ドニエプル川を航行して、ギリシア (ビザンティン帝国) 領地との間の交易品を運ぶ主要な交易路を行き来する商人を指している。

494) 「塩商人」(солоньи; солонщик) とは、ガーリチ公領で採掘された岩塩をドニエストル川を經由してクリミア半島へ運び、さらに河川水路、陸路によって、キエフを初めとするルーシ諸都市に運んでいた商人のこと [Кудряшов 1948: С. 103-109]。その通商路は、キエフとクリミア半島を結ぶ路ということになる。

495) 「ザロズィ商人」(залозныи) については上注 393 を参照。

496) この部分の読みと解釈は難しいが、以下の遠征の推移から見て、年代記全集 1843 年版 (初版) 校訂テキストの注釈者の見解にしたがって、ヤロボルク [I3] のことを指すと解した。[ПСРЛ Т.2, 1843: С. 98, прим. В]

497) ふたりのフセヴォロドヴィチはチェルニゴフから来たのだらう。

[C431]とその弟のフセヴォロド [C433] も来た⁴⁹⁸⁾。ヤロスラフ [I2] はルチェスクから来た。ヤロポルク⁴⁹⁹⁾ [I3], ムスチスラフ・フセヴォロドコヴィチ⁵⁰⁰⁾ [F113], スヴァトポルク・ユーリエヴィチ⁵⁰¹⁾ [B3213] も来た。**【539】** グレーブ [D178] はペレヤスラヴリからやって来た。その兄弟のミハルコ⁵⁰²⁾ [D175] も来た。その他にも大勢がやって来て、神の助けと尊い十字架の力、聖なる聖母の祈りを恃みとした。

かれらがキエフを出陣したのは、3月2日で大齋第二週の土曜日⁵⁰³⁾ のことだった。ムスチスラフ [I1] の兄弟、ヤロポルク・イジャスラヴィチ [I3] は、遠征の道中でひどく病みついたが、かれは〔ヤロポルク [I3]〕、自分の兄弟たちに遅れをとるのを望まなかった。トゥマシチ⁵⁰⁴⁾ に滞在していたとき、病気がひどくなった。ムスチスラフ [I1] が、カーネフを過ぎたところで「あなたの兄弟は重体である」との報告を受け取った。ムスチスラフ [I1] は、〔キエフの洞窟修道院の〕典院ポリカルプと自分の聴罪司祭ダニールに使者を遣って、兄弟のヤロポルク [I3] のところに行くように二人に命じて、こう言った。「もし、神がわしの兄弟を召すようなことがあれば、その遺体を布で包み、聖テオドロス教会⁵⁰⁵⁾ まで運ぶこと」。

イジャスラフ [D112:I] の息子ヤロポルク [I3] は、3月7日に逝去した。大齋第4週の木曜日のことだった⁵⁰⁶⁾。遺体は、かれの父親が葬られている聖テオドロス教会に埋葬された。

われらは以前の話に戻ろう。

こうして、諸公がキエフを発ってから9日が経った。ガヴリルコ・イジャスラヴィチ⁵⁰⁷⁾

498) オレーグ [C431] とフセヴォロド [C433] の兄弟はノヴゴロド・セヴェルスキイから来たと考えられる。

499) ヤロポルク [I3] は当時はブジェスク公。上注 384 参照。

500) ムスチスラフ・フセヴォロドコヴィチ [F113] は当時グロドノ公。(上注 437 参照)

501) スヴァトポルク・ユーリエヴィチ [B3213] は当時トゥーロフ公。(上注 300 参照)

502) この時、ミハルコ [D175] はトルチェスクの公座に就いていたと考えられる。

503) 1168年3月2日のことで、この日は土曜日に当たっている。原文の *середокрестная неделя* は「齋の真ん中の週」の意味で、通常は大齋 (*великий пост*) の第4週にあたるが、3月2日は第3週の土曜日にあたっている。

504) 「トゥマシチ」(Тумаш) は、ストウグナ川左岸に位置する城砦で、キエフにとって、南方からの外敵の防衛の拠点の一つだった。遠征軍がさらに目指したカーネフは、トゥマシチから南東へ約 100km 行った地点にある。[イパーチイ年代記 (4): 340 頁, 注 103] 参照。

505) 大ムスチスラフ [D11] 一族のいわば菩提寺である、キエフのテオドロス教会については、上注 406 を参照。ヤロポルク [I3] の父イジャスラフ [D112:I] の埋葬については、[イパーチイ年代記 (5): 269 頁, 注 223] を参照。

506) 1168年3月7日は確かに、大齋第4週の木曜日に当たっている。

507) この人物について詳細は不明だが、キエフの貴族と考えられる。かれに仕えていた、おそらくポロヴェツ人の捕虜奴隷 (*кощей*) の一人が逃亡して、ポロヴェツ人の部族に情報をもたらしたのである。

(Гаврилко Иславич)のもとから捕虜奴隷が〔逃げ出して〕、ポロヴェツ人たちのもとに、ルーシの諸公が、かれら〔ポロヴェツ人〕に向けて進軍しているという報告を届けた。〔ポロヴェツ人は〕女や子たちを見捨てて、逃げ出した。諸公は、ポロヴェツ人が逃げ出したこと、自分たちの婦女や荷車を見捨てたことを知った。そして、かれらを追いかけるため急ぎ出発した。荷車の近くに〔見張りのために〕、ヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ [C412] を自分たちのあとに残した【540】。

〔諸公は〕ウグラ⁵⁰⁸⁾川で、かれら〔ポロヴェツ人〕の幕舎を掠奪した、他の者たちは、スノポロド⁵⁰⁹⁾(Снопород)川で掠奪を行った。そして、自分たちは、黒い森⁵¹⁰⁾まで到達した。そこで、かれら〔ポロヴェツ人〕を森の中に追い詰め、撃ち殺し、他の者は生け捕りにした。バスチイ⁵¹¹⁾(Бастий)や他の多くの者は、かれら〔ポロヴェツ人〕を追いかけ、ヴォスコル⁵¹²⁾(Въсколь)川を越えたところで、かれらを撃ち破った。

非常の多くの捕虜を獲った。それは、ルーシのすべての兵の〔獲物が〕有り余るほどだった。拘留奴隷、女奴隷、その子供たち、奴隷⁵¹³⁾、家畜、馬などを獲得した。また、〔ポロヴェツの

508) 「ウグラ川」(Угла; Угол)は、現在のオレリ川(Орель)のこと。ドニエプル左岸支流で、河口はカーネフからだと270kmほど下ったところにある。すでにドニエプル河岸ポロヴェツ人の遊牧地帯に入っている。[イパーチイ年代記(5):256頁,注167]も参照。

509) スノポロド(Снопород)川は、現在のサマラ川(Самара)を指している。サマラ川はドニエプル左岸支流で、河口は現在のドニエプロ・ペトロウスクの場所に当たる。河口はウゴル川からさらに50kmほど下流に位置し、カーネフからだと300kmほどドニエプル川を下った場所にある。[イパーチイ年代記(5):256頁,注168]も参照。

510) 「黒い森」(Черный лѣс)は、北ドネツ川(Северный Денец)の左岸支流オスコル川(Оскол)(下注512参照)河口付近に広がる森林地帯を指している。現在のウクライナのハリコフ州イズユーム(Изюм)市の周辺に相当している。ルーシ諸公軍は、スノポロド川(サマラ川)を遡って最上流まで達したことになる。

511) 「バスチイ」(Бастий)は、キリスト教に回教したキエフ公に仕えるベレンディ人の軍司令官の名。かれが最も危険な前衛部隊を指揮したのだろう。ここが初出だが、以下に複数箇所が登場する。

512) 「ヴォスコル川」(Въсколь)は、現在のオスコル川(Оскол)のこと(上注510参照)。

513) ここに、奴隷とするために捕獲したポロヴェツ人を示す言葉が列挙されている。「拘留奴隷」(колодник)は「足枷」を意味する колод から作られた語で、反抗や逃亡を防ぐために足枷をほどこした男の奴隷のこと([イパーチイ年代記(5):263頁,注203]を参照)。「女奴隷」(чага)はチュルク語で「子供」を意味する語からの借用語で、若い女の奴隷を意味している[Словарь-СПИ 6:С.144]。「奴隷」(челядь)は、より一般的な意味で用いられ、使役したり売買することを目的に捕獲した捕虜奴隷のこと([イパーチイ年代記(3):332頁,注19]を参照)。

捕虜になっていた] キリスト教徒を解放し、全員を自由にした⁵¹⁴⁾。

しかし兄弟たち〔諸公〕は皆、ムスチスラフ [I1] に対して不満を抱いた。〔ムスチスラフ [I1] が〕自分たちに隠れて、自分の馬役⁵¹⁵⁾ や従者たち⁵¹⁶⁾ を夜半にこっそりと襲撃〔掠奪〕させたというのである⁵¹⁷⁾。かれら〔諸公〕の心はかれ〔ムスチスラフ [I1]〕を公正であると見なさなかった。

諸公は全員が集合して、自分の部隊を点検した。神の助けにより、全員が健在だった。ただ例外として、部隊全体の中から二人が殺されていた。それは、ヤルーン (Ярун) の兄弟コスチャチン・ヴァシーリエヴィチと、馬役のヤロスラフ・イジャスラヴィチだった。また、コスチャチン・ホトヴィチ (Ксвятин Хотович) は捕虜に獲られた⁵¹⁸⁾。

諸公は、慈悲深い神と尊い十字架の力を称賛して、大いなる喜びをもって帰還した。そして、〔復活祭の〕日曜日⁵¹⁹⁾ にはそれぞれの家郷へと戻った。人々にとって、喜びは二倍だった。復活祭と自分たちの公が勝利と喜びをもって帰郷したのだから。

その後しばらくして⁵²⁰⁾、ムスチスラフ [I1] は、自分の兄弟たち〔諸公〕を呼び寄せる使者を派遣した [541]。兄弟たちはみな、キエフのかれ〔ムスチスラフ [I1]〕のもとに集合した。ヤロスラフ [I3] はルツクから、ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] はドロゴブージから、リューリク [J2] はヴルーチイ⁵²¹⁾ から、ダヴィド [J3] はヴィシエゴロドから、イワン・ユーリエヴィチ [B3211] はトゥーロフからやって来た。

514) 1168年3月に行われた、このムスチスラフ [I1] の命令によるルーシ諸公のポロヴェツ討伐遠征については、『ノヴゴロド第一年代記』6675(1167)年の記事でも簡単に触れられている。「その年〔1167/1168年〕の冬、ムスチスラフ [I1] はポロヴェツ人に対して進軍して、かれらを打ち負かし、数え切れないほどの捕虜をルーシの国に連れて来た」[Новгородская первая летопись: С. 33, 220][ノヴゴロド第一年代記 XII: 27頁]。

515) 「馬役」(сьдельники) は、公に仕え馬や馬具の世話をする従者のこと。主に帰順した遊牧民がその役にあつた。

516) 「従者」(кощей) は、隷属民出身で公や貴族の身の回りに仕える従者のこと。[Словарь-СПИ 3: С. 16]

517) 遠征で掠奪した獲物は、参加した諸公の間で分配されるが、ムスチスラフ [I1] は兵士でもない直属の従者たちに命じて、密かに掠奪を行わせ、略奪品を独り占めしたということ。

518) ここに列挙されている、殺された2名と捕虜に獲られた1名についての詳細は不明だが、名と父称が併記されていることから、遠征した諸公に仕えていた軍司令官＝貴族を指していると考えられる。

519) 1168年の復活祭の日曜日は、3月31日に相当する。

520) 1168年夏の航海期を指している。

521) ヴルーチイ (Вручий) は、プリピャチ川左岸支流ウジ (Уж) 川左岸のドレヴリャネ族の地にある城市で、キエフからだと北西方向に約153kmほど離れている。現在のオヴルチ (Овруч) 市に相当する。ただし、リューリク [J2] は当時スモレンスク公であったはずであり、なぜ遠方のヴルーチイにいたか不思議である。

ムスチスラフ [I1] は、自分の兄弟たちにこう言い始めた。「見よ、兄弟たちよ、われらはポロヴェツ人に対して大いなる悪をなした。かれらの幕舎を掠奪し、かれらの子供たちを〔捕虜に〕獲り、〔馬の〕群れや家畜を〔掠奪した〕。そのために、かれら〔ポロヴェツ人〕は、われらのギリシア商人やザロズィ商人⁵²²⁾にさまざまな悪行を為している。ギリシア商人を出迎えるために出陣すべきであろう」。

すべての兄弟たちは、この言葉を気に入った。兄弟たちは、かれ〔ムスチスラフ [I1]〕に言った。「そのようになりますように。それは、われわれにとってもなすべき事であり、全てのルーシの地にとっても〔なすべき事である〕」。

こうして、進軍すると、カーネフで陣を張った。グレーブ⁵²³⁾ [D178] は、ムスチスラフ [I1] を自分のところに食事に招待した。そして、多くの贈物をかれ〔ムスチスラフ〕に与え、親愛をもってかれを送り出した。

太古から抜け目なく、すべてに狡い悪魔は、キリスト教徒たちの善や兄弟同士の親愛を望まなかった。こうして、ピョートル⁵²⁴⁾とネステル⁵²⁵⁾の二人のボリスラヴィチ〔の兄弟〕が、ダヴィド [J3] に対して、ムスチスラフ [I1] を中傷する讒言を行った。なぜなら、ムスチスラフ [I1] は、かれら二人を嫌悪して、二人を自分のもとから追い払ったからだだった。その理由は、この二人に仕える家僕⁵²⁶⁾が、ムスチスラフ [I1] が所有する馬群から馬を盗み、所有者の焼印を消して、自分たちの焼き印を押したからだだった。

ダヴィド [J3] は二人の言うことを信じて、自分の兄弟のリューリク [J2] に、そのことを告げた。「兄弟よ、二人の仲間⁵²⁷⁾がわたしに教えてくれた。ムスチスラフ [I1] は、われら二人を捕まえようとしていると」。

リューリク [J2] は言った。「兄弟よ、なにゆえに〔捕まえるの〕か。どんな理由があるのか。【542】以前に、かれ〔ムスチスラフ [I1]〕は、われら二人に〔仲間であることを誓う〕十字架接吻を

522) 〈ギリシア商人〉と〈ザロズィ商人〉については、上注 365, 392, 393 を参照。

523) グレーブ [D178] はペレヤスラヴリ公で、ムスチスラフ [I1] が布陣したカーネフは、ペレヤスラヴリからはドニエプル川を 20km ほど下った対岸にあった。

524) 「ピョートル・ボリスラヴィチ」(Петр Бориславич) については、イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] 配下のキエフ貴族として何度も言及されている。この時点では、イジャスラフの息子であるムスチスラフ [I1] の側近として仕えていたのだろう ([イパーチイ年代記(5):246 頁, 注 116] を参照)

525) 「ネステル・ボリスラヴィチ」(Нестер Бориславич) についてはここが初出だが、ピョートルの兄弟でやはりムスチスラフ [I1] の側近貴族だった。

526) 「家僕」(холопи) は、領主に仕え、屋敷などで労働する隷属民を指している。

527) ピョートルとネステルのことを指している。

したではないか⁵²⁸⁾」。二人〔ピョートルとネステル〕はまた、ダヴィド [J3] に次のようにも言っていた。「ムスチスラフ [I1] は、あなたたち二人〔ダヴィド [J3] とリューリク [J2]〕を食事に招待しようとしているが、そこで、あなたがたを捕らえようとしているのです。われらの、あなたがたへの言葉は正しいものです」。

ムスチスラフ [I1] は、これらのすべてを知らず、そのような企てを自分の心の中に持ってはいなかった。ただ、真の親愛をもって兄弟たちと接していた。そして、ムスチスラフ [I1] は、リューリク [J2] とダヴィド [J3] を食事に招待し始めた。リューリク [J2] とダヴィド [J3] は、かれ〔ムスチスラフ〕にもとに行かず、かれにこう言った。「どうか、われわれ二人に十字架接吻をして、われらに悪しきことを企まない事を〔誓って下さい〕。そうすれば、われら二人は、どんな場合でもあなたのもとに行きます」。

ムスチスラフ [I1] は、この企みに驚愕して、自分の従士たちにそのことを打ち明けた。「二人の兄弟が、わしに十字架接吻をするように要求してきた。わしは、何が自分の罪であるのかを知らない」。

かれ〔ムスチスラフ [I1]〕の従士たちはかれにこう言った。「公よ、二人の兄弟〔リューリク [J2] とダヴィド [J3]〕があなたに十字架接吻するように要求したのは、故なきことではありません。悪しき人間たちが、あなたが兄弟たちに示している親愛を羨んで、悪しき言葉を吹き込んだのでしょう。なぜなら、悪しき人間は悪鬼と比べても〔悪しき〕ものです。悪鬼が企まないことでも、悪しき人間は企むのです。あなたは、すべてについて、神の前でも、人間の前でも義しいのです。あなたは、われらの知らないところで、そのような〔悪事を〕企らんだり、行ったり出来たはずはありません。われらは皆、あなたがすべての兄弟たちに真の親愛を抱いていることを知っています。かれら二人〔リューリク [J2] とダヴィド [J3]〕に使者を派遣して、かれらにこう言いなさい。『わしは、そなたたちに悪しきことを企まないことを、十字架接吻をして〔誓おう〕。そなたたちも、われらに不和を煽った者を引き渡すのだ』と」。【543】

ムスチスラフ [I1] は、ダヴィド [J3] のもとに使者を派遣して、この言葉を伝えた。すると、ダヴィド [J3] は言った。「この者たちをわしが引き渡すようにと、誰が再びわしに言えるだろうか⁵²⁹⁾」。ムスチスラフ [I1] は、神の信義と尊い十字架の力に期待をかけて、かれら二人〔ダヴィド [J3] とリューリク [J2]〕に対して十字架接吻をして〔誓った〕。二人もまた、かれ〔ムスチ

528) ムスチスラフ [I1] がキエフに入城する直前になされた誓約のことを指している。上注 451 を参照。

529) このダヴィド [J3] の言葉は、おそらく使者に対する応えではなく、近臣に漏らした反語的な修辞疑問として理解すべきだろう。つまり、ダヴィド [J3] は近い将来に、ムスチスラフ [I1] を撃ち倒すので、密告者の引き渡しを求める者などいなくなるだろう、という意味になる。

スラフ〕に十字架接吻をして〔誓った〕。しかし、かれら〔二人の〕心は、かれ〔ムスチスラフ〕に対して義しくはなかった。

その頃、ウラジーミル・アンドレエヴィチ⁵³⁰⁾ [D181] は、ムスチスラフ [I1] に対して、領地を要求し始めた。ムスチスラフ [I1] は、欺くつもりでそのような要求をしていると判断して、こう言った。「兄弟ウラジーミル [D181] よ、そなたは以前に、わしに十字架接吻によって〔誓って〕、わしから領地を受け取ったではないか⁵³¹⁾」。かれ〔ウラジーミル [D181]〕はひどく怒って、ドロゴブージへと〔戻って〕行った。

その頃、アンドレイ・ユーリエヴィチ [D173] は、スーズダリを公として支配していた。かれは、ムスチスラフ [I1] に対しては親愛を抱いていなかった。

この年、ノヴゴロド人の使節がムスチスラフ [I1] にもとにやって来て、かれの息子を〔公として派遣するよう〕要請した。かれ〔ムスチスラフ〕はかれら〔ノヴゴロド人〕にロマン⁵³²⁾ [I11] を〔公として〕与えた⁵³³⁾。

兄弟たちのムスチスラフ [I1] への敵意はますます強くなった。兄弟たちは皆が、ムスチスラフ [I1] に敵対する言葉〔使者〕を交わし始めた。兄弟たちは、これについて、十字架〔接吻の誓い〕によって約束を固めた。

530) ウラジーミル [D181] は、当時ドロゴブージの公。

531) 1167年夏頃に、ムスチスラフ [I1] が、自分に反抗したウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] をドロゴブージから追放して、ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D118] にドロゴブージの領地を引き渡したこと（上注478を参照）を指していると思われる。おそらく、その際に十字架接吻の誓約が行われたのだろう。

532) ロマン [I11] についてはこの記事が初出。かれの生年は明確にはわかっていないが、1151年に死去したイジャスラフ [D112:I] の最初の妻が母親であるから、最も若くても1150年ごろの誕生ということになり、20歳に届くか届かないかの年齢であったと思われる。

533) ノヴゴロド人のキエフへの使節団派遣については、『ノヴゴロド第一年代記』6675(1167)年の記事に「ラズチンの子ダニスラフは従士たちを伴って、キエフのムスチスラフ [I1] のもとに、かれの息子を迎えに行った」と記されており、1167年9月～10月頃のことと想定される。また、ムスチスラフの息子ロマン [I11] のノヴゴロドの公座就位については6676(1168)年の記事の冒頭に「イジャスラフ [D112:I] の孫、ムスチスラフ [I1] の息子のロマン [I11] が公座に就くためにノヴゴロドに到着した。4月14日のことだった」とある。これは1168年4月14日のことである。

この年の冬⁵³⁴⁾、アンドレイ [D173] は、自分の息子ムスチスラフ [D1732] を、自分の部隊とともに、スーズダリから派遣した。キエフ公ムスチスラフ [I1] を討伐するためである⁵³⁵⁾。

その軍には、ロストフ人、〔クリャジマの〕ヴラジミル人、スーズダリ人、他の地の 11 人の諸公⁵³⁶⁾、〔すなわち〕ボリス・ジディスラヴィチ⁵³⁷⁾、ペレヤスラヴリのグレーブ・ユーリエヴィチ [D178]、スモレンスクのロマン [J1]、ドロゴブージのウラジミル・アンドレエヴィチ [D181]、ヴルーチイ⁵³⁸⁾のリューリク [J2]、ヴィシエゴロドのダヴィド [J3]、その兄弟のムスチスラフ⁵³⁹⁾ [J5]、オレーグ・スヴァトスラヴィチ [C431]、その弟の【544】イーゴリ⁵⁴⁰⁾ [C432]、フセヴォロド・ユーリエヴィチ⁵⁴¹⁾ [D177:K]、ユーリイ [D17] の孫ムスチスラフ⁵⁴²⁾ [D1711] 等が〔遠征に参加した〕⁵⁴³⁾。

534) 1168/1169 年の冬を指している。

535) この、1169 年冬に組織されたキエフへのムスチスラフ [I1] 討伐遠征について、『ノヴゴロド第一年代記』では 6676(1168) 年の記事の末に「この時 (1169 年 2 月頃)、ロスチスラフ [D116:J] の子供たち〔リューリク [J2] とダヴィド [J3]〕が、アンドレイ [D173] の息子〔ムスチスラフ [D1732]〕とともに、スモレンスク人、ポロツク人、ムーロム人、リャザン人を率いて、キエフのムスチスラフ [I1] を討伐すべく進軍した。一方かれ〔ムスチスラフ [I1]〕は、かれらと戦わずに、自らの意志でキエフから立ち去った」[Новгородская первая летопись: С. 33, 220][ノヴゴロド第一年代記 XII: 27 頁]として、あたかも戦闘はなかったように記している。

536) 次に列挙される人名を、最初のボリス・ジディスラヴィチ (次注) も「公」として含めて数えれば、確かに 11 人が遠征に参加したことになる。

537) ボリス・ジディスラヴィチ (Борис Жидиславич) についてはここが初出。アンドレイ [D173] に仕える軍司令官で、重用されており、1170 年代にアンドレイ [D173] の指揮下でたびたび名が言及されている。アンドレイの死後にあたる『ラヴレンチイ年代記』1177 年の記事ではグレーブ・ロスチスラヴィチ [C542] がヴラジミル大公位を得ようと侵攻した時に、グレーブの同盟公ムスチスラフ [J5] の軍にあり、敗戦してフセヴォロド大巢公 [D177:K] によって捕虜となっている。

なお『ラヴレンチイ年代記』には並行記事 (下注 543) が見えるが、そこにはかれの名は記されていない。

538) 上注 521 を参照。

539) ロスチスラフ [D116:J] の末子ムスチスラフ [J5] の名は、1162 年の記事に初出。父ロスチスラフ [D116:J] によってベルゴロド公に任じられている (上注 279 参照)。

540) イーゴリ [C432] は、1185 年のポロヴェツ大遠征をテーマとした叙事詩『イーゴリ軍記』の主人公となる。かれの生誕のエピソードは 1151 年の項に現れているので、当時 20 歳にも満たない年少公であった。したがって前出のロマン [I11] とは同世代にあたる。

541) フセヴォロド [D177:K] (大巢公 (Большое Гнездо)) は 1154 年生まれで、当時まだ 15 歳程度。かれが軍事行動に参加したのは今回が初回であった。

542) アンドレイ公 [D173] の亡兄ロスチスラフ [D171] の息子のこと。かれについては上の記事 (上注 266) でも同様に「ユーリイの孫」と呼ばれている。このムスチスラフ [D1711] は、1161 年 6 月にノヴゴロドの公座から追放されて以降 (上注 266)、叔父のアンドレイ [D173] の庇護のもとにあったと考えられる。

543) 「この年の冬」(上注 534) からここまでの段落のテキストは、『ラヴレンチイ年代記』の 6676(1168) 年の項に、遠征に参加した諸公リストの人名の順番などを別にすれば、ほとんど同一の並行記事が収録されている。

その時、ムスチスラフ [I1] は、ミハルコ・ユーリエヴィチ公⁵⁴⁴⁾ [D175] を、コウイ人⁵⁴⁵⁾ とバスチイ⁵⁴⁶⁾ の従士たちとともに、ノヴゴロドの息子〔ロマン [I11]〕のもとへと派遣していた⁵⁴⁷⁾。

リユーリク [J2] とダヴィド [J3] のもとに、アンドレイ [D173] の息子〔ムスチスラフ [D1732]〕とロマン [J1] がスモレンスク人を率いて、近づいているという⁵⁴⁸⁾ 報告がもたらされた。そこで、ふたり〔リユーリク [J2] とダヴィド [J3]〕は〔軍を〕派遣して⁵⁴⁹⁾、メジモステエ⁵⁵⁰⁾ (Межимостье) を過ぎたところで、モズイリ⁵⁵¹⁾ に向かっていたミハルコ [D175] を捕獲した。これについては、バスチイ (Бастий) がミハルコ [D175] を欺いたのである⁵⁵²⁾。

6679 [1171] 年

544) 当時の諸公の中で、南方のトルチェスクの公座に就いていたミハイル (ミハルコ)・ユーリエヴィチ [D175] は、兄アンドレイ [D173] からは自立的、対抗的な立場を示しており、ムスチスラフ [I1] の陣営についていた。これは、1162年に、アンドレイ [D173] が、かれを年少の兄弟たち (ムスチスラフ [D17j] とヴァシリコ [D174]) とともにスーズダリから追放したこと (上注 284 参照) と無関係ではないだろう。

545) 「コウイ人」(коуи) は、トルクやベレンディ人に近縁のチュルク系民族。(『イパーチ年代記(4) : 368 頁, 注 231] 参照)

546) 「バスチイ」(Бастий) はムスチスラフに仕えるベレンディ人の軍司令官。上注 511 を参照。

547) ここでは、諸公がアンドレイの命令によってキエフへ攻め込んできたときには、ミハイル [D175] は折り悪く、ムスチスラフの息子ロマン [I1] の支援のためにノヴゴロドに向かう道中であつたということになる。

548) 上にある、ムスチスラフ・アンドレイヴィチ [D1732] のキエフ討伐遠征軍が、同盟しているスモレンスクのロマン [J1] とスモレンスク人部隊とともに、集合場所のヴィシエゴロドに近づいているということ。この報告に自信をつけた (もしくは、この部隊と合流した) リユーリク [J2] とダヴィド [J3] は、敵の有力な軍司令官であるミハルコ [D175] を捕らえるための部隊を派遣したのである。

549) リユーリク [J2] はヴルーチイから、ダヴィド [J3] はヴィシエゴロドから出陣しており、モズイリへ向けて部隊を派遣するにはもっとも好位置にあつた。

550) 「メジモステエ」(Межимостье) について、バルソフはこれを、プリピャチ川左岸支流のプラトカ川 (Прудка) 沿岸の村「ザモステエ」(Замостье) (ペラルーシ、カリニコヴィチ州の村ザモステエ (Замосце)) と同定しており、その場合、モズイリからだ北東方向に約 36km 離れていることになる [Барсов 1865: С. 122]。マフノヴェツも、ほぼ同様の場所を推定している。

551) 「モズイリ」(Мозырь) は、プリピャチ川中流域の右岸に位置する城市。[『イパーチ年代記(5) : 286 頁, 注 320] 参照。

552) これに続く記事にも、ベレンディ人のムスチスラフ [I1] への裏切りが語られているが、ムスチスラフに仕えていたベレンディ人の軍司令官バスチイは、味方に利あらずと見て、ムスチスラフ [D1732] 陣営に寝返り、ミハルコ [D175] の身柄を、リユーリク [J2] とダヴィド [J3] に引き渡したのだろう。

兄弟たちはヴィシエゴロドで合流して、ドロゴジチ⁵⁵³⁾の聖キリル〔修道院〕⁵⁵⁴⁾の近辺で陣営を張った。テオドロスの主日のことだった⁵⁵⁵⁾。そして、〔大斎の〕第二週には⁵⁵⁶⁾キエフの城市をぐるりと包囲した。

ムスチスラフ [I1] はキエフに籠城した。城内から〔防衛戦を〕戦い、いたる所で激しい戦闘が起こった。ムスチスラフ [I1] は城内で疲弊した。ベレンディ人とトルク人はムスチスラフ [I1] を欺きはじめた。〔包囲軍の諸公は〕3日間城を囲んで陣を張った。それから諸公は、セルホヴィツァ⁵⁵⁷⁾ (Серховица) にすべての従士たちを集めた。〔従士たちは〕、かれらに〔キエフの守備兵〕に向かって、丘を駆け降り、ムスチスラフ [I1] 勢の背後から矢を射かけ始めた。

〔守備側の〕従士たちはムスチスラフ [I1] に対して、こう言い始めた。「公よ、なぜじっとしているのですか。城市から出なさい、〔さもなくば〕われらはかれら〔敵〕に打ち勝つことはできません」。

こうして、神はムスチスラフ・アンドレエヴィチ [D1731] とその兄弟たちを助け、かれらはキエフを占領した⁵⁵⁸⁾。

ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] は、キエフから逃げ出してヴァシーレフ⁵⁵⁹⁾ に向かった。バスチイの従士たちは、かれ〔ムスチスラフ [I1]〕に追い付いて、かれの背後から矢を射かけ始めた。かれ〔ムスチスラフ [I1]〕に付き随っていた従士たちの多くを捕まえた。捕虜になったのは、ドミトロ・ホロブレイ (Дмитр Хоробрый), 財務官⁵⁶⁰⁾ のオレクサ (Олекса), スプイスラフ・ジロスラヴィチ (Сбыслав Жирославич), イヴァンコ・トヴォリミリチ (Иванко Творимирич),

553) 上注 229 を参照。

554) 「聖キリル修道院」(Кирилловский монастырь) については、上注 444 を参照。

555) 「テオドロスの主日」(Феодорова недѣля) とは、大斎第一週の最後の日を指す移動祭日の名称で、ここでは 1169 年 3 月 9 日の日曜日に相当する。

556) この「第二週には」(второѣ недѣли) とは、大斎の第二週を意味し、1169 年の 3 月 10 日を指している。

557) 「セルホヴィツァ」(Серховица) は、おそらく写本転記の段階で生じた誤記で、正しくは「ユルホヴィツァ」(Юрховица) だろう。これは、キエフのポドリエ地区北西に隣接する小高い丘の名称。キエフの丘は南側と西側が城壁などで固められた「正面」なので、北西からの攻撃は「背後から」ということになる。

558) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事は「神と聖母と父及び父祖の祈りが、ムスチスラフ・アンドレエヴィチ公とその兄弟たちを助けた。かれらはキエフを占領した。そのようなことは、これまで一度もなかった」と記されている。[スズダリ年代記訳注 [IV]: 15 頁]

559) 「ヴァシーレフ」については上注 73 を参照。

560) 「財務官」(дворский) は公の館(宮廷)の経済を管理する役職。

かれ〔ムスチスラフ [I1]〕の家令⁵⁶¹⁾ロード(Род)をはじめとして多くの者だった⁵⁶²⁾。【545】

かれ〔ムスチスラフ [I1]〕は、ウノヴィ⁵⁶³⁾(Уновь)川を過ぎたところで、兄弟のヤロスラフ⁵⁶⁴⁾[I2]と合流した。こうして、二人は〔ヴォルィニの〕ヴラジミルへと向かった。

キエフを攻略したのは、3月8日⁵⁶⁵⁾、大斎の第2週の水曜日のことだった。2日のあいだ⁵⁶⁶⁾城市の全体が掠奪にあった。ポドリエ地区も丘も、修道院もソフィア教会も十分の一聖母教会も。誰も、どの場所も〔被害を〕免れることはなかった。教会は燃やされ、キリスト教徒は殺され、他の者は捕縛され、女たちは、無理やり夫から引き離されて捕虜として連れ去られた。幼児は母の姿を見て泣き叫んだ。スモレンスク人、スーズダリ人、チェルニゴフ人、オレーグ[C431]の従士たちなどの手によって、多くの財産が奪い取られ、教会のイコン、書物、祭衣は剥ぎ取られ、鐘は運び去られた。すべての聖物は奪い取られた。

聖なる聖母の洞窟修道院は邪教徒⁵⁶⁷⁾によって火をかけられた。しかし、聖母の祈りによって神はこのような厄災からも修道院を守られた⁵⁶⁸⁾。キエフではすべての人が嘆き苦しみ、癒されぬ悲しみと止むことない涙があった。これらすべては、われらの罪のゆえに起こったのであ

561) 「家令」(тиун)については上注 432 を参照。

562) ここに列挙されている人名はすべて初出だが、ムスチスラフ [I1] に仕える主だった軍司令官、側近貴族と考えられる。

なお、『ラヴレンチイ年代記』6676(1168)年の並行記事では、「〔ムスチスラフ [I1]〕の妃は捕らえられ、かれの息子とかれの従士たちが捕虜になった」という記述が見える。この妃はボレスワフ3世の娘アグネシカで(上注 430 参照)、特定できないが年少の息子を伴って、ムスチスラフ [I1] とともにキエフを脱出したが、妻子は捕虜となったのだろう。ムスチスラフ [I1] 側に好意を持っている『イパーチイ年代記』の編者は、この事実を意図的に収録しなかったのだろう。

563) 「ウノヴィ川」(Уновь, Унова)は、イルベニ川の右岸支流。現在のウナヴァ(Унава)川に相当する。河口はキエフからだとな西方向に45kmほど離れている。

564) ヤロスラフ [I2] は当時ヴォルィニ地方のルチェスク公であり、キエフから逃走した兄のムスチスラフ [I1] を、代々の根拠地であるヴォルィニのヴラジミルへと伴ったのである。

565) すべての写本で「3月8日」となっているが、これは「3月12日」の誤記と考えられる。1169年の大斎第二週の水曜日は、3月12日に相当する。

566) 1169年3月10日、11日の二日間を指している。

567) この「邪教徒」(поганые)は、ムスチスラフ [I1] の陣営から寝返ったベレンディ人たちを指している。

568) 当時の洞窟修道院典院ボリカルブは、スーズダリとキエフ府主教の間の教会問題については、アンドレイ敬神公 [D173] やヴラジミル主教フョードルに誓い立場にいた。洞窟修道院が掠奪を免れたのは、そのような政治的な理由もあったと思われる。[Воронин 2007: С. 153]

る⁵⁶⁹⁾。

キエフにおけるグレーブ⁵⁷⁰⁾ [D178] の公支配の始まり。

ムスチスラフ・アンドレエヴィチ [D1732] は、自分の叔父のグレーブ [D178] をキエフの公座に据えた。3月8日のことだった⁵⁷¹⁾。グレーブ [D178] は、自分の息子ウラジーミル⁵⁷²⁾ [D1782] にペレヤスラヴリを与えた。

ムスチスラフ・アンドレエヴィチ [D1732] は、大いなる名誉と栄光をもって、父アンドレイ [D173] のもと、スーズダリへと出発した。【546】

ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] は、兄弟のヤロスラフ [I2] とガーリチ人ともに、ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] を討伐するべく、ドロゴブージへと軍を進めた⁵⁷³⁾。そして、城市を包囲して戦い始めた。そのとき、ウラジーミル [D181] は重病だった。それゆえ、病気のために部隊を出しての戦闘はしなかった。こうして、〔ウラジーミル [D181] の支配下の〕諸城市はムスチスラフ [I1] に引き渡された。〔ムスチスラフ [I1] は〕シュムスク⁵⁷⁴⁾ (Шюмеск) の〔住民を〕捕らえると、〔ヴォルィニの〕ウラジミルへと送った⁵⁷⁵⁾。〔シュムスクの〕代官だったウ

569) 『ラヴレンチイ年代記』並行記事では「これらのことは、かれら〔キエフ人〕の罪ゆえに、そしてなによりも府主教〔コンスタンチン二世〕の不正義(неправда)のゆえに起こったのである」と、異なった評価をしている。これによれば、アンドレイ [D173] の指示によるこのキエフ掠奪遠征の動機は「宗教的」なもので、前年 1168 年の主の降誕祭(12月25日)が水曜日に当たっていたことから、この日の祝宴の肉食を容認した洞窟修道院典院ポリカルプを、府主教コンスタンチンは破門(監禁)に処した。これに対して、洞窟修道院と緊密な関係を保っていたアンドレイ [D173] 公が、主にキエフの教会組織を懲罰するために、掠奪遠征を組織したことになる。[Щапов 1989: С. 199] も参照。

570) イパーチイ写本では、別の筆跡で「ユーリエヴィチ」(Юрьевича)が加筆されている。

571) これも、上注 565 の場合と同様に「3月12日」(1169年)に訂正されるべきである。

572) グレーブ [D178] の息子ウラジーミル [D1782] については、ここが初出。後の記事に見るように、このときウラジーミルはわずか 12 歳であり、実質的にペレヤスラヴリの支配も、グレーブが管轄せざるを得なかった。

573) 1169 年夏～秋の出来事。キエフ奪還を狙っていたムスチスラフ [I1] は、その手始めに、キエフへの遠征の際に当面の障害となるウラジーミル [D181] の討伐を試みたのだろう。

574) シュムスク(Шюмеск)は、現在のウクライナの都市「シュミスク」(Шумьск)に相当し、ゴリニ川のの上流域、ヴォルィニ公領とガーリチ公領の境界に位置している。[イパーチイ年代記(4): 325 頁、注 28] 参照。

575) おそらく、シュムスクの住民は、ムスチスラフ [I1] 軍に抵抗したために、戦争捕虜奴隷として、ムスチスラフの根拠地であるウラジミルへ送られたのだろう。

ラジーミル [D181] の守り役パウク⁵⁷⁶⁾ も、そこ〔ヴラジミル〕へ送られた。〔ムスチスラフ [I1] は〕、他の諸城市を掠奪し、焼いてから、〔ヴォルィニのヴラジミルへと〕帰還した。

グレーブ [D178] は、ウラジーミル [D181] を支援するための軍を派遣しなかった⁵⁷⁷⁾。グレーブ [D178] は「そなたのもとに援軍を送る」と言っていたにもかかわらず、送らなかったのである。

その年が押し詰まった頃⁵⁷⁸⁾、ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] が逝去した。1月28日⁵⁷⁹⁾ だった。かれの遺体は、テオドロスの週の金曜日⁵⁸⁰⁾ にヴィシエゴロドに運ばれた⁵⁸¹⁾。〔それまで遺体は〕何日も、埋葬されないまま横たわっていた。

グレーブ [D178] は、聖母の洞窟修道院の典院ポリカルプと聖アンドレ修道院の典院セメオンをヴィシエゴロドまで派遣した。二人にウラジーミル [D181] 〔の遺体を〕キエフまで運んでくるよう命じていた。

そして、かれ〔グレーブ〕自身は、〔ドニエプル川〕対岸のゴロドク⁵⁸²⁾ (Городок) へ向かい、そこからペレヤスラヴリへと行った⁵⁸³⁾。

576) このウラジーミル [D181] の守り役 (кормилец) 「パウク」 (Паук) (フレーブニコフ写本では「プーク」 (Пук)) については、すでに 6659(1151) 年の記事で言及されている ([イパーチイ年代記 (5) : 223 頁, 注 15])

577) グレーブ [D178] もウラジーミル [D181] も、1169年3月のキエフ掠奪遠征に、ムスチスラフ・アンドレエヴィチ [D1732] の同盟軍として参加しており (上注 543 参照)、ムスチスラフ [I1] を共通の敵とする同盟関係にあったはずである。ところが、キエフ公となったグレーブ [D178] は、ウラジーミル [D181] の援軍要請を無視したということ。

578) 当時の三月から年が改まる暦 (三月暦) によれば、1月28日 (次注) は「年末」に相当する。

579) 1170年1月28日のこと。ウラジーミル [D181] は敗戦後もドロゴブージにとどまり、そこで亡くなった。

580) 1170年のテオドロスの主日 (上注 555) は2月22日であることから、テオドロスの週は2月16日～22日であり、その金曜日とは2月20日に相当する。

581) 編集上の理由で時系列が混乱しているが、1月28日のウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] の死から、かれの遺体がヴィシエゴロドに到着した2月20日までの23日間に、以下の段落で語られている、ウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] によるドロゴブージの要求と約定の締結、ウラジーミル [D115] による約定を破っての公妃追放が起こっている。

582) キエフの丘のドニエプル対岸にあるペーシイ (ペソーチニイ) ・ゴロドク (Песий Городок) (「砂の砦」の意) のこと。ここからペレヤスラヴリまで街道がつながっていた。[イパーチイ年代記 (4) : 363 頁, 注 206] を参照。

583) 記事のこの個所には、グレーブ [D178] がキエフを去って、ペレヤスラヴリへ引き上げた理由は記されていないが、以下の事態の進展を見ると、この1170年2月中頃の時点で、ムスチスラフ [I1] の遠征軍がキエフに接近しているという報告がグレーブ [D178] のもとに届いており、グレーブはこれに武力では対抗できないと考えて、従来の根拠地であるペレヤスラヴリへ退去したと考えられる。

ウラジーミル・ムスチスラヴィチ⁵⁸⁴ [D115] は、ポロニイ⁵⁸⁵ (Полоний) にいた。かれは、ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] が死んだことを聞くと、ドロゴブージへと向かった⁵⁸⁶。〔ウラジーミル・〕アンドレエヴィチ [D181] の従士たちは、かれを〔ドロゴブージの〕城内に入れようとはしなかった。かれ〔ウラジーミル [D115]〕は、スラヴェン⁵⁸⁷ (Славен) および〔ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] の〕従士たちのもとに使いを遣って言った。「わたしは、そなたたち⁵⁸⁸ とそなたたちの公妃⁵⁸⁹ に【547】十字架接吻をして〔誓いましょう〕。そなたたちにも、自分の嫂⁵⁹⁰ にも、その持ち村にも、その他のものに対しても、悪しきことを行わないことを」。こうして、〔ウラジーミル [D115] は〕二人に十字架接吻をして〔誓い〕、〔ドロゴブージに〕入城した。ところが、〔ウラジーミル [D115] は〕翌日からすでに十字架接吻〔の誓い〕に違反した。かれはこれまでも、すべての兄弟たちを欺いて、かれらに対する十字架接吻〔の誓いを〕守ってこなかったのだから。こうして、かれ〔ウラジーミル [D115] は〕、〔ウラジーミル・〕アンドレエヴィチ [D181] の財産、持ち村、家畜の群れを取り上げ、〔ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] の〕公妃を城内から追い出した。かの女は、公〔の遺体と〕ともに、ヴルーチイへ、そしてヴィシエゴロドへと向かった⁵⁹¹。

584) 1167年5月～6月にウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] がムスチスラフ [I1] に反旗を翻したとき、かれはドロゴブージに妻とともに一時退去しており、かれにとってここが拠点の城市だったことがわかる（上注478参照）。その後、同盟者アンドレイ [D173] の指示によって、かれはリャザン方面へ逃れたが、1169年3月のムスチスラフ [I1] のキエフからの逃走にともなって、キエフに近い領地（ポロニイ）に移り住んでいたのだろう。

585) 「ポロニイ」(Полоний) は、ホモラ川(Хомора)右岸の城市で、キエフ公領とヴォルィニ公領の境界に位置している。現在のフメリヌィツィクィイ州の中心都市ポロンネ(Полонне)に相当する。ここからドロゴブージへは、北西方向に86kmほど離れている。

586) 上注584のような経緯があったため、ウラジーミル [D115] は旧来の所領の回復を要求したことになる。

587) この「スラヴェン」(Славен) は、ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] の従士団の団長で、この時点でドロゴブージの守備隊長だった人物だろう。

588) 「そなたたち」の原文は、*вама* と双数形になっているが、これはスラヴェンと公妃の二人が念頭に置かれていると考えられる。

589) ドロゴブージにいるウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] の未亡人を指している。

590) 「自分の嫂」(*ятровь своя*) の *ятровь* は広く「兄弟の配偶者」を意味する。ウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] にとってウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] は、兄弟(*братия*) に相当するので、「嫂」(*ятровь*) は前注の「公妃」すなわち、ウラジーミル [D181] の未亡人を指している。

591) ヴルーチイはリュウリク [J2] の、ヴィシエゴロドはダヴィド [J3] のそれぞれ所領であり、ウラジーミル・アンドレエヴィチの公妃は、夫の同盟者だった二人を頼って行ったのである。

なお、この段落の時系列については上注581を参照。

この年⁵⁹²⁾、ムスチスラフ [I1] は兵を起こし、ヴラジミルからキエフに向けて、兄弟のヤロスラフ⁵⁹³⁾ [I2]、ガーリチ人、スヴァトポルク・ユーリエヴィチ⁵⁹⁴⁾ [B3213] とともに遠征に出発した。二人のフセヴォロドヴィチ〔スヴァトスラフ [C411:G] とヤロスラフ [C412]〕も、かれ〔ムスチスラフ [I1]〕に援軍を出した。

われらは、以前の話に戻ろう⁵⁹⁵⁾。

翌日の土曜日⁵⁹⁶⁾、われらは⁵⁹⁷⁾ ウラジーミル [D181] 〔の遺体〕とともにヴィシエゴロドを出発した。ダヴィド [J3] 公は、公妃と家臣をキエフまで行かせようとせず、かの女にこう言った。「嫂⁵⁹⁸⁾ よ、わしは、どうしてそなたを行かせることができようか。昨夜、わしのもとに、ムスチスラフ [I1] は、ヴァシーレフにいるという報告が来たのだから⁵⁹⁹⁾」。また〔ダヴィド [J3]〕は、かれの〔ウラジーミル [D181] に仕えていた〕従士たちに言った。「そなたたちの中に〔キエフへ〕行きたい者がいるなら、行くがよい」。すると、かれら〔従士たち〕は、かれ〔ダヴィド [J3]〕に言った。「公よ、あなたは、われらがキエフ人たちになしたこと⁶⁰⁰⁾ について、ご自身で知っているでしょう。われらは行くことはできません、打ち殺されてしまいます」。

典院ポリカルプは〔ダヴィド [J3] に〕言った。「公よ、見よ、かれ〔ウラジーミル [D181]〕の従士たちは、かれ〔の遺体〕とともに〔キエフへ〕行こうとはしません。どうか、あなたご自身の従士を何人か行かせて下さい。〔なぜなら〕誰も馬を曳き、軍旗を掲げる者がいないのです」。**[548]** ダヴィド [J3] は、〔答えて〕言った。「軍旗と名誉⁶⁰¹⁾ は〔ウラジーミル公 [D181]〕

592) 1170 年の 1 月～2 月に相当する。マフノヴェツは、ムスチスラフ [I1] が遠征開始を、かれの守護聖人である将軍聖テオドロスの祝祭日に設定したとして、2 月 8 日と推定している。[Літопис руський, 1989: С. 297, прим. 1]

593) ヤロスラフ [I2] は当時ヴォルィニ地方のルチェスク公 (上注 564)。

594) 当時、スヴァトポルク・ユーリエヴィチ [B3213] はトゥーロフの公だった。

595) この文言によって、直前の二つの段落、すなわち、ウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] のドロゴブージ占拠とムスチスラフ [I1] と同盟諸公のキエフへの遠征の記事が、編集段階での挿入であったことがわかる。

596) 上注 580 のテオドロスの金曜日の「翌日」ということで、これは 1170 年 2 月 21 日の土曜日に相当する。

597) フレーブニコフ写本では「かれらは (…) 出発した」(поидоша) となっている。

598) この「嫂」(ятры) も、上注 590 にあるように、広い意味での「兄弟」の妻を意味している。

599) この時点で、上の段落にあるムスチスラフ [I1] と同盟諸公によるキエフ討伐遠征軍は、キエフにほど近いヴァシーレフまで既に到達しており、そのような状況でキエフに向かうのは危険だということ。

600) 1169 年 3 月の、アンドレイ [D173] の命令によるキエフ掠奪遠征の同盟諸公の中には、ウラジーミル・アンドレヴィチ [D181] もおり (上注 543 参照)、その従士団もキエフの掠奪、破壊に参加していたことを指している。

601) 「軍旗」(стяг) は公の栄光を象徴することから、「軍旗と名誉」(стягъ и честь) をもってとは、勝利者としてキエフに入城することを指している。

の] 魂とともに消えてしまった」。〔続けてダヴィド [J3]〕は言った。「しかし、見よ殉教者〔ボリスとグレーブ〕教会の司祭たちがいる⁶⁰²⁾」。

こうして、典院たち、修道士、司祭、キエフ人たちは、感謝と称賛の聖歌を歌いながら、かれ〔ウラジーミル [D181] の遺体〕を聖アンドレイ〔アンデレ〕修道院⁶⁰³⁾に埋葬した。2月15日⁶⁰⁴⁾の大齋第一週の土曜日のことだった。

6680 [1172] 年

ムスチスラフ [I1] は⁶⁰⁵⁾ 大軍を率いてベレンディ人、トルク人のところに行き、そこで合流すると、トレポリ (Треполь) へと向かった⁶⁰⁶⁾。そしてそこから、キエフへ向けて進軍した。そして、キエフに入城すると⁶⁰⁷⁾、兄弟たち、すなわち、ヤロスラフ [I2]、ウラジーミル・ムスチスラヴィチ⁶⁰⁸⁾ [D115]、ガーリチ人、〔ムスチスラフ・〕フセヴォロドコヴィチ⁶⁰⁹⁾ [F113]、スヴァ

602) このダヴィド [J3] の言葉は「ウラジーミル公 [D181] の] は既に死んだので、勝者として (栄光と名誉をもって) キエフに入城することは不可能だが、ヴィシエゴロドのボリス・グレーブ教会の司祭たちを伴わせて、しかるべく葬儀を行わせることは可能だ」という意味。

603) キエフのアンドレイ修道院は、フセヴォロド・ヤロスラヴィチ大公 [D] によって創建されたもっとも古い修道院の一つ ([イバーチイ年代記 (1): 252 頁, 注 49])。ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] の父アンドレイ [D18] は、モノマフ [D1] の息子たちの中では年少者だったため、キエフで独立した地位を築くことはなく、一家の教会・修道院も持っていない。そのため、モノマフ一族の菩提寺の中でもっとも古いアンドレイ (アンデレ) 修道院に埋葬されたのだろう。

604) フレーブニコフ写本では、「2月21日」と訂正されており、大齋第一週 (первая недѣля поста) とは、上注 580 の「テオドロスの週」と同じことを指していることから、その土曜日は 1170 年の 2 月 21 日に相当する。

605) この段落の記事は、上注 592 以降の段落にある、1170 年初頭のムスチスラフ [I1] のウラジミルからの出兵の記事からのつながりになっている。

606) ムスチスラフ [I1] の遠征軍は、ロシ川流域のベレンディ人、トルク人等の根拠地に向かい、そこで援軍を集め、そこから北上してトレポリへ向かったことになる。

607) 上注 599 で、ダヴィド [J3] が語った言葉として、「昨夜、わしのもとに、ムスチスラフ [I1] は、ヴァシーレフにいるという報告が来た」という記述があり、この「昨夜」は、1170 年 2 月 20 日に相当することから (上注 596)、ムスチスラフ [I1] の遠征軍はトレポリからヴァシーレフへ軍を進め、2 月末にはキエフに入城したことになる。ムスチスラフ [I1] は、グレーブ [D178] がすでに退去したあとのキエフに (上注 583)、いわば無血入城したことになる。なお、マフノヴェツは、ムスチスラフのキエフ入城を、1170 年 2 月 22 日の日曜日と特定しており、その論拠として、この日がテオドロスの週の最終日の主日 (日曜日) で、ムスチスラフは自分の守護聖人の記念日を選んで念願のキエフ入城を果たしたとしている。[Літопис руський, 1989: С. 297, прим. 1]

608) ウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] は、ドロゴブージュを中心に一帯を支配していた (上注 586)。

609) 当時はグロドノ公。この時、ムスチスラフ公 [F113] 本人は遠征に参加していなかったが、千人長に率いさせた援軍を派遣していた (下注 619 参照)。

トポルク・ユーリエヴィチ⁶¹⁰ [B3213], キエフ人等と約定を結んだ。〔このとき〕ベレンディ人とトルク人は、かれら〔ムスチスラフ [I1] と兄弟諸公〕を欺いていた⁶¹¹。

そして、かれ〔ムスチスラフ [I1]〕は、ヴィシエゴロドへと進軍した。城市に襲撃を仕掛けた。城内からも激しく抵抗があった。ダヴィド [J3] は、配下の者たちに命じて、かれら〔敵軍〕が来るまでに外廊の防柵を焼き払わせた⁶¹²。ムスチスラフ [I1] は、松林⁶¹³のあたりに陣営を張り、そこから接近して戦った。

〔ヴィシエゴロド〕城内のダヴィド [J3] のもとには、配下の従士たちが多数おり、兄弟たちからの援軍もいた。グレーブ公 [D178] は、自分の千人長グリゴリイ (Григорий) を援軍とともに派遣していた。また、原野のポロヴェツ人、〔すなわち〕コンチャク⁶¹⁴ (Кончак) とその一族、自分たちのベレンディ人、〔すなわち〕バスチイの従士⁶¹⁵ たちも〔ダヴィドのもとに〕いた。

クスニャチン⁶¹⁶ (Кснятин) は軍司令官として、ヤロスラフ [A1211] の子供たち⁶¹⁷ とガーリチ人とともに来ていた。かれ〔クスニャチン〕は、ムスチスラフ [I1] に使者を派遣してこう言った。「わが公ヤロスラフ [A1211] の **[549]** 命令によって、わたしは、5 日間ヴィシエゴロ

610) 当時はトゥーロフ公。

611) それまで、ムスチスラフ [I1] の陣営についていた「バスチイの従士」を初めとするベレンディ人及びトルク人の部隊は、ムスチスラフがキエフに入城した時点では、ダイヴィ [J3] の陣営に転向してしまい、この約定には加わらなかったということ。

612) 上注 244 を参照。

613) ムスチスラフ [I1] はキエフからヴィシエゴロドを結ぶ街道（この街道はさらに北に延びてチェルニゴフに通じている）を通過して行ったものとみられる。街道の西側には針葉樹林帯が広がっている。

614) 「コンチャク」(Кончак) は、北ドネツ川中流域に展開していたポロヴェツ部族（「原野のポロヴェツ人」）の首長。1107 年にボニャクとともにベレヤスラヴリを襲撃したシャルカンの孫で、オトロクの子にあたる。年代記ではこの個所が初出で、以降 1170 ~ 80 年代に、ドン = ドネツ川ポロヴェツ諸部族連合の指導者として、頻繁にルーシ諸公と対立と交渉を繰り返し、年代記にも頻出するようになる。

615) 上注 511, 546, 611 を参照。ムスチスラフ [I1] を裏切って、かれに攻撃を仕掛けたバスチイは、ダヴィド [J3] の陣営に転向していた。

616) 「クスニャチン」(Кснятин) すなわちコンスタンチン (Константин) は、ガーリチ公ヤロスラフ [A1211] 配下の軍司令官。6668(1160) 年の記事で、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] が主導した、ヴシチジへのスヴァトスラフ・ウラジーミロヴィチ [C341] 討伐遠征に、ヤロスラフ [A1211] が派遣した貴族（軍司令官）として記されている。クスニャチン・セロスラヴィチ (Кснятин Сѣрославич)（上注 179）と同一人物だろう。

617) ここでは単に「ヤロスラフの子供たちと」(съ Ярославичи) とあり、人物が特定されていないが、ガーリチ公ヤロスラフ [A1211] には、ウラジミルコ [A12111] とオレーグ [A12112] の二人の息子が確認できる [Войтович 2006: С. 349-350]。もしくは、ここは「ヤロスラフ公 [A1211] 配下の従士たち」と理解することもできる。

ドを包囲した後に、帰還するように言われている」。すると、ムスチスラフ [I1] が使者を遣って、かれ〔クスニャチン〕に〔答えて〕言った。「兄弟のヤロスラフ [A1211] は、わしにこう言っていた。『兄弟〔諸公〕たちと話をつけるまでは、わしの〔ヤロスラフ [A1211] の〕部隊を、自分のところから立ち去らせてはならない』と」。すると、かれら〔クスニャチンとガーリチ人たちは、偽物の文書を書いて⁶¹⁸⁾、かれ〔ムスチスラフ [I1]〕に送った。こうして、ガーリチ人たちは、かれ〔ムスチスラフ [I1]〕のもとから去って行った。

ムスチスラフ [I1] は自分の兄弟とともに、金門の前の柵のところに陣を張った。ヴィシエゴロドの城内から、邪教徒の原野の〔ポロヴェツ人〕が兵とともに出てきて、多くの悪をなし、撃ち殺し、あるいは生け捕りにした。〔ムスチスラフ・〕フセヴォロドコヴィチ [F113] の千人長⁶¹⁹⁾をはじめ多くの者が捕らえられた。すべての援軍は疲れ切って、バラバラになってムスチスラフ [I1] から離れて行った。

ムスチスラフ [I1] のもとに報告がもたらされた。グレーブ [D178] がポロヴェツ人とともに〔ドニエプルを〕渡渉して対岸に渡り⁶²⁰⁾、さらに、ダヴィド [J3] のところに多勢の援軍がやって来たというのである。ムスチスラフ [I1] はこのこと自分の兄弟たち〔同盟諸公〕に告げた。兄弟たちはかれ〔ムスチスラフ〕に言った。「見よ、われらの兵は離れてしまった。あの者たち〔敵軍〕のところにはより多くの援軍が送られてくる。黒頭巾族たちはわれらを欺いた⁶²¹⁾。われらは、かれら〔敵軍〕に対抗して、陣を守ることはできない。もはや、自分たちの領地に戻ろうではないか。しばらく休息して、再び戻ってこよう」。

こうして、ムスチスラフ [I1] は、キエフを出発した。復活祭後の第2週の月曜日⁶²²⁾のことだった。

ダヴィド [J3] のもとに報告が来た。ムスチスラフ [I1] が〔キエフを〕出発したということだっ

618) この「偽の文書」(грамота ложная)とは、文脈から見ると、ガーリチ部隊が撤兵することを、上記の同盟諸公(ヤロスラフ [I2], ウラジーミル [D115], ムスチスラフ・フセヴォロドコヴィチ [F113], スヴァトボルク・ユーリエヴィチ [B3213] など)が承認したという旨が記された偽文書だったのだろう。

619) 上注 609 を参照。

620) グレーブ [D178] はキエフを退去してペレヤスラヴリに戻っていたが(上注 583)、コンチャクをはじめとする原野のポロヴェツの援軍を率いて、ヴィシエゴロドの対岸からドニエプル川を渡渉して、ヴィシエゴロド城内に入ろうとしたということ。

621) 上注 611 を参照。ここの「黒頭巾族」(черный клобукъ)は、上の「ベレンディ人とトルク人」と同じものを指している。

622) 1170年の復活祭は4月5日で、「復活祭後第2週の月曜日」(второе недѣли по велици дни в понедѣльникъ)は4月13日に相当する。

た。かれ〔ダヴィド〕は、かれ〔ムスチスラフ〕を追撃するために、ポーランド人ヴワディスラフ⁶²³⁾ (Володислав) とポロヴェツ人を派遣した。かれらは、【550】ポロホフ⁶²⁴⁾ (Болохов) の地で追い付き、かれら〔敵軍〕と矢を射交わし、それから帰還した。ポロヴェツ人も帰還した。〔かれらは道中で〕多くの悪事をなし、人々を捕虜にした。

その頃、グレーブ [D178] は、ポロヴェツ人を放って〔黒頭巾族の〕幕舎を〔掠奪させた〕⁶²⁵⁾。そして、進軍して、ヴァシーレフを過ぎたところで、馬役⁶²⁶⁾ たちのもとで陣を張り、自分の従士たちを待っていた。ミハイロフ⁶²⁷⁾ (Михайлов) から来たヴァシリコ・ヤロボルコヴィチ⁶²⁸⁾ [I31] は、そのことを知って、その夜のうちに、かれら〔グレーブ [D178] の陣営〕に対して襲撃を仕掛けようとした。その夜は暗かったからである。しかし、〔ヴァシリコ [I131] は〕他の道を行ってしまい、夜中、道に迷い、翌朝、太陽が昇ったときに、かれらを襲撃した。

ポロヴェツ人は馬役たちと合流して、かれら〔ヴァシリコ [I131] 勢〕と戦った。ヴァシリコ [I131] は辛うじて逃げて、〔ミハイロフ〕城内へと逃れた。かれのまわりの従士たちは殺されたり、生け捕りにされたりした。

その頃、グレーブ [D178] は、ヴァシリコ [I31] を討つべく、リユーリク [J2] とダヴィド [J3]、ムスチスラフ [D1732] 等とともに、ミハイロフへと進軍した。そして、和を結び、〔ヴァシリコ [I131] を〕チェルニゴフ⁶²⁹⁾ へと追いやり、かれ〔ヴァシリコ [I131]〕の城市〔ミハイロフ〕を焼き払い、壕を埋め立て、土塁を崩した。

623) 「ヴワディスラフ」は、ロスチスラフ [D116:J] に仕え、その死後は息子のダヴィド [J3] に仕えていたポーランド人 (лях) の軍司令官。上注 366 を参照。

624) 「ポロホフ」 (Болохов) は、イパーチイ写本では Борохов の綴りになっているが、これは、フレーブニコフ写本の Болохов が正しい。これは南ブク川の中流域の地域名で、ガーリチ公領とキエフ公領との境界地帯に相当していた ([イパーチイ年代記 (4) : 339 頁, 注 93] 参照)。

625) グレーブ [D178] は、ムスチスラフ [I1] 陣営に属する黒頭巾族の根拠地である、ロシ川沿岸のかれらの幕舎 (вежи) へ討伐に向かったのである。その城砦の一つであるミハイロフ (Михайлов) には、ムスチスラフの甥にあたるヴァシリコ [I13] が陣を構えていた。

626) 「馬役」 (сѣделники) については上注 515 を参照。ここでは、グレーブ [D178] に帰順していた黒頭巾族たちのことを指している。

627) 「ミハイロフ」 (Михайлов) は、ロシ川左岸支流カメンカ (Каменка) 川沿岸の城市で、現在の、マール・ミハイリフカ村 (Мала Михайлівка) に相当し、ヴァシーレフからだと南西方向に約 46km ほど離れている。ムスチスラフ [I1] に従属していた黒頭巾族の拠点地だったか。

628) ヴァシリコ・ヤロボルコヴィチ [I13] はブジェスク公だが、このときは、ミハイロフに所領を得ていたのか。

629) 当時チェルニゴフは、ムスチスラフ [I1] の間接的な同盟者であるスヴャトスラフ [C411:G] が公支配をしていた。

この年、ヴォロク⁶³⁰⁾ (Волокъ) でスヴァトスラフ・ロスチスラヴィチ⁶³¹⁾ [J4] が逝去した。この〔城市〕当時はノヴゴロドの領地だった⁶³²⁾。かれの遺体は布で包まれ、スモレンスクへと運ばれた。その遺体は、聖母の主教座教会⁶³³⁾ に名誉をもって埋葬された。

この敬虔なる公スヴァトスラフ [J4] は、あらゆる徳を示し、戦場においては勇猛で、万民に愛情を持ち、加えて慈悲深かった。かれは、修道院を建設して修道士を慰め【551】、教区の教会を建設して司祭たちを〔慰めた〕。すべての主教たちに、しかるべき敬意を払っていた。従士たちを配下に置いて、気前よく〔かれらに〕財産を与え、金や銀を蓄えることをせず、従士たちに与えていた。あるときは、自らの魂を正しくして、父たちに尽くし、生き年生ける者が償うべき、万人の負債を支払っていた。

この年、ムスチスラフ・アンドレエヴィチ [[D1732] に息子が生まれ、洗礼名をヴァシーリイ [D17321] と命名した。

この年、神と聖母が、〔クリヤジマの〕ヴラジミルの城市で新たな奇蹟を起こした⁶³⁴⁾。神とヴラジミルの聖母⁶³⁵⁾ は、悪しく狡猾で傲慢な奸物たる偽主教フェドレッツ⁶³⁶⁾ (Федорец) を、ヴ

630) 「ヴォロク」(Волок) は、ヴォロコ＝ラムスク(Волоко-Ламск) と呼ばれる城市で、ヴォルガ川水系とモスクワ川＝オカ川水系を結ぶ要点にあった。ノヴゴロド領とスーズダリ領の境界に位置しており、領土争いの争点になっていた。

631) スヴァトスラフ・ロスチスラヴィチ [J4] は、1167年夏にノヴゴロドの公座から追放されて(上注488参照)以降、帰属があいまいな境界地帯のヴォロクの城市で暮らしていたことがわかる。

632) 『ノヴゴロド第一年代記』6677(1169)年の記事の初めに、ヴォロクをめぐる領土争いとして、「ラズチニンの子ダニスラフが取税官(данник)としてヴォルクを越えた。すると、アンドレイ [D173] は自分の軍を、かれを討伐するために派遣した」とある。結局この争いは、ノヴゴロド側が勝ったとされており、1169年春～夏以降この時(1170年夏頃)までは、ヴォロクはノヴゴロドの領地であったことが確認できる。[Новгородская первая летопись: С. 33, 220][ノヴゴロド第一年代記 XII: 27-28頁]

633) 「聖母の主教座教会で」(у свяъй Богородици въ епискупьѣ)とは、『原初年代記』(『イパーチイ年代記』)6609(1101)年の項に「ウラジーミル〔モノマフ〕[D1] は、スモレンスクの近くに、主教の座す石造りの聖母教会を定礎した」[ロシア原初年代記: 297頁]と記されているものを指し、後の史料では通常「聖母就寝教会」(Успенский собор)と呼ばれている。

634) ここから、本稿の終わりまでの部分は、ウラジーミルの聖母(次注)の「奇蹟物語」の形式をとった「ヴラジミルからのフェドレッツ追放物語」で『ラヴレンチイ年代記』6677(1169)年の項に、ほぼ同一の並行記事が収録されており、同一の資料を用いたことが分かる。下注654も参照。

635) 「ヴラジミルの聖母」(Богородица Володимерьская)とは、アンドレイ [D173] がヴィシェゴロドからヴラジミルにもたらした、ビザンティン渡来の聖母イコンを指している(『イパーチイ年代記』(5): 286頁, 注322)を参照)。

636) 「フェドレッツ」(Федорец) (『ラヴレンチイ年代記』での表記は「フェオドレッツ」(Феодорец)) は、人名「フョードル」(Федор)の卑称形。

ラジミルの黄金葺きの聖母教会⁶³⁷⁾から、すべてのロストフの地から追い出したのである。

「かれは祝福することを望まなかったのだから、祝福はかれから遠ざかった」⁶³⁸⁾と〔聖書にあるが〕、同様に、この不敬な輩〔フェドレッツ〕は、キリストを愛するアンドレイ公[D173]に聴き従わなかった。かれ〔アンドレイ〕はかれ〔フェドレッツ〕に対して、主教叙任のためにキエフの府主教のもとに行くよう命じていたが、行こうとしなかった。そこで、神と聖母はかれ〔フェドレッツ〕を望まず、ロストフの地からかれを排除したのである。なぜなら、神は人間を罰しようとするときには、その者から理知を取り上げるからであり、こうして、神はそれをこの者〔フェドレッツ〕になし、かれから理知を取り上げたのである。

公〔アンドレイ[D173]〕はかれを善く思い、かれに善きことを望んでいた⁶³⁹⁾。ところが、この者〔フェドレッツ〕は府主教による【552】叙任を望まなかったばかりか、ヴラジミルのすべての教会を閉鎖し、聖堂の鍵を取り上げてしまった。こうして、城内はどこでも鐘は鳴らず、聖歌は唱われなくなった。それは主教座教会でも〔同じだった〕。この聖堂内には奇蹟の聖母の〔イコン〕があり、他にもあらゆる聖物があり、これに、キリスト教徒たちはみな畏れを抱いて近づき、安らぎと庇護を、魂と肉体の癒しを得てきたのだった。かれは、その教会をあつかましくも閉鎖したのである。こうして、神と聖母の怒りを買ったのだった。

〔フェドレッツが〕追放されたのは、5月8日⁶⁴⁰⁾の神学者聖ヨハネの祭日のことだった。

多くの人々が、かれが〔主教として〕君臨しているときに苦しみを受けた。村の領地、農具、馬を失った者もいた。奴隷となり、投獄され、財産を奪われたものもいた。この者〔フェドレッツ〕は俗人だけでなく、修道士、典院、司祭も容赦なく迫害した。ある者は頭や髭を剃られた。

637) 「黄金葺きの聖母教会」(святая Богородица церковь златоверхая)とは、ヴラジミルにおける主教座教会の聖母就寝教会(Соборная церковь Успения Богоматери)のこと。(上注201参照)

638) 「かれは祝福することを望まなかったのだから、祝福はかれから遠ざかった」(нѣ въсхотѣ благословения, удалися отъ него)の文言は、『詩篇』108:17(邦訳109:17)からの引用。『詩篇』における「かれ」は「罪人」(грешник)や「神に逆らう者」(льстивый)と呼ばれていることから、本文脈での「かれ」は、明らかにフェドレッツを指している。

639) 1162年末～1163年初めに、ロストフ主教レオンが、精進日の肉食をめぐる「異端問題」でヴラジミル・スーズダリの地を去った後(上注283, 292を参照)、アンドレイ公[D173]は、「フョードル」という名のおそらくロシア人の聖職者を、キエフ府主教の叙任を経ないまま、ロストフ主教に任命して教会の管轄に当たらせていた。1169年3月、アンドレイ公が指示して息子ムスチスラフ[D1732]が組織した、キエフへの懲罰遠征(府主教が懲罰の対象だった可能性が高い。上注569参照)とキエフ城内の教会の掠奪・破壊によって、おそらく、キエフ府主教コンスタンチン〔二世〕は、アンドレイ公に対して妥協的な態度を取らざるを得なくなったのだろう。これを受けて、アンドレイ公は、「腹心」のフョードル(フェオドレッツ)に対して、キエフへ赴いて府主教による正式な叙任を受けるように命じたが、今度はフョードル自身が、公の意に背いて、ヴラジミル＝スーズダリの教会の独立性を主張し、管内で強権的に振る舞い始めたという状況が想定される。

640) 1169年5月8日に相当する。

他の者は目を焼き潰し、舌を切り取られた。他に、壁に〔釘で〕打ち付けられた者もいた。こうして、容赦なく迫害した。みなから、財産を奪い取ろうとしたのである。地獄のように満たされることがなかったのだから⁶⁴¹⁾。

アンドレイ [D173] は、かれ〔フェドレッツ〕をキエフの府主教のもとに送還した。府主教コンスタンチン (Костянтин) は、かれのあらゆる罪を明らかにし、かれを〈砂の中州〉⁶⁴²⁾ に連れて行くよう命じた。そこで、かれは悪しき異端者として、〔腕を〕切り落とされ、舌を切り取られた。【553】右手を切り取られ、目をくり抜かれた。なぜなら、聖母を冒瀆する言葉を吐いたからである。罪人たちは地上から断たれ、そのような者はあってはならないからである⁶⁴³⁾。

こうして、福音書の次の言葉が成就した。「あなたたちが量るその秤によって、あなたたちは量られる。あなたたちが裁くその裁きによって、あなたたちは裁かれる⁶⁴⁴⁾」。こうして、慈悲のない裁きは、慈悲をなさないものに下されたのである。また、別の〔聖書の〕言葉も成就した。「不法に苦しんだとしても、その者は〔殉教者の〕冠を受けることはない⁶⁴⁵⁾」。罪人たちは、ここでも罪ゆえに苦しみを受け、神の裁きにおいても、苦しみのうちに裁かれるのである。

こうして、この者〔フェドレッツ〕は最後の息を引き取るまで安静にあることはなかった。あたかも、悔い改めずにおのれの魂と肉体を滅ぼす悪しき異端者の如くであった。こうして、騒ぎのうちにかれについての記憶も滅び去った。悪鬼どもは、自分たちを崇める者を崇める。それゆえ、悪鬼どもは、この〔フェドレッツ〕を連れてきて、その考慮を雲のところまで持ち上げておいて、かれを第二のソトナイル⁶⁴⁶⁾として、それから、かれを地獄へと連れて行ったのである。まさに「災いが頭上に降り、不法な業が自分の頭にふりかかった」⁶⁴⁷⁾のであり、「落とし

641) 「地獄のように満たされない」(бо не бѣ сытъ, яко адѣ)の表現は、『箴言』27:20からの借用。

642) 「砂の中州」(Песий остров)は、キエフの丘から北北東へ約5～7kmほど離れた、ドニエプル川本流と側流の Cholotryi 川 (Чорторий) (Dezenka (Десенка) 川) の間に形成された中州の当時の名称。Cholotryi 川を挟んで対岸にはベーシイ・ゴロドク (砂の砦) (上注582)があった。

なお、「砂の中州」の文言は『ラヴレンチイ年代記』の並行記事にはなく、これは『イパーチイ年代記』の編集過程で、キエフの編集者が付け加えたものである。

643) 「罪人たちは」以下の文言は『箴言』2:22からの部分的な借用である。

644) 『マタイ伝』7:2からの引用。この文言は1145年の記事でも引用されている。[イパーチイ年代記(2):336頁、注296]参照。

645) 新約『テモテへの手紙2』2:5からの部分的引用。出典は「規則に従って競技をしないならば、栄冠は受けられない」という意味だが、本文では「競技」を「苦しむ」と宗教的に解釈している。

646) 「ソトナイル」(Сотонаил)は、サタン(悪魔)の原型を意味する言葉で、『原初年代記』6494(986)年の「哲学者の言葉」の冒頭に、天地創造4日目に傲慢さゆえに天から追放された墮天使の名前として記されている。ここでも、ソトナイルの言葉として「地上に降りて大地を奪おう(…)北の雲の上に玉座をおこう」と本文と類似のイメージを認めることができる。([ロシア原初年代記:102頁])

647) 『詩篇』7:17からの引用。

穴を掘り、深くしたが、仕掛けたその穴に自分が落ちた」⁶⁴⁸⁾のであった。こうして、〔フェドレッツは〕おのれの生命を悪しく終えた。

キリスト教徒たちは、神と聖母の手で解放され、喜び歓喜して言った。「神なるキリストよ、あなたは祝福されてあります。あなたによって、われらは火も水も通り抜けられます⁶⁴⁹⁾。われらを救う、良き御意によって、われらはよき慰めにたどり着いたのです。あなたは畏怖すべき方です、【554】誰かがあなたに抵抗しても、あなたの腕力に誰かが並ぼうとしても、あなたは全能です。〈〔あなたは〕貧しい者も豊かな者、命を奪う者も与える者、これらすべての者を、叡智をもって造る御方です。夜から昼を、冬から春を、嵐から静寂を、乾いた地から雨雲を造る御方です⁶⁵⁰⁾。〈謙虚な者を高みに上げ、罪人を地まで低くする〉⁶⁵¹⁾御方です」。

このように、〔神は〕、ロストフの地の謙虚なこの民を、残忍なフェドレッツによって滅亡させられた人々の憎しみを見て、訪問され、自らの僕たちを救ったのだった。正義にして篤信のアンドレイ公[D173]の、その力ある御手と伸ばされた御腕⁶⁵²⁾と、敬虔なる王の手をもって〔救ったのだった〕。

われらが⁶⁵³⁾これを書き記したのは、主教の位に誰かが飛びつくようなことをさせないためである。神が〔誰かを〕この位に呼び招くのである。あらゆる贈物は、あなたから、光の父から下されるものなのだから。人が祝福する者は、〔神にも〕祝福されるだろう。人が呪う者は、〔神にも〕呪われるであろう。こうして、フェドレッツは祝福することを望まなかったのだから、〔祝福は〕かれから遠ざかった⁶⁵⁴⁾。なぜなら、悪しき者は悪しく亡びるのだから。

648) 『詩篇』7:16からの引用。

649) 『詩篇』65:12(邦訳66:12)の文言が典拠になっている。

650) 教父ナジアンゾスのグレゴリオスの講話(第42話)からの引用。[Григорий Богослов Т.1 С. 498]

651) この文言は、前注のグレゴリオスの講話に含まれるが、本来は『詩篇』146:6(邦訳147:6)からの引用である。

652) 『申命記』7:19からの借用表現。

653) この「われわれ」は、キエフ洞窟修道院の年代記記者のことを指している。

654) 上注638の示した聖書からの引用句がここで反復されている。上注634で述べた「ヴラジミルからのフェドレッツ追放物語」は、この句で始まり同じ句で終わる構成で書かれていることが分かる。

参考文献

- Алексеев 1966 — Алексеев Л. В. Полоцкая земля (Очерки истории Северной Белоруссии XI-XIII вв.). М., 1966.
- Барсов 1865 — Барсов Н. П. Материалы для историко-географического словаря России. 1865.
- БЛДР Т. 1 — Библиотека литературы Древней Руси. Т. 1: XI-XII века. СПб., 1997.
- Войтович 2006 — Войтович Леонтій, Княжа доба: Портрели еліти. Біла Церква, 2006.
- Воронин 1962 — Воронин Н. Н. Андрей Боголюбский и Лука Хризостом (Из истории русско-византийских отношений XII в.) // Византийский временник. Т. 21. М.; Л., 1962. С. 29—50.
- Воронин 2007 — Воронин Н. Н. Андрей Боголюбский. М., 2007.
- Григорий Богослов Т. 1 — Святитель Григорий Богослов. Т. 1: Слова, М., 2015. (Полное собрание творений святых отцов Церкви и церковных писателей)
- Данилевич 1886 — Данилевич В.Е. Очерк истории Полоцкой земли до конца XIV столетия. Киев, 1886.
- Древняя Русь-Хрестоматия Т. 2 — Древняя Русь в свете зарубежных источников: Хрестоматия. Т. 2: Византийские источники. М., 2010.
- Древняя Русь 2015 — Древняя Русь в средневоековом мире. М., 2015
- Карамзин 1998 — Карамзин Н.М. Полное собрание сочинений в 18 томах. Том 2. История государства Российского. М., 1998.
- Колесов 1986 — Колесов В. В. Мир человека в слове Древней Руси. Л., 1986
- Кудряшов 1948 — Кудряшов К. В. Половецкая степь. М., 1948.
- Куза 1996 — Куза А.В. Древнерусские городища X-XIII вв: Свод археологических памятников. М., 1996.
- Літопис руський, 1989 — Літопис руський / Пер. з давньорус. Л. С. Махновця; Відп. ред. О. В. Мишанич. К.: Дніпро, 1989. (<http://litopys.org.ua/litop/lit.htm>)
- Литвина, Успенский 2006 — Литвина А. Ф., Успенский Ф. Б. Выбор имени у русских князей в X-XVI вв. М., 2006.
- Литвина, Успенский 2012 — Литвина А. Ф., Успенский Ф. Б. Внутридинастические браки между троюродными братьями и сестрами в домонгольской Руси // Древняя Русь. Вопросы медиевистики. 2012. № 3(49). С. 45-68.
- Лихачев 1985 — "Слово о полку Игореве" и культура его времени. Л., 1985.
- Мавродин 2002 — Мавродин В. В. Очерки истории левобережной Украины (С древнейших времен до второй половины XIV века). СПб., 2002.
- Новгородская первая летопись — Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов. М.;Л., 1950.
- Плетнева 1990 — Плетнева С. А. Половцы. М., 1990.
- Понырко 1992 — Понырко Н. В. Эпистолярное наследие Древней Руси XI - XIII: Исследования, тексты, переводы. СПб., 1992.
- Поппэ 1996 — Митрополиты и князья Киевской Руси / А. Поппэ // Подкальски Г. Христианство и богословская литература в Киевской Руси (988 – 1237 гг.). СПб., 1996. С.443-497.
- ПРП-2 — Памятники русского права. Вып. 2. М., 1953.
- ПСРЛ Т. 1, 1997 — Лаврентьевская летопись. (Полное собрание русских летописей. Том первый). М., 1997.
- ПСРЛ Т.2, 1843 — Полное собрание русских летописей: Том 2. Ипатьевская летопись. Изд. первое, СПб., 1843.

- ПСРЛ Т.7, 2001 — Летопись по Воскресенскому списку. (Полное собрание русских летописей. Том VII) М., 2001.
- ПСРЛ Т.9, 2000 — Летописный сборник, именуемый Патриаршей или Никоновской летописью (Полное собрание русских летописей. Т. 9). М., 2000.
- ПСРЛ Т. 24, 2000 — Полное собрание русских летописей: Т. 24, Типографская летопись. М., 2000.
- ПСРЛ Т. 25, 1949 — Московский свод конца XV в. (Полное собрание русских летописей. Том 25). М.; Л., 1949.
- Рапов 1977 — Рапов О. М. Княжеские владения на Руси в X - первой половине XIII в. М., 1977.
- Словарь-СПИ 3 — Словарь-справочник "Слова о полку Игореве". Вып. 3, Л., 1969.
- Словарь-СПИ 6 — Словарь-справочник "Слова о полку Игореве". Вып. 6, Л., 1984.
- Соловьев 1988 — Соловьев С. М. Сочинения Кн. 1: История России с древнейших времен Т. 1-2. М., 1988
- СПИ 1950 — Слово о полку Игореве: Сб. исслед. и ст. / Под ред. В. П. Адриановой-Перетц. М.; Л., 1950.
- Степенная книга 2012 — Латухинская степенная книга 1676 год / Изд. подгот. Н. Н. Покровский, А. В. Сиринов; отв. ред. Н. Н. Покровский. М., 2012.
- Стефанович 2004 — Стефанович П. С. Крестоцелование и отношение к нему церкви в Древней Руси // Средневековая Русь. Вып. 5. М., 2004, с. 86-113.
- Татищев Т. III, 1995 — Татищев В. Н. Собрание сочинений Тома II и III: История российская. Ч. II. М., 1995. Т. III
- Толочко А. 2005 — Толочко А. П. «История Российская» Василия Татищева: Источники и известия. М., 2005
- Толочко 2014 — Толочко П. П. Династические браки на Руси XII - XIII вв. СПб., 2014.
- Щапов 1989 — Щапов Я.Н. Государство и Церковь в Древней Руси, X-XIII. М., 1989.
- Энциклопедия СПИ-2 — Энциклопедия «Слова о полку Игореве»: Т. 2 (Г - И). СПб., 1995.
- Юревич 2004 — Октавиуш Юревич. Андроник I Комнин. СПб., 2004
- Balzer 1895 — Balzer O. Genealogia Piastów. Kraków, 1895.
- Goranin 1994 — Goranin E. Latopis kijowski 1159-1198. przełożył i komentarzami opatrzył Edward Goranin (Slavica Wratislaviensia 40). 1994, Uniwersytetu Wrocławskiego in Wrocław.
- Raffensperger 2016 — Christian Raffensperger Ties of Kinship: Genealogy and Dynastic Marriage in Kyivan Rus'. Harvard Ukrainian Research Institute Publications. 2016.
- イパーチイ年代記(1) — 中沢敦夫「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(1)―『原初年代記』への追加記事(1110～1117年)」『富山大学人文学部紀要』(61号, 2014年8月) 233～268頁
- イパーチイ年代記(2) — 中沢敦夫, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(2)―『キエフ年代記集成』(1118～1146年)」『富山大学人文学部紀要』(62号, 2015年2月) 287～353頁
- イパーチイ年代記(3) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(3)―『キエフ年代記集成』(1146～1149年)」『富山大学人文学部紀要』(63号, 2015年8月) 329頁～389頁
- イパーチイ年代記(4) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(4)―『キエフ年代記集成』(1149～1151年)」『富山大学人文学部紀要』(64号, 2016年2月) 321頁～372頁。
- イパーチイ年代記(5) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(5)『キエフ年代記集成』(1151～1158年)」『富山大学人文学部紀要』(65号, 2016年8月) 221～308頁

岡本 2010 — 岡本崇男「中世ロシア年代記における「異端」の概念について」『神戸外大論叢』, 61 卷, 第 7 号, 2010 年 11 月, 121 - 135 頁

木村 1971 — 木村彰一「イーゴリ遠征譚 4」『スラヴ研究』 15 号, 1971 年, 93 ~ 101 頁

スズダリ年代記訳注 [III] — 「スズダリ年代記訳注 [III]」『古代ロシア研究』 22 号, 2010 年。13 ~ 37 頁。

日食・月食・星食情報データベース — 「地球上どこでも 日食・月食・星食情報データベース」(<http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~x10553/>)

ノヴゴロド第一年代記 [II] — 「ノヴゴロド第一年代記古輯 (シノド本) 訳 [II]」『古代ロシア研究』 13 号, 1980 年。

ロシア原初年代記 — 國本哲男, 山口巖, 中条直樹訳『ロシア原初年代記』, 名古屋大学出版会, 1987 年

〔後記〕本稿は共同研究「初期ロシア年代記の史料学的研究」の成果であり, 共同執筆者, 藤田英実香は京都大学文学研究科西洋史学専修修士課程に在籍している。